

MESA/BOOGIE[®]

JP~2C[™]

取扱説明書

Hello from the Tone Farm

このたびはJP-2C™をお買い上げ頂きありがとうございます。そしてMESA/Boogieファミリーへようこそ！あなたが選んだこのアンプは、ビンテージ・チューブアンプが持つ最上級の品格と、スイッチで切り替え可能な、革命的な発明であるハイゲイン・チャンネルを併せ持ったモデルとして深い伝統をまっています。このアンプが持つ完璧な機能性を一目みれば、それがあらゆるものを満載した相手をインスパイアするツールでありながら、その中身はかつてMESAのMARK I™や最初期のモダン・ギターアンプ(偽物にご注意下さい)の革新的な回路や機能の伝統に基づいています。ですから、我々はあなたの選択をお祝いしたいと思います・・・いかなる点でも比類の無い、オリジナルであるこのアンプを演奏すれば誇らしい気持ちになることでしょう！あなたのように！

我々は45年以上に渡って、素晴らしいものを提供することをミュージシャンに対しての真摯な約束として考えており、我々は自分がそうして欲しいと望むように、一人一人の方に対応しており、選択したアンプについて本当に納得してもらえることを保証しています。また我々は、あなたの新しいアンプがあなたを微笑ませ、最初にアンプにプラグインしたものの数分であなたをインスパイアさせる自信があります。ですが本当に喜ばしいことは、最初にお金を払ったことが記憶から消し去られた後に、さらにあなたが新しくそしてインスパイアされるサウンドを発見することであり、JP-2Cはその真の価値を表し続けるでしょう。

我々は、ご自身のサウンドを実現するためにMESAの製品を選んで下さったことに感謝すると同時に、日々の努力が報われる手助けが出来ることを願っています。この取扱説明書は、それを実現するのに役立つことでしょう。あなたは今、限りない表現力を持つ楽器を手に入れているのです。さあ、遙かなる音楽の旅に出かけましょう。MESAのスタッフ全員があなたを応援します！

私が10代をすごしたNY、ロングアイランドは、音楽で溢れていました。Zeppelin、Rush、OzzyやVan Halenが爆発的な人気でテレビやラジオを席巻していました。近所中このガレージにもバンドがいて、皆ギターを演奏していました。その当時の東海岸は、ロックとメタルにどっぷりと浸かっていた。権威のある熟練ギタリストも当時をよくその様に表現していました。事実、Steve MorseやAl DiMeolaといった、私が若い頃から今に至るまで非常に影響を受けたギタリストに、このようにして最初夢中になりました。そしてMESA/Boogieのサウンドを初めて聞いたのもこの時代でした。

地元の楽器店に行き、(後に私はこの楽器店にギター講師として雇われることになります)、権威のあるギタリストがいった言葉を決して忘れません。“本物のギターアンプを試したいなら、Boogieを試しなさい”と言われ、すぐにそのファンキーなアンプ名に興味をそそられました。実際に自分のギターでBoogieを試し、即座にBoogieマニアになりました。アメリカ製オールチューブアンプの魔法の轟音に小さな楽器店が包まれた瞬間でした。この瞬間を決して忘れません。このアンプはいったい何者なんだ？ペタルマ製？ペタルマってどこだ？北極でサンタの妖精たちが製作しているのかのように響きました。北カリフォルニアのワイン産地にトーンの妖精が住んでいて、真空管と回路に囲まれ、一生懸命必死に、このような人生を変えるようなアンプを製作していたのかもしれない。そうだったかもしれないよね？私の冗談はさておき、この一件以来、様々な環境や状況で、Boogieと運命の出会いをし続けました。

例えば、地元のギターヒーローが神のようなサウンドを奏でているのを聴き、そのギタリストが使用していたアンプはBoogieでした。また、Pat ThrallがJack Bruce公演で演奏しているのを見に行ったとき、Boogieとフロントに名前が付いている小さなヘッドアンプから奏でられる連鎖した音に圧倒されました。強烈なギタートーンに包まれた決定的な瞬間の1つは、Metallicaの”Master Of Puppets”を初めて聴いたときです。そしてそのサウンドはあの伝説のMark II C+から奏でられていることに気が付きました。

言うまでもなく私はBoogieマニアになりましたが、Boogieコレクターというだけでは終わりませんでした。私の知らぬうちに、私のギタリストとして生み出してきたスタイルは、Boogieサウンドとして連想されるようになりました。プレイヤーとして、この事実を知ったときの衝撃を言い表すことは出来ません。

いつもBoogieの新製品を手に入れ、最初にボリュームを上げてかき鳴らす時には、魔法のような体験ができます。今でも初めてBoogie製品を大量発注したときのことを思い出します。頼んだ製品は、Quadプリアンプ、295パワーアンプ、Midi Matrix、Abacus Midiコントローラーとショックマウントラックでした。これらの製品が届くのを待ちわび、自宅に配送トラックが止まるのが目に入りました。まるでクリスマスのような気分でした！

私を虜にした、MESA/Boogie製品のサウンドクオリティ、製品品質、芸術性が最高なだけでなく、カリフォルニアの小さな会社の即座のサービスと継続的なケアの素晴らしさにも気が付きました。その当時の私は、まだ有名でもなく、プロミュージシャンでもないただの若いギタリストだったにもかかわらず。私は未だに初めてMESA/Boogieのテクニカルサービスに電話かけ、Doug Westと話したときのことを覚えています。新しいMESA/Boogieアンプを手にしたロングアイランド在住のキッズだった私を、まるでMetallicaのメンバーであるかのように電話で対応してくれました。その電話から、Doug、Randy、JimやBoogieファミリーとの関係が現在に至るまで続いてきました。これは私にはかけがえのないことです。

Dream Theaterにまで話を進めると、Dream Theaterは幸運にも、若い情熱をすべて音楽キャリアに注ぎ込むことができました。MESA/Boogie社の親切さ、サービス、誠実さのお陰で、私はプロミュージシャンになることができました。その為、今までリリースしたライブレコーディング、スタジオレコーディングも含めたすべてのDream TheaterのアルバムでMESA/Boogieのアンプを使用しています。2005年に出したソロアルバム”Suspended Animation”でもMESA/Boogieのアンプを使用しています。

”Jaws Of Life”や”Damage Control”のオープニングリフほどMark II C+の象徴的なサウンドを表現している

リフはありません。” Glasgow Kiss”には大好きでよく使用している表現力があり、流れるようなリードトーンを定義するサウンドが収録されています。

制作を通して、私がBoogieに長年求めていたものを理解することができました。それはMk II C+でした。最終的には、Mk II C+の名を冠した私のシグネチャー・アンプのリリースに至りました。私の親友、有名なラックビルダーでありワイン業界の大物Mark Snyderが、現在では伝説のアンプとして名高いMk II C+を私に最初に紹介してくれました。今でもその日のことをはっきりと覚えています。Markのブルックリンの自宅へ行き、初めてC+を演奏しました。私に言えることは、C+を初めて演奏したという体験は…神聖なものでした。C+を鳴らした瞬間に、探求するトーンがC+を演奏したことによってすっかり変わってしまったと悟りました。Studio Preamp、Quad Preamp、Dual Rectifier、Triple Rectifier、Road King、Triaxis、Formula Preamp、Lonestar、Mk II B、Mk III、Mk IVやMk V(いくつか名前をあげるならです!) を実際に使用してきました。これらアンプは、恐ろしいほど素晴らしいトーンモンスターアンプです。ですが、II C+が一番私に影響を与えました。

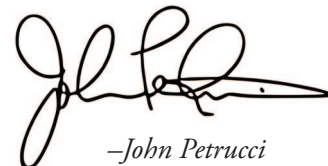
次第に私は80年代に生産されたII C+の個体差研究を始めました。製作年代によって、異なるトランスフォーマー、パワーバリエーション、オリジナルのシルバニア製真空管を使用している等の違いがあります。研究をしているうちに、自分がなんだかC+鑑定家になってきているように感じ始めました。研究過程で、リアパネルにこっそり” Mike B”と黒いマーカーで書かれているアンプがあることさえも発見しました。” Mike B”とサインが入っているか入っていないかで、そのMk II C+アンプが本当に” +”バージョンなのかどうか判別できるんです! 私は特有のサウンドを奏でるバージョンのMk II C+に魅かれていくようになり、そのMk II C+をツアーやスタジオで使用するようになりました。

もし16歳だったころの私に、将来MESA/BoogieがII C+と自分の名前を冠したモデルを出すことになるよと言っても、そんな話は全く信じられないと笑い飛ばすでしょうし、そんな話をするような人は意地悪なペテン師だと聞く耳を持たないでしょう。ですが、…ああ、そんな話が現実になりました。JP-2Cが誕生したのです! シグネチャーアンプの開発決定時、すぐに焦点は決まりました。それは、どこからどう見ても正真正銘のC+リイシューにすることでした。巨大なトランスフォーマーからサーキットに渡り、文字通り全てにおいてです。Randyはその目標を有言実行しただけでなく、オリジナルC+を凌ぐアンプに仕上げました。C+愛好家やトーンマニアにはにわかに信じがたい話かもしれません。ですが私たちはその不可能を達成したのです!!!

私にとっては、トーンの本質さえ変わらなければ、制限のあったオリジナルII C+からパフォーマンス面を向上させ、21世紀の最新機能を取り込むことが重要でした。独立3チャンネル、独立EQ、1つでなく2つのリードチャンネル、どのチャンネルにも設定可能な2つのグラフィックEQ、MIDI、内蔵CabClone DI、モダンモードのSHRED機能がオリジナルII C+にはない仕様や機能です。ライブやレコーディングで使用するとき、私が求める全てを満たしてくれるアンプを作ることが目標でした。JP-2Cは、すべてのギタリストが求める地球上でもっとも最高のクリーン、クランチ、リードサウンドを創り出します。しかもどのセッティングでも、即時にその最高のサウンドを奏でるのです。JP-2Cのこと、お分かりいただけただけではないでしょうか。私たちのチャレンジ、ミッションは、最高のギターアンプを創り出すことでした。その目標を達成したと思っています。皆さんにもそう思っていたら嬉しいです。

ギターアンプの歴史上で最高のアンプと評されているアンプに、自分の名前を冠しリリースできたことほど光栄なことはありません! 素晴らしいMESA/Boogieファミリーや技術革新チーム、皆様のおかげでこのような機会をいただき言葉にできないほど恐縮に感じると同時に言葉にできないほど感謝しています。JP-2Cに流れる歴史、製作にかかったハードワークも含め、皆さんJP-2Cを楽しんでください!

ここからはみなさんがJP-2Cと共に冒険をしてください。JP-2Cがトーンの素晴らしさ、アーティスティックで貴重な体験を皆様にもたらしめますように。



-John Petrucci

JP~2C™

目次

使用上の注意	
イントロダクション	1
概要	2-5
演奏を開始するには	6
役立つヒント	7

フロントパネル

チャンネルについて	8-10
-----------	------

コントロール

GAIN(ゲイン)	10-11
MASTER(マスター)	11
PRESENCE(プレゼンス)	11-12
TREBLE(トレブル)	12-13
MID(ミッド)	13
BASS(ベース)	14
5-BAND GRAPHIC EQ(グラフィック イコライザー) x 2	14-15
LOOP SELECT(ループセレクト)	15
REVERB SELECT(リバーブセレクト)	15
CHANNEL SELECT(チャンネルセレクト)	16
SHRED(シュレッド)	16
POWER(電源)スイッチ	16
STANDBY(スタンバイ)スイッチ	17

リアパネル

電源コネクタ	17
FUSE(フューズ)	17-18
REVERB(リバーブ)	18
HEADPHONE(ヘッドホン)	19
SLAVE(スレイブ)	19
SPEAKER(スピーカー)アウト	20
FX LOOP-SERIES(エフェクトループ・シリーズ)	20-21
CabClone™ D.I.(キャブクロン)	21-22
• SPKR ON/SPKR OFF(スピーカーON/OFF)	22
• CLOSED BACK/OPEN BACK/VINTAGE(クローズドバック/オープンバック/ビンテージ)	22-23
• CAB CLONE D.I.(XLR OUTPUT)	23
• LIFT/GROUND(リフト/グラウンド)	23
• +4/-10(LEVEL)	23-24

JP~2C™

目次

リアパネル(続き)

MESA FTSW(フットスイッチ)	24
MIDI THRU(スルー)/OUT	24
MIDI IN	24
MIDIチャンネル	24-25
100 W / 60 W (ハーフパワー・スイッチ)	25

MIDI使用マニュアル

機能	26
電源の入れ方	26
MESA FTSWジャック	26
MIDI INPUTジャック	26
MIDI THRU/OUTジャック	26
MIDIチャンネル	27
ユーザープリセット	27-28
ユーザープリセット ダンプ(書き出し)とロード(呼び出し)	28
MIDIコントロールチェンジナンバー	29
ソフトウェアのアップデート	30
ソフトウェアバージョン SysEx メッセージ	31
JP2C ファクトリー プリセット	31
JOHN PETRUCCI SAMPLE SETTINGS	33
FACTORY SAMPLE SETTINGS	34
USER SETTINGS	35
真空管のノイズについて	36-37
スピーカー・インピーダンスマッチング/接続ガイド	38-43
真空管交換チャート	44
パーツ・シート	45

使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従って設置して下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発生する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは2つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のものです。自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意：安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意：必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはプロスベック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい!

JP~2C™

取扱説明書

イントロダクション(・・・そして少しの歴史について) :

もしあなたがMESA/Boogieについてご存知でしたら、我々が一度だけの限定生産を行った カルロス・サンタナ King Snake トリビュートモデルを除いては、シグネチャーアンプやアーティストモデルを発表したことがないということもご存知かもしれません。

過去40年に渡って、MESAの製品を使用して音楽の歴史を造り続けているアーティスト/スター達の長いリストに意味があるとまではいいませんが・・・やはり意味があります！長年にわたって世界中の最も影響力のあるギタリスト達がMESAの広告やビデオで露出しているのを見たことがあると思います。その製品自体は、我々がストックしていたアンプでした・・・あなたが所有していたかもしれないものと同じ仕様のアンプです。我々から生まれたアイデアとあなたのようなプレイヤーからの要求が合わさって、妥協の無いスペックが築き上げられたのです。

我々は常に、魔法のような何かを創造することが最良と考え、ほとんど全ての人にインスピレーションを与えるものと信じてきました・・・例えば本当に素晴らしい道具は、エンドレスに適応し続けるようなことです。そのように、それぞれのアーティスト有名無名問わずが、使用したいように使用してユニークかつ唯一のサウンドを作り出すことが出来るのです。加えて、我々はマネージャー達とエンドース契約をしてビジネスを行うことに乗り気でなく、結果としてシグネチャーまたはアーティストモデルといったアイデアを敬遠していました。

また時の流れが示しているように、アーティストの個人的な名声や、音楽ジャンルさえもが消えてしまう中で、素晴らしいサウンドと柔軟性を持つ楽器は数十年経っても持ちこたえ、生き残ることが出来るのです。このほんの少しの例が、我々のMARK II C+やDual Recifier、TriAxis、Mark IVそしてBass 400+なのです。憧れの対象となる、"アイコン"というものがあると思います。クラシックです。我々は、クラシックな製品・・・音楽ビジネスの荒波の中で、時の試練に耐え、キャリアを乗り越えるものを造るために、懸命に努力しているのです。

しかし、もしあなたがエレキギターを演奏し、また特にこのアンプを購入されたとしたなら、John PetrucciやDream Theaterを聴いたことがあると思います。また、我々が30年に渡って彼のアンプを製造してきたこともご存知かもしれませんー繰り返しますが、あなたのサウンドを作り出すアンプと全く同じ仕様のアンプです。

Johnは我々に、本物であることとアーティストに捧げられたものであるということを実証してくれました。彼のビジョン、彼のゴール、そしてそれを達成するための不屈の信念。素晴らしい演奏とサウンド両方への彼の尽きることの無い探究。彼の誠実さと愛情、数十年に渡って、スターになっても影響を受けることの無い謙虚さ。共通の関心事について我々が彼と共有している友情と兄弟のような感情と、永続する価値・・・未来に渡って誇れる何かを創造しようとする欲求。簡単に言えば；彼の誠実さ、情熱そして素晴らしいトーンへの愛です。

これらや他の多くの理由によって、我々はここMESAにて型を打ち破り、彼の才能と彼の長きに渡るアートへの献身、そして我々との長い結びつきを祝って、誇りを持ってこのMESAの最初の製品を紹介します；JP-2Cです。我々の最初の、限定生産でないシグネチャーアンプです。

そして、そうです・・・それは II C+です！とてもたくさんのレコーディングアーティストや世界中のMESAの熱狂的なファンやトーンフリーク達が切望し、探し回っていた伝説的なアンプの次世代におけるリイシューです。この II C+だけが、全てのしかしほとんどがお高くとまったコレクター達にとって、オリジナルのアンプの価値をすぐに下げてしまうものとなるでしょう。何故か？それは単純に、もっと良いものだからです。全てにおいてです！

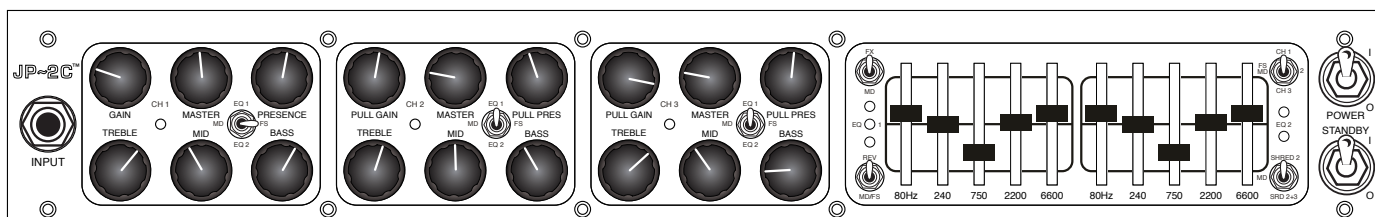
信じられないぐらい素晴らしいトーン、より多くの機能、使いやすさ、より多くのコントロールとチャンネル/モード、MIDIチャンネルとアクセスできる機能、内蔵のCabClone DI、3つのディスクリートチャンネルはチャンネル間で影響を及ぼさず、そして最も重要なことは、オリジナルが出来てから30年に渡って我々が学んできた、企業秘密や魔法のトーンのトリックがこのアンプに含まれているということです。より激しいアタックとフォーカスされたボイス、タイトなローエンド、流れるようなゲイン、より複雑な倍音のレイヤー、そして燃えるように、素晴らしく切り刻むようなボイスの本質を持っていますが、それこそがまさしく II C+なのです。

概要：

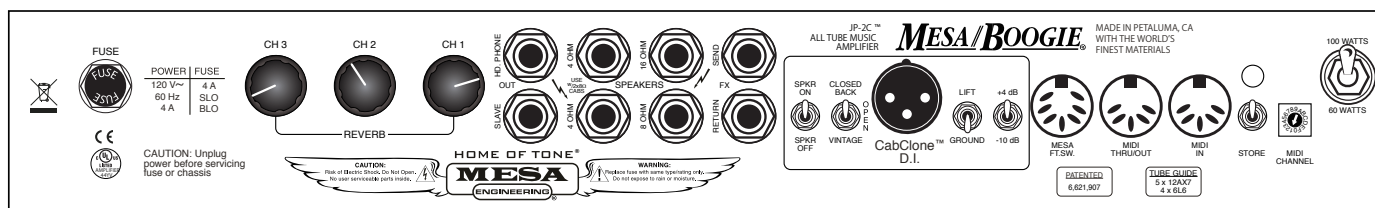
レーシングカーや戦闘機のように、JP-2Cは余計なものが削ぎ落とされ、シンプルで効果が得られるようになっています。それによってポイントA(インスピレーション)からポイントB(またはToneの意味でポイント"T"というべきかもしれません)まで、出来るだけ素早く到達することが出来ます。その専用の構造は、1つのゴールを目指して一切の妥協がありません；そのゴールとは、Johnのレコーディングやステージに必要な究極の柔軟性をもちながら、これまでで最もアグレッシブかつピュアなサウンドを持った II-C+をパッケージにして届けることです。全てはヘビーです！しかし、もう少し具体的な特徴があります；出来るだけクリーンなサウンドが得られるようにヘッドルームが最も広く、またクラッシュリズムがリードチャンネルのゲインで得られ、しかしそれはタイトで迫力のあるものとなっています。そして、究極のBoogieリードチャンネルはよりサチュレーションを伴っており、成層圏に届くような単音のソロ演奏でもテクニックやスピードに追従します。

そのスピリットにおいてJP-2Cは他のMESAアンプと違い、アンプのチャンネルのモードスイッチのコンセプトが先を行くものになっています。つまり、3つのチャンネルのそれぞれが、3つの音楽スタイルやその必要に応じて対応するものとなっているのです。各チャンネルごとにある唯一のスイッチが、チャンネルごとのグラフィックEQの状態を切り替え、搭載されている2つのEQのどちらかを選択するものとなっています。

フロントパネル: JP-2C™



リアパネル: JP-2C™



概要：フロントパネル

CHANNEL(チャンネル) 1

チャンネル1は、クリーンサウンドに特化しており、プリアンプ部において最大のヘッドルームを最大限活用しています。パワーセクションのクリップは、100W出力での大音量にも関わらず、チャンネル1でいくらかのオーバードライブを得るために利用されることがあるかもしれません。MIDコントロールノブの上半分(12時以上)をブーストすることによってドライブが得られると思うかもしれませんが(使用されているMIDポットが他のアンプで使用されているMID/BOOSTコントロールと同じ値とテーパーであるため)が、プリアンプ部のヘッドルームが広がることにより、それらのアンプと比較すると全体のドライブの量は減少しています。この事実が、よりパワフルなMIDコントロールをただの・・・より周波数帯が広い、他のトーンコントロールとのミックスの中で中域の抜けを良くするMIDコントロールとしているのです。

注意： MARK II-C+の熱狂的ファンの方へ - チャンネル2と3について；JP-2Cのチャンネル2と3ですが、シンプルに操作できるように、オリジナルのMARK II-C+のLEADモードと比較するとパネルのレイアウトからVOLUME 1とLEAD MASTERコントロールが取り除かれています。LEAD MASTERコントロールは、JP-2Cにおいては重要なコントロールではなく - MARK V™でそうであったように -、モード(II-C+) /チャンネル(JP-2C)のサウンドでは非常に小さい役割しか果たしていません(主に、ハードワイアードがONの際に、Pull BRIGHTがどれだけ効くか、聞こえるかという部分に影響します)。この内部の調整は、我々がいつも使う同じ基準によって決定されました；すなわち、トーンとパフォーマンスです。

VOLUME 1は、JP-2Cにおいては少し繊細かつ非常に重要な部分で、(MARK V™がそうだったように)両方のチャンネルにディスクリート抵抗がある内部プリセットとして最大の効果を発揮します。チャンネル2のセッティングは、最も激しく厚い、ハイゲインのクランチ・リズムサウンドを作ることを想定されています。チャンネル3も非常に似通っていますが、ゲインが少し高めに設定されているので、ボーカルのように歌う単音のリードサウンドに最適です。(外部で調整が出来ない)あらゆる性格を持った失われたVOLUME 1(GAIN)コントロールは、内部調整の選択肢として考えられていました。それは、調整され、検討され、また再調整され—それが何度も—文字通り何百回と(MARK Vのプロジェクト同様)繰り返され—アタックや倍音の広がり、豊かなゲインとトーンそして爆発するようなアグレッシブさを包括した究極のコンビネーションに辿り着いたのです。結果としてユーザーにとっては非常に使いやすいアンプとなり、コントロールを回せばMARK II-C+のベストのシグネチャーサウンド、吹き飛ばされるようなサウンドが素早く、悩むことなく得られるのです。オリジナルのパフォーマンスに対して妥協することなく、さらにオリジナルのコントロールレイアウトに修正を加えて、ダイヤル操作による素晴らしい恩恵が得られます。

CHANNEL(チャンネル) 2

チャンネル2は、JP-2Cのクランチジェネレーターです。このチャンネルは、アグレッシブでタイトなオーバードライブ・リズムサウンド専用で、通常LEADモードやLEADチャンネルで得られるような量のゲインをもたらします。実際、これはLEADチャンネルです・・・MARK II-C+のオリジナル回路のLEADチャンネルなのです。PAGE 2の一番下の"注意"で述べたように、ゲインはこのカテゴリーのサウンドでは最大のパフォーマンスを発揮するように調整されており、確かにあらゆる種類のリードサウンドにも使用できるのですが、JP-2Cのクランチ・リズムワークのチャンネルに特化した、最初のベストの選択肢なのです。

チャンネル2で、最も有名かつ今やクラシックとなったMARK II-C+の迫力のあるリズムサウンドを得るには、5-BANDグラフィックイコライザー(通常はEQ 1)を使用し、スライダをクラシック Vカーブ(後述します)に設定して、ミッド(中域)をカットし、トップとボトムエンドをブーストします。これはJP-2Cに搭載されているグライコで最も広く使用される設定で、ハイゲインチャンネルのそれぞれで異なるサウンドが得られます! つまり、この優れた柔軟性と改良された精密さによって、バックイングとリードの両方において真に妥協の無いサウンドを作ることが出来るのです! これはオリジナルのMARK II-C+においては不可能だったことであり、それゆえに当時多くのトップアーティスト達は2台のMARK II-C+とMIDIスイッチャー(ここに含まれます)をラックシステムの中で使用し、欲しいサウンドに応じて異なるセッティングのアンプを呼び出していたのです。

CHANNEL(チャンネル) 3

チャンネル3は、鋭いリードサウンドを念頭において開発されました。まず優れた点としては、必要に応じてまたはそれ以上に、最上のMARK II-C+が持っていた素晴らしい爆発するようなアタックと激しいサステインそして複雑な倍音を得られるということです。アンプの名前と同様、我々はそれをやり遂げたと感じています。チャンネル3は、JP-2Cに搭載されたパワーセクションのストレートな100W(対してサイマルークラス™は90W)によって、オリジナルの持つ全ての繊細なパフォーマンスを得ることが出来ます。このパワーセクションの差は、Johnが本当によく演奏する音楽スタイルに準じたもので、実際、彼が所有しているたくさんの II-C+の中で、彼が本当に気に入っているアンプは100Wモデルなのです。フロントエンドのプリアンプ・ゲインの設定は、単音での演奏に効果を発揮し、無くした II-C+のVOLUME 1コントロールの役割を担う内部プリセット抵抗は、先に述べたように少し高めに設定されており、厚みがあって丸い単音のサウンドが得られます。それゆえ、チャンネル3のキャラクターは少し暖かみがあり、分厚くコンプレッション感のあるものとなりますので、あらゆるスタイルのソロ演奏やゲインが必要とされるサウンドに適しています。

PULL GAIN(プル・ゲイン) & PULL PRESENCE(プル・プレゼンス)

オリジナルの回路からはVOLUME 1とLEAD MASTERが取り除かれていますが、それらに加えて我々はPULL SHIFT(プル・シフト)機能もオリジナル II-C+のレイアウトから変更し、操作をシンプルにし、かつハイゲインチャンネルである2と3を強調するものにしました。オリジナルのBASSコントロールに備わっていたBASS SHIFTを除いて、オリジナルの II-C+のLEADモードにあった全てのPULL SHIFTは、常にLEADモードだけで機能していました。これは、VOLUME 1 PULL BRIGHT、TREBLE SHIFT、PULL DEEP(MASTERコントロール部)そしてLEAD BRIGHT(ここでは消されています)、LEAD MASTERを含みます。このコンビネーションは、MARK II-C+の熱狂的かつ物知りなファンの間では歴史的に最もポピュラーで、演奏していて我々の耳にも常にベストなサウンドが得られるために、聞き取り調査を行ったプレイヤーやアーティストはいつもこのコンビネーションをSHIFTされた状態で使用してました。

これらのオリジナル回路からの変更に加えて、我々は2つの新しいPULL SHIFTオプションをJP-2Cに加えしました。GAINコントロールのPULL GAINと、PRESENCEコントロールのPULL PRES(シフト)です。

PULL GAINは、(取り除かれ、内部で設定が固定された)VOLUME 1コントロールの設定を、約1目盛り分アップします・・・言い換えると、ほんの少しです。つまり、ポットがプルされていないときの既にプリセットされたゲイン/ドライブに、ゲインが加えられるということです。このゲインの増加は、チャンネルのプリセット・ゲインの位置と相対的で、言い換えると、チャンネル3のPULL GAINの設定がONのときは、チャンネル2のPULL GAINがONのときより約1目盛り分ゲインが高くなっています。両方のチャンネルにおいて、このPULL GAIN機能は曲のある部分や音楽スタイルによってゲインを少しだけブーストさせることが出来ます。

PULL PRES機能はPRESENCEコントロールに備わっており、大きく異なる2つのプレゼンス周波数を選択可能です。プル(ノブを引っ張った状態)のときは、我々が45年に渡って培った由緒ある周波数が選択されますが、TREBLEコントロールの周波数よりもトップエンドがかなり高い範囲をコントロールします。プッシュ・イン(ノブを押し込んだ状態)のときは、PRESENCEコントロールは少し低めの周波数をコントロールします。TREBLEよりはまだ上ですが、伝統的なPRESENCEより低めの周波数でカットとフォーカスがされており、ハイゲインのクランチリズムサウンドでまとまりのあるサウンドが得られます。

異なる周波数が含まれていること、またチャンネル2と3ではPRESENCEのポットのテーパーの割合がよくブレンドされているため、2つの(プッシュとプル)PRESENCEモード間では、通常再調整の必要が出てきます。機能OFFであるプッシュ・インモードでは、バランスの取れた(オープンな)サウンドを得るためにPRESENCEコントロールを高めに設定する必要があります。一方、プル・アウトモードではPRESENCEコントロールを低めにし、高めの周波数をブレンドすることによって暖かいサウンドを得ることが出来ます。というのは大体の場合、高めの周波数は、高くなるほど基音とその倍音からサウンドが乖離し始めるのです。元々の(高めの)PRESENCE周波数について、我々は歴史的にコントロールの設定を11時半以下にすると、バランスのとれた暖かいサウンドが得られることを発見しています。新しい、より低めのPRESENCE周波数の選択肢については多くの場合に用いることが出来ますが、それはスペクトラムの中で残りの周波数に近く、あまり乖離しないからなのです。

5-BAND GRAPHIC EQ(グラフィックイコライザー) x 2

前述のように、それぞれ3つのチャンネルに唯一アサイン出来るのが、2つの5-BANDグラフィックイコライザー(グライコ)のスイッチです。この3ポジションのトグルスイッチは、3つのチャンネルのどれでも、どちらかのEQにアサインすることが出来ます。スイッチ上側でEQ1、下側でEQ2を選択します。スイッチを真ん中にするとうEQセクションがバイパスされ、チャンネルごとにあるロータリータイプのTONEコントロールのみが唯一効果を得られるEQとなります。

10個あるEQフェーダー(ポット)がフロントパネルのEQのウィンドウに搭載されており、2つの独立した5-BANDグライコとなります。またそれらと共に、この部分には他の4つの機能を切り替えるためのコントロールスイッチも搭載されています。それらは、エフェクトループ、リバーブ、チャンネル選択そしてSHRED(シュレッド)ボイスモードを切り替えるスイッチです。EQウィンドウ内のEQフェーダーの近くにあることで、1箇所でお好みのサウンドに調節することが出来るため、MIDIプログラムナンバーにてお好みの設定を保存する際にパネル上をあちこち移動する必要がありません。もちろん、お好みに合わせてチャンネルを選択し、GAINやTONEコントロールを設定した後のこととなります。

FX (エフェクトループ)

この2-ポジションのスイッチで、直列のエフェクトループを常にIN(イン)、またはバイパスに切り替えます。

REV (リバーブ)

このグローバルタイプのREVERBスイッチで、以下の3つから選択出来ます; OFF(全てのチャンネルをバイパス)/ FS (JP-2Cフットスイッチからフットスイッチ操作可能) / 常にON(MIDIにてアサイン可能)

チャンネルセレクト

この3-ポジションのトグルスイッチは、JP-2Cフットスイッチが接続されていないときに、手動で3つのチャンネルを切り替えることが出来ます。チャンネル2はデフォルトのチャンネルとなるため、スイッチが中心から外れた位置にあるときはチャンネル2が選択されます。トグルスイッチを上側に切り替えるとチャンネル1、下側だとチャンネル3にアクセスします。

SHRED(シュレッド)

JP-2Cが新たに搭載した、ハイゲインチャンネルにあるこのボイス機能は、オリジナルのMARK II-C+のLEADモードにはなかったもので、トップエンドのレイヤー(重なり)をより強調するものです。この3-ポジションのスイッチはEQ2枠の右側下に位置し、チャンネル2と3のハイゲインモード(チャンネル)のみにアッパーハーモニックのレイヤーを加えます。特にハイゲインのクランチリズムサウンドに効果的で、サウンドが攻撃的かつ立体的になり、また倍音のもやがかり、迫力のあるゲインの壁が築かれます。

単音のソロ演奏には、SHRED機能によってくすぶるような、ジリジリとしたサウンドとなり、炎のようなリードサウンドに切迫感が加わります。SHRED機能は、(抑えたりバランスを取る意味で)TREBLEとPRESENCEの両方を同時に操作することでアタックをソフトにし、またポイントをはっきりすることによって、伸びやかな素晴らしいソロサウンドを得ることが出来ます。

注意: GAINを高めに設定しているときは、TREBLEを高く(2時より上)に設定しないで下さい。金属的なハウリングノイズが起こる可能性があります。

またSHREDは、マホガニーやバスウッドといったダークなサウンドの楽器、またはショートスケールの楽器に非常にマッチします。これらの楽

器は、SHREDが持つオープンさによって効果を得ることが出来ます。またアルダーが使われている、中域にパンチとフォーカスがありボトムエンドが高めのギターにもSHREDモード/機能は良い効果を生み出します。

この新しいボイスモードは、ヘビーの百科事典である既にパワフルなサウンドを持ったJP-2Cにより柔軟性を与えます。また、それは1つもしくは両方のハイゲインチャンネルでONにすることが可能で、EQと併せて使用すれば究極のクランチリズムまたリードサウンドがスイッチ操作ひとつで、同じアンプで得られるのです。自由に！

概要：リアパネル

REVERB(リバーブ)

通常MESAのアンプのコントロール配列では、チャンネルごとのREVERBコントロールがリアパネルの左側に設けられています。それぞれのチャンネルで独自に豊かなオールチューブのリバーブを設定することが可能で、MIDIプログラムでチャンネルとセッティングの状態を保存することも出来ます。

HEADPHONE OUT(ヘッドホンアウト)

JP-2CにはCAB CLONE™ D.I.レコーディング・インターフェースが搭載されており、HEADPHONEアウトでその素晴らしいサウンドを聴くことが出来ます。このスピーカーをシミュレートしたステレオの1/4"アウトはアンプパワー部とCAB CLONE DIアウトのスピーカーシミュレート回路を含む全てを捕えます。また、スピーカーが接続出来ない環境でも優れたサウンドでの楽器練習をすることが出来るので便利です。

SLAVE(スレイブ)

標準の1/4" SLAVEアウトでSPEAKERアウトから捕えた信号を供給しますが、これは生の、加工されていない信号です。加工され、EQが施され、スピーカー補正されたものでも、インパルス・レスポンス信号/サウンドのようなレコーディングやライブでコンソールにインターフェース接続するのに適したものではないので、混同しないで下さい。この信号は、ライブ演奏時に出力を加えたり、ラックシステムを使用する際に追加の(外部の)サテライトアンプ/スピーカーに信号を供給するためのものです。

SPEAKER(スピーカー)

標準のSPEAKERアウトで、お好みのスピーカーに信号を供給します。通常の抵抗値となっていますので、このコンビネーションジャックで大抵のスピーカーに対応出来ます。

CABCLONE™(キャブクローン) D.I.

今回JP-2Cには、人気のあるCAB CLONE™ D.I.レコーディング・インターフェースを搭載しており、マイキングすることなくダイレクト・レコーディングが可能ですが、スピーカーからのサウンドとダイレクトサウンドのミックスも可能です。単体のCAB CLONE™からそのまま引き継がれた機能は以下です；CLOSED BACK(クローズドバック) / OPEN BACK(オープンバック) / VITAGE(ビンテージ) 切替スイッチは、異なるサウンドスタイルに適応し、優れた順応性を発揮します。その他、XLRバランスアウト(スピーカーMUTE含む)、INST/LINEレベル切替スイッチ、そしてGROUND/LIFT(グラウンド/リフト)スイッチを装備しています。

注意：SPKR ONの位置にスイッチを設定しているときは、スピーカーアウトにスピーカーが接続されていることを必ず確認して下さい。接続されていない状態で使用するとアンプにダメージを与える恐れがあり、またその場合は保証対象外となりますので十分ご注意下さい。スピーカーや外部抵抗(レジスター等)が無い状態でアンプをSPKR ONを選択して使用すると、アウトプットトランスにダメージを与えたり、アンプが正常に動作しなくなる恐れがあります。

FTSW(フットスイッチ)とMIDI

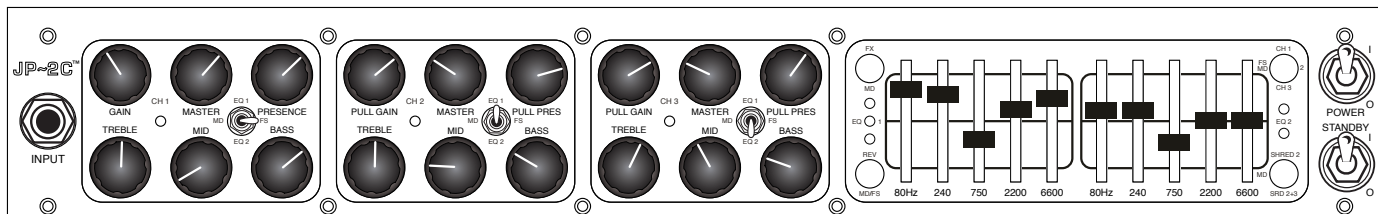
3つのDINジャックが装備されていますが、1つは7ピンのJP-2Cフットスイッチ用で、2つは標準の5ピンDINジャックでMIDI INとTHRU/OUT用となります。これらを使用すれば、JP-2Cの素晴らしいサウンドと機能に幾通りもの方法でアクセスすることが出来ます。STORE(ストア)トグルスイッチは、256個のMIDIプログラムナンバーに、全てのチャンネルでお好みのサウンドをワンタッチで保存することが出来ます。またMIDIチャンネル・ミニロータリーセレクターで、コントローラーの操作で使用するMIDIチャンネルを同期させます。

演奏を開始するには

1. アンプを開梱し、全ての真空管がソケットにしっかりと接続されているかチェックします(運搬中に接続が少し緩くなっていることがあります)。
2. 付属の電源コードをリアパネルの電源コネクタに接続します。
3. JP-2Cのフットスイッチを開梱し、アンプのリアパネルの右側にあるフットスイッチ用のDINジャックに7ピンのDINケーブルで接続します。もし各チャンネルや機能にMIDIコントローラーを使ってアクセスするときは、コントローラー(またはPC)をJP-2CのリアパネルのMIDI INジャックに接続します。
4. 使用するスピーカーキャビネットを、JP-2Cのリアパネルの真ん中あたりに配置されたスピーカーアウト(インピーダンスがマッチしているジャック)に接続します。フル出力とベストのトーンバランスが得られるよう、最初は8Ωジャックの使用をお勧めします。
5. STANDBY(スタンバイ)スイッチがスタンバイの位置になっていることを確認しながら、フロントパネル右側のPOWER(電源)スイッチをONの位置(上側)にして最低30秒間待機します(真空管を高電圧で使用するためのウォーミングアップが目的です)。真空管をより長くお使い頂く為に、コールドスタート時は毎回この手順に従って下さい。
6. エフェクトループを使用する場合は、使用機器をJP-2Cに実際に接続する前にこの取扱説明書のエフェクトループの項をよくお読みになり、正しい接続方法や操作について理解するようにして下さい。またエフェクトループを実際に使用する場合は、お使いの機器のINPUTレベルが中ぐらいから低めになっているかをチェックして下さい。JP-2CのSTANDBYスイッチを上側にしたら、機器のレベルをゆっくり上げて、アンプからのSENDレベルがチャンネルごとに確認出来るかチェックして下さい。
7. 後に出てくるサンプルセッティングを参考に、それぞれのコントロールをこれらに近いセッティングにして、トーンの新しい世界を開いてみて下さい。覚えておいて頂きたいのは、これは数多の可能性の中のほんの1つのセッティング例に過ぎず、あなたのお好きのように調整して下さい。
8. STANDBYスイッチをONの位置(上側)にします。あとは演奏を楽しんで下さい!

サンプルセッティング

あなたがまだこの新しいアンプを演奏していないとして、以下はたくさんあるチャンネルのセットアップ方法のほんの一例です。この例では、チャンネル1で純粋なクリーンサウンド、チャンネル2でヘビーなクランチリズム、そしてチャンネル3で燃えるようなハイゲインのリードトーンを得る設定になっています。またこのセッティングは、最も人気のあるチャンネル設定というだけでなく、John自身が彼のJP-2Cを使用するときのセットアップーそしてセッティングーに非常に近いものなのです。



役立つヒント

注意: 重複する情報について:この取扱説明書を読み進めていくと、重複する情報やセクションが出てくるとは思いますが、これは読む人への注意喚起のために繰り返されており、興味のあるセクションしか読まない人に注意を向けてもらうことができ、またJP-2Cについて知っておかなければならない重要なポイントを繰り返している場合もあります。最初から最後まで漏らさず読む人(大抵のMARKシリーズの熱狂的なファンの方はそうです)には申し訳ないとは思いますが、将来この取扱説明書のある部分について素早く参照する際に有効になるとは思います。

- ・チャンネル2と3はBASSコントロールを(特にGAIN高めの際に)あまり高く設定しないように注意して下さい。過度にBASSコントロールを上げると、アタックがぼやけてレスポンスが遅くなります。基本的なルールとしては、GAINを上げるときはBASSの設定を下げてください。
- ・各チャンネルにあるGAINとTREBLEコントロールは、最もよく効くトーン・シェイピングコントロールであるため、調節の際は注意が必要です。またそれらはすべてのモードにおいて、アタックの性格やサウンドの方向性のほとんどを決定します。全てのチャンネルで聴くことのできる優れたサウンドの多くは、これら2つのコントロールが中域にあるときに生まれます。

注意: GAINが高めに設定されているときは、金属的な真空管のノイズが発生しないようにTREBLEの設定をあまり高く(2時以上)上げないようにして下さい。

- ・GAINを高めに設定する際は、5-BANDグライコを使用してシグナルチェーンの最後で高域を加えるようにすれば、多くの場合プリ管へのストレスが小さくなります。覚えておいて頂きたいのは、JP-2Cは全ての面でハイパフォーマンスが得られるアンプだということです。高性能のチューニングカーのように、楽しむために"無防備に"ドライブする必要はありません。全てのコントロールを中域に設定すれば素晴らしいパフォーマンスが得られます。そうですね、目一杯の設定にする時もありますが、車同様全速力で走るには特別なタイヤが必要で、ハウリングの問題を無くすには特別な(そしてレアな)プリ管のセットが必要になるのです。
- ・最も甘くバランスの取れたクリーンサウンドを得るには、チャンネル1のMIDコントロールを11時より低く設定することをお勧めします。多くのプレイヤーはそれよりもっと低い、例えば9時やさらに低い設定を好みます。このように考えられるかもしれませんが;チャンネル1のMIDの12時位置は、他の多くのアンプの"10"(ツマミ目一杯)だということですので、他のアンプではMIDコントロールを11時ぐらいに設定するとすれば、JP-2Cでは8時~8時半ぐらいに設定してみてください。
- ・PRESENCEはPULL機能がONであるかどうかに関わらず、チャンネル2または3のどちらにおいても、トーンを形成する際にゲイン高めの設定だと非常によく効きます。PRESENCEが低めの設定ではサウンドは太くコンプレッションがかかった、ボーカルのようなサウンドになります。PRESENCEが高めだとサウンドが開放されて、あらゆる倍音が流れ出ます。プリアンプをお好みのセッティングに調整した後で、クランチリズムやリードサウンドをPRESENCEを使って微調整して下さい。
- ・JP-2Cを演奏するときは、少なくとも1台のスピーカーキャビネットを床に直に設置して、その床の上で立って弾いたほうがサウンドがより良く聴こえる/感じるかもしれません。アンプ(またはスピーカー)を床に置くと、共鳴効果や、特に低域が伝わることによって、アンプのサウンドが太くなり、また弦の感触をしっかりと感じ取れます。ステージのような木の床だと本当に素晴らしいので是非試してみてください・・・ギターというのは面白い楽器で、2日続けて同じサウンドに聴こえるということがあまり無く、毎夜、また演奏する場所によって異なるように感じるので、あらゆるメリットは活かすべきです。これは大抵の場合に役立ちますが、1つ例外を挙げるならステージ上にたくさんのマイクが設置されているときです。そのような場合は、共鳴したフィードバックを最小限にするためにアンプをステージから高く設定する必要があります。
- ・MIDIプログラムナンバーを用いてアンプのチャンネル/EQ/リバーブ/SHRED機能/エフェクトループの設定を保存する際は、単にMIDIコントローラーまたはPC/シーケンサーを使って任意のMIDIプログラムナンバーの位置に移動し、JP-2Cのチャンネルを選択後、お好みのEQを選択(またはしない)、REVERBの量を設定して、JP-2Cのリアパネル右側にあるSTOREミニトグルスイッチを切り替えます。これで終了です。チャンネルとその他の設定は、該当のMIDIプログラムナンバーが選択されたときに毎回呼び出されます。
- ・アンプの電源をONにする("コールド"の状態から"ホット"へ)時は、常にSTANDBYスイッチを使用して下さい。それは、セッティングやケーブル接続の合間等、数分でも演奏しない時は常にです。そうすることで、真空管の寿命を延ばすことが出来ます。

フロントパネル

THE CHANNELS(チャンネル)

概要で述べましたが、JP-2Cは、3つのチャンネルモードを選択するというMESAの長きに渡るコンセプトの先を行くもので、代わりに3つのチャンネルそれぞれに全体的にフォーカスし、クリーン・リズム、クランチ・リズムそしてリードといった3つの必要なサウンドが得られるようになっています。そのため、それぞれのチャンネルは、究極のパフォーマンスを得るという独立した目的のために最大限の効果を発揮します。

CHANNEL(チャンネル) 1

このチャンネルは、1つの純粹かつシンプルな目的に特化しています；最大のヘッドルームのある、可能な限り最もクリーンなサウンドを得ることです。この目的を達成するために、我々が他のアンプで努力してきた"普通の"ことは、テーブルに置き去りにしました。最も重要なことは、プリアンプからオーバードライブを得ながら、サーキットは基本的に"ビンテージな構造"を保つことで、これにより低いゲインの"モード"を作り出します。

チャンネル1は、オーバードライブを得ることが目的ではありません。実際、全く正反対であり、プリアンプ段でクリップしないように設計されています。最終目的はJohnに、そして今あなたに、クリーンサウンドはクリーンのまま、オリジナルのMARK II-C+がクリップまたはオーバードライブし始めるポイントを過ぎてもクリップしないようにすることです。アウトプットセクションでクリップする可能性があります、頑丈なトランスと100Wの出力によって、相対的にラウドとなり、望むような結果は得られないでしょう。JP-2Cは純粹なクリーンサウンドが得られるように設計されており、曲のイントロやブレイク、その他バックアップパートで必要となる、クリップする気配も無いような正に輝くクリーンサウンドを生み出します。逆に言うと、この頑丈なパワーセクションを持ってしても得られるボリュームには限界があるのですが、プリアンプは最初の段でヘッドルームを増やしてあり、MESAの他の兄弟機種や先祖と比較すると、ドライバーやパワーセクションにより長くクリーンな信号を送り続けることができます。

そのように設定している限り、危険なポイントやぶつかるといえるようなガードレールはありません・・・チャンネル1は本当に優しく、明快です。最初は、GAINを12時ぐらいにして、そこから上げ下げをしながらお好みで豊かなローエンドとトップエンドの煌めきのブレンド具合を探すのではないかと思います。ここに良いルールがありますが、GAINを低め(12時より下)に設定すると、サウンドがよりブライトかつ細くなり、GAINを高め(12時より上)に設定すると、トップエンドの倍音やブライトさには重点が置かれず、豊かで分厚い、暖かみのあるサウンドミックスとなります。大部分では、心配するような間違った設定にはなりません。

しかし覚えておいて頂きたいのは、BASSやそれより低い周波数は、TREBLEやそれ以上の周波数よりもクリーンなサウンドを再生するのにパワーを使うので、BASSを上げたりEQスライダーでボトムエンドを強調すると、パワーセクションはすぐにクリップしてしまいます。したがって、ボリュームレベル高めで完全なクリーンのレスポンスを得たい場合は、低域の微調整をある程度行って下さい。これはベストパフォーマンスを得るときの基準となります。

その他に最適なクリーンのパフォーマンスを得るのに覚えておくことは、チャンネル1のMIDコントロールは、他のMESAアンプのMID/BOOST機能と同様であるということです。つまり、JP-2Cでは大部分でクリップのためにMIDの設定を上げて使用することは出来ませんが、それでもMIDコントロールは非常に強力です。高めの設定(2時より上)では、非常に大量の中域がミックスに放り込まれ、他で調整がされない限り、サウンドが尖るか、バランスが悪くなります。最も甘くバランスの取れたクリーンサウンドを得るには、チャンネル1のMIDを11時より下に設定することをお勧めしますが、多くのプレイヤーはそれよりもっと下の、9時であるとかさらに下の設定を好みます。このようにも考えられます；チャンネル1のMIDコントロールを12時の位置にすることは、他のほとんどのアンプでMIDコントロールを一杯の位置にするようなものです。これは、ほとんどの古いアンプ(MESAや他ブランドの)に言えることで、オリジナルのMARK II-C+では間違いなくそうなっています。

CHANNEL(チャンネル) 2&3

これらの2つのハイゲインチャンネルは、1つの小さな相違点を除いては一致しています；その相違点は、チャンネル3のほうがゲインがほんの少し高く、理由は(MARK II-C+と比較すると失われている)VOLUME 1コントロールの内部プリセット値が高いからです。この違いによって、チャンネル3は単音のソロに最大の効果を発揮し、レスポンスが少し太くなり音が丸くなって、フィードバックがよりレガートかつまるやかになります。

確かに、両チャンネルはハイゲインのアプローチであればどのようにも使用出来ますーまたは、ゲインが低めでも同様ですーしかしJohnや、またハイゲインのクランチリズムと伸びやかなリードサウンドを求める他の多くのプレイヤーにとっては、チャンネル2がリズム・バックアップに、チャンネル3がリード演奏に適していることがお分かりになるでしょう。

コントロールは両チャンネルとも全く同じですが、素晴らしいサウンドにより早く到達するための唯一のヒントとして、BASSコントロールを高め設定にはしないことをお勧めします。GAINコントロールを12時より上に設定するときは特にです。言い換えると、GAINを上げるときはBASSは下げなければなりません。この単純なセッティング上の"ルール"は、MARKシリーズの回路上の唯一のセッティングの落とし穴に落ちてしまうことを防ぎます。BASSコントロールはシグナルチェーンのかなり最初に来るので、BASSの量が増えるとアタックがぼやけて肥大化し、アンバランスなサウンドになります。BASSのセッティングが高くなりすぎないようにすれば、タイトでフォーカスされたアタックを生み、レスポンスも良くなります。またこのトーンのトラップを避けることで、最もアグレッシブで倍音の重なった、音楽的かつ豊かなギターサウンドが得られます。繰り返しますが、そのようなゲインを持つアンプの場合は、サウンドを吟味し、少しずつ調整しながらバランスを取る必要があります。ゲインやコントロールを敵ではなく、味方に付けましょう。この考え方に沿えば、この2つのハイゲインチャンネルで、トラブルなく素晴らしいサウンドがすぐに得られることでしょう。

PULL GAIN(プル・ゲイン)

この機能は、PRESENCEコントロールのPULL(プル)ポイジングと同様、オリジナルのII-C+にはありませんでした。我々はその両方を、Johnのリクエストと機能の希望リストに応じて付け加えました。PULL GAIN(プル・ゲイン)は少量のブーストを可能にします・・・オリジナルのMARK II-C+でいうところの、VOLUME 1コントロール(JP-2Cにはありませんが)の量を調節します。繰り返しますが、このコントロールは内部のプリセットで、Johnのリクエストと、この回路上の繊細な部分で最大の効果を生み出すという我々独自の感覚に対して、多くのテストと熟慮の末に装備されました。

プッシュ・インモードまたはプルモードにしたときに何が起るかをMARK II-C+の用語で表現すると、基本的には2つのVOLUME 1の設定があるようなものです；チャンネル2では一少しゲインが低い"クランチリズムチャンネル"ですーアクティブでない、プッシュ・インのセッティングでは大体6.0(1時位置)だとすると、アクティブのプル・セッティングで7 1/4(または2時15分位置)ほどとなります。

チャンネル3よりホットな"リードチャンネル"ではこのようになります；アクティブでない、プッシュ・インのセッティングで約7 1/2(または2時半)、そしてアクティブのプルセッティングでは9.0(または4時位置)となります。

ここで引用されるセッティングが"大体"とか"約"で表現されるのは、2つのポットの抵抗値が正確に一致せず、古いMARK II+のプル・ポットが等しい量だったため、数値でのセッティングは大体の参考ポイントであり、おおまかなものです。JP-2Cの実際のセッティングは、モードごと(内部プリセットはポットが失われています)に抵抗のネットワークによって値が精密に保存されているので、とても正確です。

PULL PRESENCE(プル・プレゼンス)

この機能は、2つの異なるPRESENCE(プレゼンス)のポイジング(周波数とレスポンス)を選択するもので、2つのハイゲインチャンネルに装備されています。2つあることで、どちらかのチャンネルをクランチリズムサウンドまたはリード演奏に最適なシルクのようなサウンドに調整するのに大変役立ちます。詳しい説明に入る前に、素早く遠回りをお願いします；この重要な操作のコツを理解する必要があります。

注意：2つのPRESENCEモードの調整は全く異なります！プッシュとプルで2つの素晴らしいサウンドを得られるというものではありません！それぞれのポイジングモードに合わせて、PRESENCEコントロールは違う設定をする必要があります！以下の"セッティング"を参照して下さい！

プッシュ・イン(押し込んだ状態)：アクティブでない、プッシュ・インモードはII-C+の回路では新しいサウンドで、MESAの伝統的なPRESENCE回路よりも低い周波数帯を強調する機能です。TREBLEコントロールの領域のちょうど上の音域を激しくヒットし、よりアグレッシブで、タイトなアタックとレスポンスが得られます。リズム・バックイングにも効果を発揮し、曲のある部分を決定的に強調したり、よりパンチや輪郭が欲しい場合に最適です。また、このモードでは倍音のトップがより少しブレンドされます。あまり多くの倍音成分が必要なく、代わりにタイトでフォーカスされたまとまりのあるサウンドを好む場合、単音のソロ演奏にもマッチします。このモードはまた"アンチ・バズ"または"タイトに固まった倍音"のモードでもあり、より分離の良いトップエンドの倍音とは反対です。分離感や立体的なキャラクターの代わりに、フォーカスされた元気なポイジングが必要となるときがあると思います。また、低めから中ぐらいのゲインサウンドでリズムまたは単音のソロ演奏を行う際にも優れています。パンチのあるクラシックロックまたはブルースのソロのサウンドといった、勢いが必要なときに効果的です。

セッティングープッシュ・イン：このモードでは、PRESENCEを高め設定する必要があります。特にプルモードから切り替える際は、周波数がより低くなり、ダークで固まったサウンドになります。PRESENCEを大体1時の位置にして、ここから色々試しながら微調整を行います。

プル(引っ張った状態): このモードは、数十年に渡ってMESAのMARKアンプで使用されスタンダードとなったPRESENCE回路が採用されています。高めのPRESENCE周波数を生み出すため、ソフトかつ弾むように感じます。2つのPRESENCEモードの中でも演奏しやすくなる要素が多くあり、高次倍音の音の"重なり"がかすみや粘り(あなたの表現次第ですが)を生み、MARK II-C+の最もハイゲインのモードの、よりまるやかでボーカルが歌うようなサウンドとなります。このモードでは明らかに倍音成分が多いため、プルモード使用時はPRESENCEコントロールを低めに設定したほうが通常好まれます。このアプローチを無視すると、あまり好ましくない、細く尖がった甲高いサウンドとなります・・・特に単音の演奏には不向きです。ヘビーに歪んだクランチリズムで、プルPRESENCEモードを高めに設定するアプローチもあるかもしれませんが、あまり多くない、というかごく稀です。このモードは、MARK II-C+のLEADモードで行われてきた過去のレコーディングにおける楽器のようなものです。MARK Iが70年代初期に登場して以来、そのアンプから直接、また信念を持って受け継がれ、ほとんどのMESAモデルに使用されています。TREBLEとPRESENCEがプルモードで使われてきましたが、それによって多くのトップエンドの"色"がこれら2つのロータリースイッチの範囲内で得られるようになりました。我々としては、ここでベーシックなサウンドを作って満足された後にグライコで微調整を行うことをお勧めします。

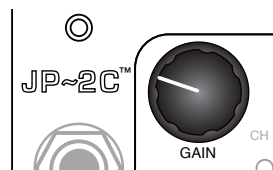
セッティング-プル(プル・アウト): この周波数は高めで、すぐに演奏した音から分離してしまうため、PRESENCEコントロールを低めに設定して下さい。よりまとまりがあってボーカルが歌うようなリードサウンドをお望みなら、7時~10時の間のセッティングを試してみてください。上限を12時まで設定すれば、よりアグレッシブさと必要な倍音の層が加わったクランチリズムサウンドに最適となります。

このスイッチ操作が可能なPRESENCE機能は、オリジナルのII-C+のLEAD回路に施された多くの改良点のほんの1つで、プルゲインとも連動しており、モダンな順応性を伴った伝説的なトーンを生み出すアンプとなっています。2つのチャンネルそしてGAINとPRESENCEの間では、オーバードライブやハイゲインの効いたギターの世界で夢みる、現実の何かを作ることが出来ます。どのようなドライブ量でも、どんなボイスでもそしてどんなフィーリングでも、ここで発見することが出来ます。楽しい部分一探検一は、あなたとあなたの創造性次第なのです。

コントロール

GAIN(ゲイン)

このコントロールはJP-2Cにおいて間違いなく一番パワフルであり、このセッティングがチャンネルそれぞれの全てのモードのサウンドスタイルや方向性を決定します。呼び出されるチャンネルやモードによって異なるチューブステージのゲインを測定し、インプットステージのヘッドルームにセットされ、サウンドがクリーンになるか歪むかが決まります。またわずかなTONEコントロールとしても機能し、チューブステージのゲインが増減され、サウンドに独自のカラーを与えます。



全てのチャンネルには、3つのGAINコントロールの領域があります。低いGAIN領域は9時~11時半の間で、より暖かく歪んでいるのが12時~2時、そしてより高いGAIN領域が2時半~5時半です。どの領域も多様な用途で使用でき、コード演奏でも単音のソロ演奏にも対応します。またGAINコントロールはその領域全体をスイープするので、異なったフィーリングとトーンのキャラクターを持ちます。

概して、全てのチャンネルでは、GAINコントロールが低いとき(9時半から11時半)は音がブライトになり、よりオープンなキャラクターとダイナミクスを生みます。この領域はクリーンサウンドに優れており、チャンネル1では最大のヘッドルームが生み出す輝くコードサウンドが得られ、トップエンドの倍音が弾けてアタックがとても速くなっています。チャンネル2と3でのこの領域は驚くほどのスレッシュリッドサウンドを生み出すように調整されており、ゲインは暖かくもっています、ギターを持っているサウンドは損なわれていません。この低めの領域はチャンネル2の全てのサウンドでクリップしたコード演奏をするのに優れ、歪みによってまだ圧縮を受けていないダイナミクス豊かなサウンドとなっています。チャンネル3でもこの低めの設定が有効で、似たようなコードバックやソロ演奏のサウンドが得られます。同じチャンネルでも、GAINが低くなっていればオールドスクールなビンテージサウンド、高ければ迫力のあるハイゲインサウンドが得られるということに嬉しい驚きを得るでしょう。

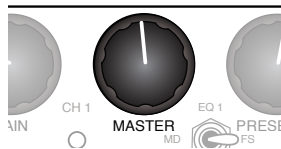
GAINコントロールの中域(12時~2時)は、もっともバランスが取れたサウンドが得られるところで、シグナルの中でおなじような効果を持つTONEコントロールと併用して、暖かいフル・サウンドで、アタックがきめ細かく、良いダイナミクスを持ったサウンドを作り出せることが分かるでしょう。チャンネル1においては、素晴らしいコードのレスポンスと豊かさ、そしてまたコシのあるサウンドが得られます。ピックアップの種類や強さにもよりますが、ここはヘッドルームが減少を始める、ゲイン的にクロスオーバーするポイントの近くであるため、クリップしないように(特に2時を過ぎると)注意しなければなりません。チャンネル2のベストなサウンドのいくつかはこのゲイン領域で得られますが、理由は音がここから良い感じにこもり始め、美味しいチューブ・オーバードライブのサウンドが得られるからです。チャンネル3でこの領域にすると、素晴らしい柔軟性とフォーカスされたサウンドとなります。これらは、チャンネル1と2よりずっと高いゲインのサウンドであるため、ベストなダイナミックレスポンスとアタックのキャラクターは、この方法で得られます。2時ぐらいに設定すると、迫力あるコード演奏や単音での演奏にマッチした十分な歪みが得られ、サウンドにコンプレッション感が増えるのが分かります。

GAINの1番高めの領域(2時半～5時半)は、完全に歪んだサウンドとなります。ここからシグナルがローエンドで太くなり、トップエンドが減少して圧縮されたサウンドになります。ダイナミクスもより低いピークでスローになり、よりレガートな、まるやかなフィーリングとなります。チャンネル3では、GAINコントロールがこのように高めに設定されている場合は完全にフルスロットルのサウンドになります。ご注意くださいのは、このあたりの領域から、音がかかなり歪んでいるのでTONEコントロールの効果が弱くなり、それぞれのモードのサウンドはいかにプリアンプでゲインのレベルと反応するかでキャラクターが決定されるということです。

注意: GAINコントロールを高めに設定することで、真空管ノイズやその他のノイズが発生しやすくなります。全てのコントロール—GAINとTONE—を合わせて高めに設定すると、両方の回路や真空管が不安定になるので、そのような設定は避けて下さい。SHREDモードを使用するとさらにノイズが発生しやすくなるので、SHREDモード時にコントロールを高めに設定することはほぼ不可能となります。もしそのように設定した場合は、ピッチの高い金属的なノイズやフィードバックが発生しやすくなりますが、1つまたはそれ以上の、特にGAINやTREBLEのコントロールの設定を下げることで解決することが出来ます。

MASTER(マスター)

このコントロールは各チャンネルの全体の音量を決定します(プリアンプ部の最後に位置します)。GAINコントロールとのコンビネーションでプリアンプの信号強度(モードのパラメーターを含みます)を、演奏する音量に合わせて決定します。使用するチャンネルでモードとコントロールの設定が終わったら、MASTERコントロールで各チャンネルの音量のバランスを取って下さい。



全てのモードにおいての通常そして最適なパフォーマンスを得るには、MASTERコントロールの設定を9時～12時の範囲に設定します。多くのプレイヤーは、平均的な音量を10時半あたりに設定しています。

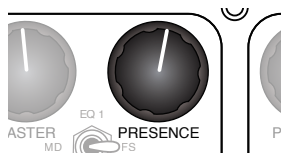
純粋主義者の人は、MASTERをフルにしてGAINを好みの音になるまで上げたりします。一考えると確かにこのやり方はもっとも純粋と言えます。理論的には、彼らはこの方法でコントロールを全てシグナルパスから切り離しているわけで、やり方に問題はありません。しかし、MASTERコントロールが付いていない多くのビンテージアンプは、プリアンプからパワーアンプに流れる出力を調節または微調整を行うために、回路にある抵抗で行います。

本機のMASTERコントロールは実際可変抵抗以上のものであり、音が損なわれること無く自由に何度でも設定が行えます。もしオールドスクールなアプローチを試すのであれば、是非ともMASTERコントロールをこのように使って下さい(アンプにもダメージを与えません)。しかし、GAINとMASTERの両方をコンビネーションとして設定すれば、ほとんど無限に近い形で素晴らしいサウンドメイクが可能ですので、そのポテンシャルを制限してしまうことにはなりません。

チャンネルのMASTERコントロールがEFFECT SEND(エフェクトセンド)コントロールとして動作するMESAの他のアンプと違い、JP-2CはMARK II-C+回路の伝統を守るため、違うレイアウトが必要でした。チャンネル1についてはその方法(チャンネルMASTERがSENDレベルコントロールとして動作する)ですが、2つのハイゲインチャンネル(2と3)についてはGAINコントロールがエフェクトSENDコントロールの役割を果たします。理由は、MARK II-C+のLEAD DRIVEコントロールが実際にII-C+のSENDの強度を決めていたからです。このように両者の信号の仕組みやコントロールの配置が違うにも関わらず、チャンネル間のバランスは非常に良く、外部機器への入力信号のレベルには何ら問題はありません。

PRESENCE(プレゼンス)

このコントロールはTREBLEより上の周波数を調節するもので、パワーセクションの中のシグナルパスのさらに下流にあり、プリアンプ内ではありません。PRESENCEはパワーセクションのネガティブ・フィードバック回路のある特定の周波数を調節するので、それぞれ独立したチャンネルにベストマッチします。



PRESENCEは、パワーアンプを押さえつけて、コンプレッションを加えてサウンドをダークにしたり、燃えさかるような高次倍音を解放することが出来るコントロールとも考えることが出来ます。また、信号のダイナミクスを決定したり、アンサンブルのミックスの中での抜け具合を決定するという大変重要な役目も果たしています。

低めの設定(7時半～10時半)では、コンプレッション感を伴った暖かく丸いサウンドとなり、ダイナミクスの上下が制限されます。設定を上げると(11時～2時半)、トップエンドが支配的になり、コンプレッション感とは"抜け感"に取って代われ、ダイナミクスのピークが性急になります。コントロールをトップエンド(2時半～5時半)に設定すると、高次倍音が支配した超アグレッシブなサウンドとなり、音楽的なバランスが取れないと幾分危険な領域となります。ハイノートが勇敢な耳をつんざくかもしれませんので、例えばスタジオ・レコーディン

グでヘビーなクランチリズムのパートを演奏したり、もっぱら低音弦の演奏パートでの使用をお勧めします。この領域は、特にP.A.で大量のマイクを立てて同時に使用すると、非常に危険です。

PULL PRESENCE(プル・プレゼンス) (概要の繰り返しとなります)

この機能は、2つの異なるPRESENCE(プレゼンス)のボイスング(周波数とレスポンス)を選択するもので、2つのハイゲインチャンネルに装備されています。2つあることで、どちらかのチャンネルをクランチリズムサウンドまたはリード演奏に最適なシルクのようなサウンドに調整するのに大変役立ちます。詳しい説明に入る前に、素早く遠回りをお願いします；この重要な操作のコツを理解する必要があります。

注意：2つのPRESENCEモードの調整は全く異なります！ プッシュとプルで2つの素晴らしいサウンドを得られるというものではありません！ それぞれのボイスングモードに合わせて、PRESENCEコントロールは違う設定をする必要があります！ 以下の"セッティング"を参照して下さい！

プッシュ・イン(押し込んだ状態)：アクティブでない、プッシュ・インモードは II-C+の回路では新しいサウンドで、MESAの伝統的なPRESENCE回路よりも低い周波数帯を強調する機能です。TREBLEコントロールの領域のちょうど上の音域を激しくヒットし、よりアグレッシブで、タイトなアタックとレスポンスが得られます。リズム・バックイングにも効果を発揮し、曲のある部分を決定的に強調したり、よりパンチや輪郭が欲しい場合に最適です。またこのモードでは倍音のトップがより少しブレンドされます。あまり多くの倍音成分が必要なく、代わりにタイトでフォーカスされたまとまりのあるサウンドを好む場合、単音のソロ演奏にもマッチします。このモードはまた"アンチ-バズ"または"タイトに固まった倍音"のモードでもあり、より分離の良いトップエンドの倍音とは反対です。分離感や立体的なキャラクターの代わりに、フォーカスされた元気なボイスングが必要なきががあると思います。また、低めから中ぐらいのゲインサウンドでリズムまたは単音のソロ演奏を行う際にも優れています。パンチのあるクラシックロックまたはブルーズのソロのサウンドといった、勢いが必要なときに効果的です。

セッティングプッシュ・イン：このモードでは、PRESENCEを高めに設定する必要があります。特にプルモードから切り替える際は、周波数がより低くなりダークで固まったサウンドになります。PRESENCEを大体1時の位置にして、ここから色々試しながら微調整を行います。

プル(引っ張った状態)：このモードは、数十年に渡ってMESAのMARKアンプで使用されスタンダードとなったPRESENCE回路が使用されています。高めのPRESENCE周波数を生み出すため、ソフトかつ弾むように感じます。2つのPRESENCEモードの中でも演奏しやすくなる要素が多くあり、高次倍音の音の"重なり"がかすみや粘り(あなたの表現次第ですが)を生み、MARK II-C+の最もハイゲインのモードは、よりまるやかでボーカルが歌うようなサウンドとなります。このモードでは明らかに倍音成分が多いため、プルモード使用時はPRESENCEコントロールを低めに設定したほうが通常好まれます。このアプローチを無視すると、あまり好ましくない、細く尖がった甲高いサウンドとなります・・・特に単音の演奏には不向きです。ヘビーに歪んだクランチリズムで、プルPRESENCEモードを高めに設定するアプローチもあるかもしれませんが、あまり多くない、というかごく稀です。このモードは、MARK II-C+のLEADモードで行われてきた過去のレコーディングにおける楽器のようなものです。MARK Iが70年代初期に登場して以来、そのアンプから直接また信念を持って受け継がれ、ほとんどのMESAモデルに使用されています。TREBLEとPRESENCEがプルモードで使われてきましたが、それによって多くのトップエンドの"色"がこれら2つのロータリースイッチの範囲内で得られるようになりました。我々としては、ここでベーシックなサウンドを作って満足された後にグライコで微調整を行うことをお勧めします。

セッティングプル(プル・アウト)：ここの周波数は高めで、すぐに演奏した音から分離してしまうため、このモードではPRESENCEコントロールを低めに設定して下さい。よりまとまりがあってボーカルが歌うようなリードサウンドをお望みなら、7時~10時の間のセッティングを試してみてください。上限を12時まで設定すれば、よりアグレッシブさと必要な倍音の層が加わったクランチリズムサウンドに最適となります。

このスイッチ操作が可能なPRESENCE機能は、オリジナルの II-C+のLEAD回路に施された多くの改良点のほんの1つで、プルゲインとも連動しており、モダンな順応性を伴った伝説的なトーンを生み出すアンプとなっています。2つのチャンネルそしてGAINとPRESENCEの間では、オーバードライブやハイゲインの効いたギターの世界で夢みる、現実の何かを作ることが出来ます。どのようなドライブ量でも、どんなボイスングでもそしてどんなフィーリングでも、ここで発見することが出来ます。楽しい部分一探検一は、あなたとあなたの創造性次第なのです。

TREBLE(トレブル) GAINがJP-2Cにおいて一番パワフルなコントロールだとすると、TREBLEは2番目となります。TREBLEコントロールは、チャンネル全体のキャラクターのシェイピングを行います。簡単に残りのTONEコントロールを支配するので、3つのチャンネル全てで豊かかつバランスの取れたサウンドにするためにはセッティングは非常に重要です。

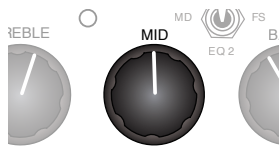
TREBLEが高め(2時~5時半)に設定されているときは、MIDやBASSのコントロールはあまり効果を生み出さず、TREBLEのブライتناキャラクターの一極支配となります。反対に、TREBLEの設定が低いときは少しBASSに比重がかかり、サウンドがダークになって信号のほとんどがMIDとBASSコントロールに行きます。ですのでTREBLEの設定はTONEコントロールでハーモニーを形成するのに極めて重要だと理解した上で慎重に行わなければなりません。

TREBLEを中域にした場合はどのチャンネル/モードでも最適なバランスとなり、十分ブライトでありながらそれでいて豊かで暖かいサウンドとなります。最初はTREBLEを12時からスタートして、好みのトーンが得られるまで少しずつ上げたり下げたりすることをお勧めします。また、PRESENCEを使えば、他のTONEコントロールに影響を及ぼすことなく(少し高め)のトップエンドを加えることも可能です(PRESENCEはシグナルパスのより先のほうの回路に位置し、プリアンプのコントロールには直接影響を及ぼしません)。

注意: TREBLEを高め(2時半~5時半)に設定すると、プリ管(ハイピッチの共鳴やノイズに敏感)に過度なストレスがかかり、共鳴ノイズやその他不安定な兆候を示します。我々は製造の際に、本機に搭載される真空管(チューブ)に問題がないよう多くのテストを行っています。しかし、真空管自体が、電球がそうであるように完璧なものではないため、変化が起こり、よりマイクロフォニックになることがあります。このような真空管の問題に対しての一番の対策としては、単純に真空管を交換することです。

MID(ミッド)

MIDコントロールは、より通常の、というかそのままトーンコントロールとして機能します。MIDコントロールはGAINやTREBLEコントロールのように広範囲に渡るものではありませんが、それでも中域(MID)の設定は、サウンドに強い影響を及ぼします。中域の広い範囲で作用し、前に述べたように、かなりの量の"低-高域"の周波数が伴います。この高域は、TREBLEやPRESENCEのものよりも低い領域ですが、サウンドミックスの中でアンプのサウンドにパンチを与えたり抜けを良くするときに重要です。



中域の中間位置(10時~1時)は、パンチとアタックが大きくなり、より性急さも加わって、マホガニーギター使用時の抜けを良くし、サウンドに輪郭を与えるのに最適です。トップエンドがMIDコントロールの範囲の中で姿を現し始め、コード・サウンドがより押し出され、パンチの効いたキャラクターとなって美しく鳴り始めます。

さらに上げると(1時~5時半)、アグレッシブなサウンドとなり、MIDの領域内で支配的かつ過激なトーンを生み出します。この範囲になると、MIDの設定が高すぎて隠れてしまったトーンの豊かさや暖かみを、BASSコントロールを上げて戻そうと試みるかもしれません。もしMIDのこの領域のアタックや性急さが好みであれば、他の全てのコントロール(MASTERを除き、サウンドが前に出るように)を高めに設定してMIDのカーブに追従するようにします。これで良いのですが、プリアンプのヘッドルームがこのトーンの激しい競争によって食べ尽くされてしまうので、TONEコントロールの設定から来る高信号によってプリアンプがクリップし始めます。

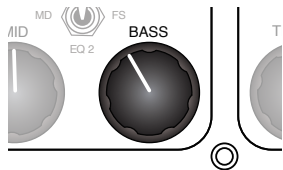
チャンネル2や3のゲインサウンドも、MIDの設定が上がると同じようになります。低めの設定(7時半~10時半)ではワイドで、跳ねるようなフィーリングのコードサウンドや、よりまるやかでスムーズな単音のトーンが得られます。ゲイン回路によって作られる高次倍音はTREBLEやPRESENCEによって大きくコントロールされますが、艶のある立体的なかすみサウンドにかかり、MIDがこのように低めに設定されているとちょうど良い感じになります。またMIDがこの領域で上がっているとより厚いパンチと低・高域のアタックが姿を現してきてサウンドがより前に出ます。

注意: チャンネル1のMIDコントロールは通常の値よりも高いため、クリーンサウンドにさらにパンチや抜けの良さを加えることが出来ます。これにより、MESAも含めた他のアンプの中域の設定(サウンド)は、JP-2Cのチャンネル1の設定より低い設定となります。プリアンプの周波数も同様で、より(中域が)増幅されています。このように考えるかもしれませんが;もし他のアンプのクリーンチャンネルやモードでMIDを11時に設定したとしたら、同等の設定は8時半ぐらいだろうか。"通常の"MIDコントロールの0から10までの全体の範囲は、ここではより狭い範囲に位置されており、7時~1時となります(もしコントロールに目盛りが付いていたら0から大体6.0ぐらいまでです)。

BASS(ベース)

MIDコントロールと同様に、BASSコントロールも普通のTONEコントロールのように機能し、サウンドに丸みをつける豊かなボトムエンドをブレンドします。異なるチャンネルが選択されると内部のスイッチが作動し、サウンドスタイルに合わせて低域の位置と帯域が変化します。これはそれぞれのサウンドにとって非常に重要で、トーンキャラクターの大部分を占めています。

"役立つヒント"のセクションの最初に述べたように、BASSコントロールは簡単に過大な低域をミックスにもたらし、サウンドを埋め尽くしますが、特に2つのハイゲインチャンネル(2と3)で顕著です。我々がお勧めするのは、チャンネル2と3を使用するときは、最初はBASSコントロールを大体10時ぐらいに設定することで、サウンドへの低域のブレンド具合を決めやすくなります。チャンネル2と3をハイゲインセッティングにするときに、BASSを小さくしすぎることを恐れなさい。この方法だと、ピックのアタックをよりタイトに拾い、反応が素早くなります。また、シグナルチェーンの後半でもっとボトムエンドが欲しいときにはグライコの1番低い2つの帯域を使ってローエンドを足せませし、アタックの性格には悪影響を及ぼしません。



反対に、低いGAIN設定だと、ブルーズやルーツミュージック等にも有効ですし、BASSコントロールを高めにしても良いサウンドが得られるでしょう。GAINを11時より下にすると、アタックが損なわれないうらいで、BASSを1時ぐらいまで上げることが出来ます。

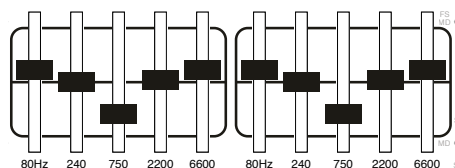
判別がつかないときは、MARKシリーズのルールに従っておけば確実です；GAINを上げるときは、BASSを下げるということです。この方法を取っておけば普通に素晴らしいサウンドをすぐに手に入れることが出来ます。正直に言って、BASSコントロールのその特異性は、トリッキーなセッティングにしない限り、プリアンプ全体で唯一気を付けなければいけないものです。このルールを守って、落とし穴に落ちないようにして下さい。

プレイヤーが陥る他の唯一の罠は、MARKシリーズや他のMESAのアンプにしても特に変わったものではありません・・・今日のほとんどのアンプでよくあることです。我々は45年以上プリアンプゲインを製造していますが、プレイヤーはゲインを上げすぎる傾向があります。もしアンプを一言するとするならば、必要な分だけのゲイン設定にして下さい。

GAINの上げすぎは、真空管ノイズをもたらすばかりか、コントロールの効が悪くなり、アタックが損なわれます。ゲインを上げることに病みつきになってエスカレートしてしまうと、最後にはサウンドがゲインのみになって、トーンが残らなくなってしまうのです。確かに、最適なGAINのセッティングはギターに使われている木材や弦のゲージ、ピックアップやピック、指からフレットといった全てに左右されています。しかしまるやなかゲインは中毒性がありますから、サウンドも重要であることは覚えておかなければなりません。ゲインの上げすぎでサウンドが崩れてしまったり不明瞭になってしまうことは望まないとします。GAINコントロールの設定を低めにする習慣をつけておくことをお勧めします。そして、ミックスの中で歪み過ぎないサウンドとフィーリングをずっと探すということです。そうすることで、ギターのテクニクも嘘がなくなり、サウンドがより純粋でエキサイティングなものになります・・・保証します。

5-BAND GRAPHIC EQ(グラフィック イコライザー) x2

MARKシリーズのアンプはオリジナルのMARK Iまで遡りますが、パワフルなトーン・シェイプ機能である5-BANDグラフィックイコライザー(グライコ)を装備しています。当時それはBoogieアンプを他のアンプと引き離し、今日までMARKシリーズのサウンドの象徴であり続けるほどの革新的な機能でした。数十年に渡ってクラシックとなった多くのMARKサウンドはこのグライコが使用されており、中域に特徴のあるMARKシリーズのプリアンプの反対のサウンドとして、過激に中域をカットされた"スクープ"サウンドが得られるように設定されていました。このように加工されたサウンドの中で最もポピュラーなのが、真ん中が"V"の字に落ち込んだもので、サウンドが巨大かつ立体的になります。このJP-2Cでは、その楽しみが2倍になります！



EQのくぼみへようこそ・・・5-BANDグラフィックの天国です！ JP-2CはQUAD PREAMPを除いた他のMESAアンプと一線を画し、初の2つのグライコを搭載したアンプで、またその独立型の5-BAND EQコントロールは3つのチャンネルの内どちらか2つまたは、1つのEQスライダーのセッティングを2つのチャンネルで共有すれば、3つのチャンネルで使用することが出来ます。これらのEQは同じもので、調整可能な同じ周波数、カット/ブースト範囲、そしてシェイピングポテンシャルがあります。両方のEQが3つのチャンネルに使用可能で、それぞれのチャンネルのEQ選択ミットグルスイッチで切り替えます。MD/FSと印字してある真ん中の位置は両方のEQをバイパスし、上側と下側では選択したEQがそのチャンネルにアサインします。フロントパネルに向かって、EQ1が左側、EQ2が右側となります。

(全てのチャンネルで)チャンネルごとのEQのアサインはMIDIコントロールによってJP-2Cのプロセッサのチャンネルバスに保存されるので、フットスイッチで操作可能な3つのチャンネルでどのようにグライコを使用するか決定したら、コントローラーでMIDIプログラムナンバーを選び、選んだチャンネル/EQをリアパネルの右側にあるSTOREトグルスイッチで保存します。チャンネルと選択したEQの状態が、保存し

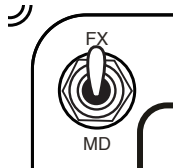
たMIDIプログラムナンバーに表示されます。または、JP-2Cのフットスイッチを使用すれば、単純にスイッチのON/OFFでいつでもEQを切り替えられます。EQがどのような設定になっていても、隣接しているEQがシグナルパスでアクティブになっていれば、EQステータスLEDはON(点灯)になります。

EQを操作する際に、JP-2CフットスイッチまたはチャンネルEQ選択ミニトグルスイッチを使用するときは、どちら(フットスイッチかトグルスイッチ)でEQを操作するにしても、現在使用されているものが優先されます。言い換えると、例えばチャンネル1でEQのどちらかをミニトグルスイッチでONしても、フットスイッチでそれをOFFにすることが出来ます。反対に、EQをフットスイッチでOFFにしても、そのチャンネルのEQ選択ミニトグルスイッチで再びONに出来ます。

一旦チャンネル/EQのコンビネーションがMIDIプログラムナンバーに保存されると、EQの状態はチャンネルEQ選択ミニトグルスイッチでリセットされなければなりません。最初に、スイッチをOFFにしてから、そのチャンネルで使用したいEQ(EQ1または2)を選択します。しかしリアパネルのSTOREスイッチの操作で新しい情報を保存しないと、次に同じMIDIプログラムナンバーが呼び出されたときには、以前保存されたオリジナルのチャンネル/EQのコンビネーションが再び呼び出されます。MESAのJP-2Cフットスイッチは、MIDIコントローラーから送られるMIDIコマンドに優先されません。注意：JP-2CフットスイッチとMIDIフットコントローラー両方を、それぞれ対応の(7ピンと5ピン)DINジャックに同時に接続しないで下さい。

LOOP SELECT(ループセレクト): FX/MD

EQウィンドウにあるこのトグルスイッチは、グライコには一切関係がありません。これはループセレクトスイッチで、エフェクトループとリアパネルにあるSEND(送る)/RETURN(リターン)ジャックの状態を操作します。エフェクトループはメインのドライ信号に直列で配線されており、プリアンプからSEND信号が出て、パワーセクションの前のバッファー段にダイレクトにRETURNから信号が供給されます。エフェクトループでは、外部機器とのINPUT/OUTPUTインピーダンス(抵抗)のミスマッチによる信号ロスや、長いケーブルを使用することで発生する音質劣化を防ぐためにバッファーされていますが、JP-2Cに外部プロセッサーを接続する際は、可能な限り高品質で短めのケーブルの使用をお勧めします。

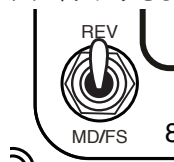


エフェクトループを行う際は、以下の2つの方法があります；FX(スイッチ上側)にすると、MIDIプログラムチェンジナンバーが送信されない限り常にエフェクトループがONになります。このとき、それぞれのチャンネルに保存されている設定

はエフェクトループの状態を決定します。MD(スイッチ下側)にすると、フロントパネルのチャンネルセレクトスイッチやJP-2Cフットスイッチが選択しているチャンネルに関わらず、常にエフェクトループがバイパスされます。またMIDIプログラムのロケーションでループの状態を保存するために、スイッチングパスで必要な"初期化"を行います。特定のMIDIプログラムナンバーでエフェクトループを保存するには、単純にフロントパネルのループセレクトスイッチをOFF(スイッチ下側)に切り替え、特定のMIDIプログラムナンバーロケーションで呼び出したいチャンネルを選択します。それからループセレクトスイッチをFX側(ループON)にして、リアパネルのSTOREスイッチを操作(上側に一回押し上げる)します。MIDIプログラムナンバーに戻る際は毎回、エフェクトループはアクティブになります。黄色のループ・ステータスLEDは、その設定に関わらずエフェクトループがON、かつシグナルパスにあることを示しています。

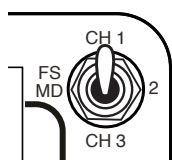
REVERB(リバーブ)/MD/FS

このトグルスイッチで、豊かな真空管リバーブ回路がミックスに入るかどうかを決定します。それぞれのチャンネルは専用のREVERB(リバーブ)ミックスコントロールをリアパネルに装備していますが、フロントパネルのスイッチでREVERB回路をアクティブにするまで何にも作用しません。2つの選択肢がありますが、REV(スイッチ上側)では回路がONになり、チャンネルごとにリバーブをブレンドする量をリアパネルのコントロールで決定します。またはMD/FS(スイッチ下側)に切り替えると、リバーブのバイパスまたJP-2Cフットスイッチでの操作を可能にします。EQ同様、緑色のリバーブ・ステータスLEDはリバーブの状態を示し、REVERB回路がシグナルパスにあるときは常に点灯します。



JP-2Cのフロントパネルにある他のミニトグルスイッチと同様、MD/FSの位置にするとスイッチングパスで使用されている外部機器からの"初期化"が行われ、MIDIプログラムチェンジ情報に対応して書き換えを行います。個々のEQと違い、REVERBは回路自体、全体の設定として保存されます。チャンネルごとのリバーブミックスの設定は行えますが、回路の状態は全体の状態として保存されます(常にシグナルパス内で、または全てのチャンネルでバイパスされます)。EQについては、現在アクティブになっているモード(フロントパネルのREVERBスイッチまたはJP-2CフットスイッチのREVERBボタン)が、その他のスイッチ位置/状態より優先されるので、フロントパネルのミニトグルスイッチでREVERB回路をONにしても、JP-2CフットスイッチでOFFにもONにも出来ますし、またそれをフロントパネルのミニトグルスイッチでOFFにも出来ます。緑色のリバーブLEDは、どのように操作してもリバーブの状態を示します。

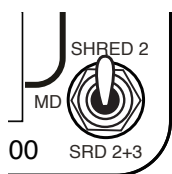
CHANNEL SELECT(チャンネルセレクト): CH 1 FS/MD/CH 2 CH 3



この小さいトグルスイッチは、フットスイッチをお持ちでない場合、またはスタジオや室内で使用する場合にフットスイッチやMIDIコントローラーでの切り替えが必要でない時、アンプのチャンネルを切り替える際に使用します。

CH(チャンネル) 1(スイッチ上側)ではクリーンチャンネル、FS/2(スイッチ真ん中)では中央のリード(またはクランチ)チャンネルまたはJP-2Cのフットスイッチが接続されている場合、そしてCH3(スイッチ下側)では2番目の(右側の)ハイゲイン・リードチャンネルが選択されます。

SHRED(シュレッド)



この II-C+に新しく追加されたボイスシングスイッチ(モード)は、高次倍音とより広い範囲のトップエンドの重なり、または"z's" 一時々そのような引用をしますが一 が2つのハイゲイン・チャンネル(2と3)のみに加えられます。プレイヤーには、SHREDモードがよりゲインがあるように聴こえまた感じられるのですが、また実際そうではあるのですが、より鋭く、アグレッシブなコードサウンドが得られるような狭く特定の範囲のゲインとなります。またこのモードは単音でのリードサウンドにも効果がありますが、使用する際はPRESENCEを低めに設定し、周波数がベストなバランスを得られるようにTREBLEを調整したほうが良いでしょう。

注意: SHREDモード選択時は、GAINとTREBLE両方とも高めの設定にならないように気を付けて下さい。金属的なハムノイズが発生するおそれがあります。

SHRED2(スイッチ上側)を選択すると、SHREDボイスシングモードはチャンネル2にしか掛かりません。SRD 2+3(スイッチ下側)を選択すると、チャンネル2と3の両方がSHREDモードになります。上記で述べたように、チャンネル1にはSHREDモードは掛かりません。他機能を設定するその他のミニトグルスイッチと同様に、MIDIプログラムナンバーを付けて設定を保存するときは、SHREDモードを"リセット"します。方法は、リアパネルのSTOREスイッチで設定を保存する前に、SHREDスイッチをOFF(真ん中の位置)にして、それから任意のリードチャンネル(2または3)を選択してからSHREDスイッチをON(上側または下側)にします。

MIDIプログラム使用時にチャンネル(2または3のみ)のSHREDボイスシングの設定を保存するには、(JP-2C上の全てのミニトグルスイッチの設定と同様)最初にスイッチング・バスをリセットしなければなりません。以下がそのシンプルな手順となります；

1. お持ちのMIDIコントローラーで任意のMIDIプログラムナンバーを選択します。
2. フロントパネルのEQウィンドウの左上角にある、チャンネルセレクトミニトグルスイッチで、JP-2Cの任意のチャンネルを呼び出します。
3. 同じくEQウィンドウの右下にあるSHREDミニトグルスイッチを、"MD"(スイッチ真ん中)の位置に設定します。
4. SHREDミニトグルスイッチを、保存するチャンネルに対応した位置(SHRED2またはSRD 2+3)に動かします。
5. (アンプのフロント側から見て)JP-2Cのリアパネルの左端にあるSTOREスイッチを1回だけ上側に動かします。現在選択されているチャンネルとSHREDボイスシングモードが、MIDIコントローラー上で表示されているMIDIプログラムに書き込まれます。

このようにしてMIDIコントローラー上で表示されたMIDIプログラムナンバーにチャンネルとSHREDボイスシングの状態が保存され、次に同プログラムナンバーに戻ると同設定が呼び出されます。もし呼び出されない場合は、上記のステップを1~5まで繰り返してみてください。この鋭い倍音の重なりをクランチリズムサウンドに加えてよりタイトな攻撃性を得るにしろ、リードプレイの際に他の設定とブレンドしてトップエンドのトーンを構築するにしろ、SHREDモードはクラシックなMARK II-C+のキャラクターに新たな次元を切り開きます。またこの高次倍音がグライコやパワフルなトーンの設定と合わさると、C+の伝統的なサウンドがアップデートされ、究極のヘビーサウンドを求める今日のレースのトップに躍り出るような、より迫力のあるサウンドが得られるのです。

POWER(電源)スイッチ



本機に電源を供給するためのトグルスイッチです。電源のアースが取れていることを確認して下さい。またコンセントにも適正な電圧が供給されていることを確認して下さい。アンプを使用していない状態から演奏を開始するときは、STANDBYスイッチの項で述べている手順に従って下さい。真空管に与える問題を減らし、また真空管の寿命を延ばすことが出来ます。

STANDBY(スタンバイ)スイッチ



演奏をしていない状態からアンプを使用する際に、このトグルスイッチをSTANDBYの位置にして真空管(特にパワー管)の暖気を行います。まずPOWERスイッチをONにする前に、STANDBYスイッチがSTANDBY("O")の位置にあることを確かめます。POWERスイッチをONにしてから最低30秒間そのまま待ち、それからSTANDBYスイッチを"I"の位置にします。この手順によって、高電圧が冷えた真空管を直撃することによるダメージを防ぎ、また真空管の寿命を延ばすことが出来ます。

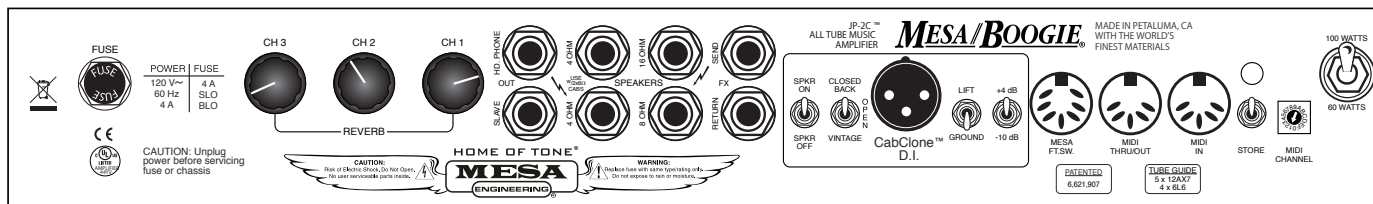
コールドスタート時(演奏していない状態)からの手順:

(アンプの電源を3分以上OFFにするときは、常にこの手順を踏んで下さい)

1. STANDBYスイッチを"O"の位置しておきます。
2. POWERスイッチを"I"(ON、スイッチ上側)に切り替えます。
3. 30秒ほど(またはそれ以上)待って、真空管の暖気を行います。
4. STANDBYスイッチを"I"(ON、スイッチ上側)に切り替えます。

以上、楽しんで下さい!

注意:このコールドスタートからの手順は真空管の寿命と信頼性を確保するのに重要な部分です。電球のように、最も消耗するのが電源が入った瞬間(ほんの少しの、最初の数秒)です。また電球のようにもし調光器が付いていて最初の数秒のボルテージを下げられるのであれば、さらに寿命を延ばすことが出来るでしょう。STANDBYスイッチはアンプの調光器のようなもので、上記のような使い方をすれば真空管(特にパワー管)の寿命を長くし、ベストなパフォーマンスを得ることが出来ます。



リアパネル

電源コネクター(リアパネル下側)

付属の電源コードを接続するコネクターです。適正な電圧が供給されているコンセントから、付属の電源コードを使ってここからアンプに電源を供給します。なお、付属の電源コード以外のご使用は絶対におやめ下さい(アンプや接続機器にダメージを与えることがあります。またその際の保証は行いません)。

FUSE(ヒューズ)

外的要因による電源の過大入力またはパワー管に問題がある場合にヒューズが断線することがあります。必ずヒューズホルダーの近くに明記されているものと同じ規格の4A SLO-BLOタイプのヒューズに交換して下さい。パワー管のショートは大抵ヒューズが断線することで発生します。アンプの裏側に回って、このマニュアルのSTANDBYスイッチの項に書いてあるコールドスタート時の手順に従って下さい。それからSTANDBYスイッチをONにして、パワー管をチェックします。もしパワー管が良くない状態でONにすると、パワー管がアーク放電して(点滅して)いるのが視認できます。その時はすぐにSTANDBYスイッチをSTANDBY側にして、パワー管を交換します(必要があればヒューズも交換して下さい)。

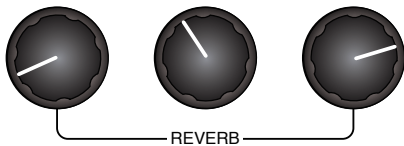
STANDYBYスイッチをON側にしても特に異常が見つからなかったときは、パワー管が一時的にショートしてヒューズが断線した可能性があります。時によって、パワー管内での接続が一時的にショートすることがあり、しばらくはまた通常のように動作するのですが、不良と考えられますのでできるだけ早く交換して確実なパフォーマンスが得られる状態にしておいたほうが良いでしょう。またもしあまり使っていない真空管がアーク放電していたりショートしていたら、明らかに不良である真空管を交換して、もう1本はそのままにします。

もし長い間真空管を交換していない場合は、何か問題が発生すればそれは全てのパワー管を交換する時期です。

交換用の真空管は、少なくとも1ペアほどいつでも交換できるところに保管しておきましょう。

REVERB(リバーブ)

この3つのコントロールで、JP-2Cの3つのチャンネルそれぞれのREVERB(リバーブ)のミックスレベルを決定します。これらは、アンプのフロントパネル側の上からリアパネルを覗き込んだときに、リアパネルの右端でコントロールの調整が出来るようにレイアウトされています。豊かなオールチューブ・リバーブは、チャンネル1または2つのハイゲインチャンネル(2と3)のどちらを選んでいるかによって異なる位置の回路から供給されており、信号強度が適切に調整されています。一般的にチャンネル1のクリーンサウンドは、2つのハイゲイン・チャンネルと比較すると、ヴィンテージアンプに似た、より深くウェットなリバーブミックスのレベルになります。ハイゲイン・チャンネルのリバーブは余り深くない設定になっています。



覚えておいて頂きたいのですが、リバーブをゲインが極端に異なる複数のチャンネルを通じて効かせることは大変に難しいことです。MARK II C+が持っているハイゲインのパフォーマンスを本来の回路で忠実に得ようとした場合は特にです。そのため、複数のチャンネルでゲインに幅を持たせないようなアンプで、リバーブの効果を比較することは合理的ではありません。この包括的で物理的に小さいパッケージのアンプにおいては、リバーブの深さと得られるミックスレベルには限界があります。ただ安心して頂きたいのは、MESAは可能な限りの方法で、このゲインの異なるアンプでもあらゆるサウンドにおいて素晴らしいリバーブ効果が得られるように最善を尽くしています。

リバーブ効果を得るには、単純にフロントパネル上にあるEQウィンドウの左下にあるスイッチをON(上側)にして、演奏するチャンネルに対応したREVERBミックスコントロールを調整します。一旦REVERBをONにした後は、REVERBのON/OFF(ミュート)はMESA JP-2Cのフットスイッチを使って行えます。フロントパネルにあるREVERBのインジケータLEDでREVERBの状態を視認出来ます。

チャンネルごとのREVERBの状態をMIDIプログラムで保存(ON/OFFのみで、ミックスレベルは保存できません)するには、(他のミニ・トグルスイッチの機能と同様に)一旦OFFにしてスイッチング・バスを"リセット"しなければなりません。

1. ご使用のMIDIコントローラーで、任意のMIDIプログラムナンバーを選択します。
2. フロントパネル上の、EQウィンドウの右上にあるミニ・トグルスイッチで任意のチャンネルを呼び出します。
3. EQウィンドウの左下角にあるREVERBのミニ・トグルスイッチを"MD/FS"側(スイッチ下側)に設定します。
4. REVERBのミニ・トグルスイッチを"REV"側(スイッチ上側)に切り替えます。
5. フロント側から見てJP-2Cのリアパネルの左端にあるSTOREスイッチを1度だけ切り替えます。現在のチャンネルとREVERBの状態が、現在表示されているMIDIプログラムのロケーションで、JP-2Cのプロセッサ内に書き込まれます。

これで、ご使用のMIDIコントローラーで現在表示されているMIDIプログラムナンバーにチャンネルとREVERBの状態が保存され、次にそのプログラムナンバーを選択した際に再び呼び出されます。もし呼び出されない場合は、上記のステップの1~5を再度繰り返してみてください。

HEADPHONE(ヘッドホン)

本機には、スピーカーを使用しない/できない場合にアンプのサウンドを個人で楽しめるヘッドホンアウトが装備されています。このステレオ1/4"ジャックからは、本機に搭載されたCAB CLONE™によってスピーカーシミュレートされた信号が供給されますが、それはJP-2Cのサウンドやフィーリングを、お使いのヘッドホンに驚くほど表現豊かに伝えることが出来るのです。



CAB CLONE™の回路は、アンプのサウンドをこのように素晴らしく伝え表現することが出来るのですが、その理由としては、CAB CLONEの信号がスピーカーアウトからすぐに引っ張られているからです。つまり、アウトプット・トランスやパワー管も含めたアンプの全て(トーン、ニュアンス、自然な真空管のコンプレッションや通常スピーカーから聴こえる弾むようなフィーリングまで)がこのジャックから引き出されるということです。

確かにスピーカーキャビネットはアンプを生で演奏したときに聴こえるたくさんの要素を音として形成しますが、CAB CLONEの回路はスピーカーを通して生で演奏した経験の多くを得て素晴らしい仕事をやってのけており、スピーカーのマイキングにかかる時間や手間を省いています。1本のケーブルをただ接続するだけです。というわけで、この素晴らしいサウンドを個人練習のためにいつでもヘッドホンアウトから得られるという本当のボーナスをあなたにお届けします。

ヘッドホンアウトの音量は各チャンネルのMASTERコントロールによって決定されます(回路がパッシブでオペアンプ等は使用されていない)ので、ここで調節が必要になります。

注意:ヘッドホンはサウンドも効果(音量)も様々で、ヘッドホンアウトのパフォーマンスは使用されるヘッドホンによって決定されます。本機に使用するヘッドホンについては、いくつか違うタイプのものやブランドを試すことをお勧めします。

注意:ヘッドホンと耳との距離は、あなたのお好みのスピーカーからの距離とは明らかに異なりますので、アンプのセッティングはお使いのヘッドホンの固有の品質にベストマッチする形で調整する必要があります。

注意:内部のREVERB(リバーブ)を少しミックスの中に入れるもしくはエフェクトループの外部プロセッサでディレイのプリセットを使用すると、スピーカーを設置する場所のエア感や広がりやを補うので、ヘッドホンアウトのサウンドがより生き生きと自然になります。

本機は、CAB CLONE™ D.I.回路と、それに関連したヘッドホンアウトを搭載した3台目のMESAアンプです(最後には多分なりません)。この包括的なダイレクトレコーディングかつプライベートなモニタリング機能は、アンプの価値や柔軟性そして利便性を非常に高め、本機の素晴らしいサウンドとフィーリングを深夜に(いつでも)演奏して楽しめるのと同様に、素早くそして手間の要らない、ダイレクトレコーディングの機能としても新しいオプションも備えています。

注意:ヘッドホンジャックにケーブルを接続すると、CAB CLONE D.I.のXLRバランスアウトが無効になります。ヘッドホンが回路的に許容量一杯になりサウンドが損なわれるので、ヘッドホンアウトとD.I.アウトは同時には使用できません。

注意:パッシブ回路であるCAB CLONE™にはヘッドホンアウトのボリュームコントロールが無いため、該当のチャンネルのMASTERコントロールでヘッドホンアウトの音量を決定する必要があります。

注意:SPKR ONのスイッチ位置にあるときは、スピーカーアウトにスピーカーが接続されていることを必ず確認して下さい。接続されていない状態で使用するとアンプにダメージを与える恐れがあり、またその場合は保証対象外となりますので十分ご注意ください。スピーカーや外部抵抗(レジスター等)が無い状態でSPKR ONを選択してアンプを使用すると、アウトプットトランスにダメージを与えたり、アンプが正常に動作しなくなる恐れがあります。

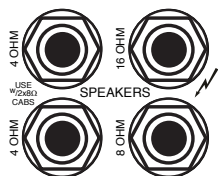
SLAVE(スレイブ)

このSLAVE信号は、大きな会場等で"ギターアンプのボイスिंग"を持ったパワーアンプ等を接続して出力を稼ぐのにベストです。また、メインのJP-2Cのドライ信号を捕えてエフェクター・ラックシステムに最初に送り、ペアのアンプを使ってステレオで(または一台のアンプでモノで)ウェット・セッティングが行えます。このセットはよく"ドライ/ウェット/機材ウェット"や、"3台のアンプをステレオ"というような使用方法で見られます。どちらにしても、メインのJP-2Cで演奏されるサウンドはSLAVEではあくまでアンプのレベルセッティングのままが再生されます。SLAVE信号について注意しなければならないのは、エフェクトリターンズのジャックには戻せない(接続できない)ということです。誤って接続すると、フィードバック・ループによる大音量の金属的なノイズが発生してしまいます。



SPEAKERS (スピーカーアウトブット)

JP-2Cのリアパネルに装備されている最高品質のスピーカーアウトは、いかなるスピーカーキャビネットとの組み合わせでも最適なパフォーマンスを生み出します。2 x 4Ω、1 x 8Ωそして1 x 16Ωのジャックは、少ない数でも幅広い抵抗値をカバーし、コンパクトながらアンプに必要なパワフルな出力を供給します。



ほとんどのMESAのスピーカーキャビネットは標準の8Ω配線となっており、1台の8Ωキャビは8Ωのスピーカーアウトと接続します。我々は、この公称インピーダンスでの接続が周波数のブレンドやパンチ、バランスやパワーといった点で最もレスポンスが良いと判断し、また今でもそう思います。多くのMESAの1x12, 2x12そして4x12のスピーカーキャビネットはこのような理由で8Ω配線となっています。しかしながら、キャビネットのセッティングやお好みのサウンドに合わせて、これとは違ういくつかの素晴らしい接続方法を試してみるのも悪くありません。ただ1つ、常に行わなければならないことは、対応した抵抗値でスピーカーアウトに接続することです!!!

唯一安全な(しかしお勧めしませんが)方法として、CAB CLONE D.I.を使用するときにはスピーカーアウトに抵抗を接続せずにアンプを駆動し、CAB CLONEのSPKR ON/OFFスイッチをOFF(スイッチ下側)にしてダイレクトレコーディングを行うというやり方があります。そのようなときでも、我々は常にスピーカーアウトにスピーカーを接続しておくことを強くお勧めします・・・誰か(テックやレコーディング・エンジニア等)がアンプのリアパネルにあるSPKR ON/OFFスイッチを切り替えてしまわないとも限りませんので。

以下は、いくつかの一般的かつ正しいスピーカーアウトとの接続例です；

- ・ 1台の8Ωキャビネット - 8Ωのスピーカーアウトに接続します(1台のMESA 8Ωキャビネットを使用)。
- ・ 2台の8Ωキャビネット - それぞれ4オームのスピーカーアウトに接続するか、または1台のキャビをMESAキャビのパラレルインプットに接続し、2台目をMESAキャビの他のパラレルジャックに接続します。
- ・ 1台の4Ωキャビネット - 4Ωのスピーカーアウトに接続します(4Ωキャビネットのいずれかを使用)。
- ・ 2台の4Ωキャビネット - 接続はお勧めしません！ 本機のアウトブットトランスは2Ω抵抗を接続するにはセットされていません。
- ・ 1台の16Ωキャビネット - 16Ωのスピーカーアウトに接続します。
- ・ 2台の16Ωキャビネット - パラレルボックスまたは"Y"コネクターを使用して、8Ωのスピーカーアウトに接続します。

これらの一般的なスピーカーの接続方法は、プレイヤーが行うであろう幅広いセッティングのほとんどをカバーすると思います。またここに挙げていない他の一般的ではない方法もあり、その内のいくつかは安全かつユニークなサウンドのものもあると思います。接続方法に迷った際は詳しい技術者に確認して、決して自分の判断で接続しないことをお勧めします。

FX LOOP(-SERIES)(エフェクトループ: シリーズ)

これら2つの1/4"ジャックはエフェクター/プロセッサーを接続するポイントとなります。エフェクトループは基本的にプリアンプの最後からドライバーステージへのブリッジの回路となり、SENDジャックがプリアンプの最後の信号を拾い、RETURNジャックを通じてドライバーチューブの前のパワーセクションに送られます。

この接続ポイントを使用することによって、最良の外部プロセッサーの信号のノイズ比と音響上のパフォーマンスが得られます。つまり、ここはJP-2Cのサーキットパスでは重要な意味を持つ分岐点であり、ここにいかなるものが挿入されてもアンプ全体のパフォーマンスに影響を及ぼすということです。



エフェクトループはドライ信号とシリーズ(直列)に配線されていますが、つまり全体の信号はここを通過するということがあり、そこがループから何%かは影響を及ぼさない純粋な信号が取り出される、パラレルループとは違うところです。そのため、ループ内で使用する機器の品質とパフォーマンスが、アンプから最適なサウンドとパフォーマンスを得るのに大変重要なのです。我々は、パフォーマンスの面でJP-2Cと良いマッチングが得られるか判断するために、機材を購入する前にチェックしてみることをお勧めします。1つのヒントが価格です。市場価格で分割すると、大抵の場合は支払う価格に応じて、広い範囲で商品の品質と音響性能が得られるでしょう。テクノロジーの競争は恐ろしいペースで行われ、機能は常に最先端のものが目指されますが、アンプに求めるサウンドやフィーリングはあなたが決めるものであり、エフェクトプロセッサー機器を選ぶ際、そして・・・結局のところ、ピュアアナログのチューブアンプの真ん中に何を挿入するかということも、同様に判断することをお勧めします。

黄色のエフェクトループ・インジケータLEDは、エフェクトループのセッティングの状態を示します。JP-2Cフットスイッチを使用しているとき、またはフロントパネルのチャンネル選択ミニトグルスイッチでチャンネル切り替えを行っているときは、EQ枠にあるFXミニトグル(スイッチ)のセッティングがエフェクトループ全体を設定します。MIDIでJP-2Cをコントロールするときは、JP-2Cのプロセッサ内の設定または最後に保存されたMIDIプログラムナンバーの位置でエフェクトループの状態が決定されます。

注意: 外部プロセッサをエフェクトループに接続する際は、常に出来るだけ短めの、高品質(低キャパシタンス)のケーブルを使用して下さい。それにより、キャパシタンス(静電容量)による音質の劣化を最小限にし、またより最適な使用条件を得ることが出来ます。

MIDIプログラム使用時に、あるチャンネルでエフェクトループの状態を保存するには、他の機能の保存時と同様、最初にJP-2Cのスイッチング・バスにてロケーションをリセットしなければなりません。

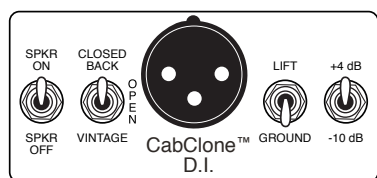
MIDIプログラム使用時に、任意のチャンネルにエフェクトループの状態を保存するには以下の手順に従って下さい:

1. 使用するMIDIコントローラーにて、任意のMIDIプログラムナンバーを選択します。
2. フロントパネルのEQウィンドウの左上角にある、チャンネル選択ミニトグルスイッチで任意のJP-2Cのチャンネルを呼び出します。
3. EQウィンドウの左上角にある、FXミニトグルスイッチを"MD"(スイッチ下側)に切り替えます。
4. FXミニトグルスイッチを"FX"(スイッチ上側)に切り替えます。
5. JP-2Cのリアパネル左端(フロント側から見て)にあるSTOREスイッチを一度だけ切り替えます。これで現在のチャンネルとエフェクトループの設定が、表示されているMIDIプログラムナンバーに本機プロセッサ内で書き込まれます。

これで、ご使用のMIDIコントローラーで現在表示されているMIDIプログラムナンバーにチャンネルとエフェクトループの状態が保存され、次にそのプログラムナンバーを選択した際に再び呼び出されます。もし呼び出されない場合は、上記のステップの1~5を再度繰り返して下さい。

CABCLONE™(キャブクローン) D.I.

このマニュアルの最初の概要の部分で述べたように、本機には1つ(唯一ではないかもしれませんが)、MESAのリアパネル史上最もクールな機能が搭載されています。それが、搭載型CAB CLONE D.I.そしてキャビネットシミュレーター機能です。この搭載型のダイレクトレコーディング機能は、本機の素晴らしいサウンドとフィーリングを捕えて、スピーカーのマイキングを行うことなくダイレクトに、コンソールやコンバーター、またはレコーダーへ送ることが出来るというものです。実際、多くの著名なプロデューサーやエンジニア、またプレイヤー達がこの機能を賞賛しています。



既に高い評価を受けている単体のCAB CLONE™ D.I.からの機能はそのまま、スピーカー補正が行われたD.I.XLRバランスアウト(とヘッドホンアウト)は、スピーカーアウトからの信号をキャプチャーして、ダイレクトに信号に変換するという素晴らしい仕事を行います。リアパネルにある5つの各部分は、ライブスピーカーを同時に使うか使わないかも選択できるので、必要であればダイレクト信号とマイキングされたサウンドをブレンドすることも可能です。

CAB CLONE™のセクションは、以下の各部分で成り立っています:

- ・ **SPKR ON/SPKR OFF(スピーカーON/スピーカーOFF)スイッチ**
スピーカーのステータス(スピーカーを同時に使うかどうか)を選択します。
- ・ **CLOSED BACK/OPEN BACK/VINTAGE(クローズドバック/オープンバック/ビンテージ)スイッチ**
キャビネットのスタイルを3種類から選択します。
- ・ **CabClone™ D.I.アウト**
XLRバランスD.I.アウトの端子です
- ・ **LIFT/GROUND(リフト/グラウンド)スイッチ**
LIFT側にすると、バランスアウトの端子のPin 1がフローティング状態になります。
- ・ **+4/-10 スイッチ**
アウトブットレベルを選択します。

このコントロール群の配列は、おそらく最も効果的でどのMESAアンプにも搭載されるべき機能で成り立っており、機能的に、そして演奏時の楽しみとしての両方の可能性を広げるものです。JP-2Cは、我々のアンプの中で3番目にこのパワフルなツールを装備したアンプとなりましたが、信頼性やトーンを犠牲にすることなく、ライブユースまたはレコーディングにおいてスピーディーかつ便利に使用できるものとなっています。それは間違いなくこのMARKモデルのプロユースなポテンシャルを高め、コンパクトなパッケージに入ったこのモデルをMESAの新しい時代の先駆けのアンプとして、そのカテゴリーのアンプの基準を引き上げるとともにより高みに君臨することでしょう。

SPKR ON/SPKR OFF (スピーカーON/スピーカーOFF)

この小さいトグルスイッチは、CAB CLONEを使って(アンプからの出音無しに)"静かに"レコーディングを行う際に、スピーカーアウトをミュートすることが出来ます。ライブスピーカーもCAB CLONEのXLRダイレクトアウトも両方使用したい場合はSPKR ON、またはD.I.アウトのみを使用したい場合はSPKR OFFを選択して下さい。また、このスイッチをミュートスイッチとして使うことも出来ます(リアパネルにあることと、フロントパネルにはそのためのSTANDBYスイッチもあるので使う頻度は少ないと思われます)。

注意: 重要です! SPKR OFFのスイッチ位置にある際は、自動的に負荷抵抗がスピーカーアウトと接続され、アウトプットトランスへのダメージを防ぎ、またXLR D.I.アウトにて(スピーカーが接続されていない)サイレントレコーディングを行うことが出来ます。SPKR ONを選択すると、内部負荷が無効になり信号がスピーカーアウトに接続されます。スピーカーを接続していない状態で、SPKR ONにスイッチを切り替えるのは絶対にお止め下さい! アンプにダメージを与える恐れがあり、またその場合は保証対象外となりますので十分ご注意ください!

注意: 覚えておいて頂きたいこととして、もしアンプの電源スイッチやSTANDBYスイッチ、GAINやMASTERコントロール(エフェクトループ内のエフェクターのインプット/アウトプットボリュームも同様です)がONになっているのに音が出ない場合は、リアパネルの右端にあるCAB CLONE™セクションのSPKR ON/SPKR OFFスイッチをチェックして、トグルスイッチがSPKR ON側になっているかを確認して下さい。運搬中やセッティング中にスイッチに何かがつぶつかって、スイッチが切り替わってしまっているかもしれません。

CLOSED BACK/OPEN BACK/VINTAGE(クローズドバック/オープンバック/ビンテージ)

本機に搭載されているCabClone™ D.I.は、3つのクラシックな"キャビネット"をシミュレートした"ポイシングモード"と、単体のCabClone D.I.からOUTPUTコントロールを除いた全ての機能を装備しています。シミュレーションはパッシブ形式(ゲインを加えるためのオペアンプは使用されていない)のアナログ技術によるものですが、MESAが45年に渡って世界中のスピーカーのトップブランドと共同開発してきたカスタムスピーカーや、またそれを載せるスピーカーキャビネットをデザインしてきた経験の蓄積から作り出されたものです。

これらCAB CLONE™の"バーチャル・キャビネット"は、異なるスピーカーやゲインの範囲、また異なる楽器やピックアップに対応したダイレクト回路のEQのレスポンスに対応することが出来ます。その選択肢の音のレンジですが、1つはトップエンドが強調されてブライトでオープンなクリーンサウンド(OPEN BACK)、そしてよりコンプレッション感のあるサウンドで高次倍音が抑えられ、温かみがあり、歌うような単音のサウンドまたは厚いハイゲインのリズムサウンド(VINTAGE)、そしてミッドがカットされ、トップとボトムが強調されたレスポンスカーブのCLOSED BACKはヘビー・クランチリズムやハイゲインのソロ演奏に優れています。

クリーンサウンドとオーバードライブサウンドは、これらの異なるキャビネットのタイプをそのサウンドに必要とするので、CAB CLONE™でダイレクトレコーディングをする際は3つのポイシングが演奏するサウンドにマッチするか試してみる必要があります。

スイッチ下側のVINTAGE CABINET(ヴィンテージキャビネット)は、高域のハーモニクスを抑え、コンプレッションが掛かったウォームで丸いサウンドを再現しています。これは、クリーンなジャズサウンドや、ブルースやロックのソロ、特にフュージョンやロック、メタルなどのハイゲインなソロに最適です。このモードではアンプ側のコントロールがより自由になるので、トレブルやプレゼンス(MESAアンプではグラフィックEQの右側2個のスライダー)を幅広く調整し、高音域を強調したりカットしたりすることが可能です。

真ん中のOPEN BACKは、トップエンドが取り出され、高次倍音が多くよりオープンな、立体的で輝くようなサウンドが特徴です。このスイッチ位置は、クリーンサウンドやブライトでアタックの速いオーバードライブの掛かったリズムサウンドに最適です。

スイッチ上側のCLOSED BACKの位置は、MESAのRectifier Traditionalキャビネットに敬意を表し、12"のプリティッシュスタイルの60Wスピーカーを4発搭載した、クローズドバックのスピーカーキャビネットのレスポンスをシミュレートしています。中域がカットされ、トップエンドは勢いのある巨大でワイドなサウンドです。大きく調整された低域やスムーズなビンテージにインスパイアされたリードサウンドがオーバードライブまたはクランチのバックングが必要であればこのモードが良いでしょう。またCLOSED BACKモードはハイゲインサウンドにも最適で、特にライブスピーカーとCabClone™をコンビで使用するとき効果を発揮します。マイキングされたスピーカーによってトップエンドが強調され、またCLOSED BACKモードによってレスポンスが太く調整され、サウンドのバランスが良くなります。

ライブスピーカーのマイキングサウンドとCab Clone™のダイレクト信号をミックスするときはキャビのボイスिंगもそれぞれ試し、ミキシングの際に反対または異なるレスポンスを持ったキャビのサウンドもミックスすると良いかもしれません。

この3つのキャビのボイスिंगを使用すれば、CAB CLONEのレスポンスはほとんどのサウンドのスタイルに合わせて調整することが出来ます。ライブスピーカーを同時に使用するとき、使用するスピーカーが選択したキャビのサウンドに影響を及ぼすかもしれません。使用するキャビの本来のキャラクターによりますが、より敏感にダイナミックになったり、またはサウンドがよりブライトになることがあります。

注意: CAB CLONEの回路は、スピーカーアウトから使用されるどんなスピーカー(抵抗)にも給電を行うので、(ダイナミクスと周波数レスポンスの両面で)アンプのパワー部に影響を受けます。

CABCLONE™ D.I. (XLR アウトプット) このオス型の3ピンXLRアウトプットは、バランス信号をダイレクトにコンソールやリアンプ、レコーダーに供給します。(必要な長さの)標準3ピンXLRマイクケーブルを使用して、ご使用の機器に接続して下さい。次の選択としては、Cab Clone™のスピーカー補正された信号のみでレコーディングを行うか、または左側にあるSPKR ON/SPKR OFFミニトグルスイッチを切り替えてライブスピーカーのサウンドをミックスするかどうかです。

Cab Clone™の回路はパッシブで、特定のアウトプットレベルコントロールが存在しないため、各チャンネルのMASTERコントロールと出力選択(100/60)スイッチで、Cab Clone™のアウトプットのSENDレベルの強度(音量)を決定します。

注意: ダイレクトレコーディングを始める前にまずSTANDBYスイッチが"0"の位置(スイッチ下側)にあるか、そして各チャンネルのMASTERコントロールが"0"の位置にあるかどうかを毎回必ずチェックして下さい。こうすることで、コンソールやプレイバックモニターのフェーダー(INPUTアッテネーター)が既にながら上り上がりすぎている場合の急激な音量のアップ等を防ぐことが出来ます。

また、急な音量アップを避けるためには、コンソールやリアンプ/レコーダーのINPUTトリムもゼロにしておいたほうが良いでしょう。

LIFT/GROUND このスイッチでCab Clone™のバランスD.I.アウトのXLR端子(Pin 1)のグラウンド(アース)を回路またはグラウンドシャーシから切り離すと、大抵の場合(全てではありません)グラウンドループに起因するハムノイズを除去することが出来ます。サイレントレコーディング環境では、どんな小さいノイズも目立ってしまいますが、グラウンドループは最もよくある(そして厄介な)ハムノイズやバズの原因です。この問題をいつでも解決できる万能薬ではありませんが、それでもノイズフロアには有効であり、少なくともハムノイズの主な原因を排除出来ます。

+4/-10 (LEVEL) このスイッチで、工業規格である2つのアウトプットレベル、-10dBと+4dBのどちらかを選択します。-10dB(スイッチ下側)はホームレコーディング時に使う多くのコンソールシステムやエフェクト・プロセッサのインプット段が許容できる、低めのレベルの信号を供給します。+4を選択(スイッチ上側)すると、プロフェッショナル・レコーディングに使用されるラインレベルの信号強度となり、またアンプのセッティングではかなり強めの信号強度となります。

コンソールのチャンネルにあるトリム/インプットアッテネーターを使用すればどちらのセッティング(信号強度)も使えますが、コンソールのインプットでPADは使わないとか、出来るだけトリム/インプットのアッテネーターは最小限にするという考え方です。こうすることで、ノイズ比においてのベストな信号や、出来るだけクリーンでピュアな信号をほとんどいつも得ることが出来ます。別の言い方をすれば、ホームレコーディングでは-10のセッティングを選択します。もしそうしない場合、アンプの出力を小さく設定したとすると、良い信号強度を得るためにインプットトリムを最大にしなければならなくなります(低価格のコンソールでは、コンソールのオペアンプでのノイズが増えてしまいます)。そのような場合は、+4の設定にしてコンソールのインプットトリムを下げれば、コンソールのインプットのトリムコントロールで必要なゲインが下がり、ノイズ比の面でより良い信号レベルに到達出来るでしょう。+4のセッティングは、エンジニアに低めの信

号強度を求められない限り、全てのプロレコーディングやライブの出力補強に使用出来ます。しかし、プロの環境と言えども、チャンネルのMASTERコントロールは最初はゼロ(一番下がった状態)からスタートするか、ステージでそのレベルがどうしても必要であったり、チャンネル間のバランスを取るためにそれが不可能ならば、STANDBYスイッチを"0"の位置(スイッチ下側)にして急激な信号レベルの変化を避けたほうが賢明です。

MESA FTSW(フットスイッチ)



MESA
FT.SW.

7ピンのDINジャックで、MESA JP-2C専用のフットスイッチケーブル、または他の標準7ピンDINジャックのケーブルを接続します。JP-2Cのフットスイッチは、3つのチャンネル、2つのグラフィックイコライザーまたはリバーブに瞬時にアクセスすることが出来ます。ステージやスタジオでMIDIでコントロールしないプレイヤーや、アンプのサウンドや機能を手軽に楽しみたい場合に大変便利です。

注意: このジャックを使用しているときは、決してMIDI機器をMIDIインプットジャックに接続しないで下さい!!

JP-2Cのフットスイッチを使用するために; 7ピンのDINケーブルをリアパネルのMESA FTSWジャック(リアパネルに向かって一番左側のDINジャック)に接続しますが、ピンがコネクタにしっかり差さっているか確認して下さい。また無理やりケーブルをジャックに差さないで下さい! ピンが真っすぐになっていれば、簡単かつしっかりとコネクタに接続出来ます。

そして、7ピンDINケーブルの反対側を、フットスイッチのジャックに接続します。STORE LEDが短く光り、またフットスイッチが接続されるとフットスイッチのLEDも光ります。もし光らない場合は、ケーブルを一旦抜いて、ピンが真っすぐに差し込まれるように再度接続してみてください。またアンプ側もケーブルがしっかり接続されているか確認して下さい。

JP-2Cのフットスイッチを使用すると、チャンネル、EQそしてリバーブの切替が可能になります。

注意: JP-2CフットスイッチとMIDIコントローラーは同時には使用出来ません。どちらか一方を選択してアンプのコントロールを行い、使用しない方のコントローラー用のジャックには何も接続しないで下さい。

MIDI THRU(スルー)/OUT



MIDI
THRU/OUT

この5ピンの標準MIDIジャックは、JP-2CのMIDIコントロール部分のTHRU(スルー)/OUT(アウト)ジャックです。お分かりのように、標準の5ピンDINケーブルであれば接続が可能です(ケーブルのピン周りのプラスチックカバーの厚さにより、差し込んだ時の感触が違います)。

プレイヤーのセッティングによったり、JP-2Cがサウンドシステム内でコントローラーからMIDIコマンドを最初に受け取るか、またはMIDIコマンドをシステムの最後のほうで受け取る場合かどうかによりますが、信号情報はマスターユニットから、またシグナルチェーンの次のスレーブから流れます。どちらにしてもJP-2Cは、適切なMIDI情報をこのジャックを通じてTHRUまたはOUT信号として送信します。

MIDI IN



MIDI
IN

この5ピンのメス型DINジャックに標準の5ピンMIDIケーブルを接続すると、MIDIコマンドがJP-2Cのプロセッサーに入力され、内部処理されます。MIDIフットコントローラー/シーケンサー/ソフトウェアまたはDAWのいずれかからJP-2Cに送信される全てのMIDIメッセージがここで受信され、プロセッサーにて適切に処理されます。またJP-2CはMIDIプログラムチェンジ、コントロールチェンジまたはSysExメッセージに対応していますが、全てのMIDIメッセージまたはコマンドはTHRU/OUTジャックを経由します。

注意: MIDI INジャックを使用しているときは、MESA FTSWジャックにフットスイッチは接続しないで下さい!!

MIDIチャンネル



MIDI
CHANNEL

この小さなポットで、16の標準MIDIチャンネルから特定のチャンネルを選択します。MIDIチャンネルポットを設定することにより、コントローラーで送信設定しているのと同じMIDIチャンネルで受信が出来ます。もし使用する機器が、アンプのチャンネルと機能呼び出すMIDIコマンドのみを使用するギターに特化したものであれば、多くの場合プレイヤーはチャンネル1または16のみを使い続けます。そのほうが覚えておきやすく、また将来的にシステムが複雑になっても十分な余裕を残しておけます。もし、より拡張したMIDIセットアップで使用する場合は、他の楽器やシーケンサーとしてPCをコントロールするときのデータの流れから独立させるために、設定高めな特定のMIDIチャンネルナンバーが必要になることもあります。

JP-2CのMIDIチャンネルポットの位置は、MIDIチャンネルと以下の表のように関連付けられます；ポットのクリック位置(0から時計回りに回します) = MIDIチャンネル

MIDIチャンネルの選択

ロータリーDIP スイッチのポジション	選択される MIDIチャンネル	ロータリーDIP スイッチのポジション	選択される MIDIチャンネル
0	1	8	9
1	2	9	10
2	3	A	11
3	4	B	12
4	5	C	13
5	6	D	14
6	7	E	15
7	8	F	16

100 W/ 60 W (ハーフパワー・スイッチ)

このスイッチでアウトプットセクションの出力を最大の100W(スイッチ上側)から、約半分の60W(スイッチ下側)に切り替えます。60Wにすると、より狭い演奏環境に適した低音量が得られ、またクリップしやすくなります。仕組みとしては、パワー管2本を"スタンバイ"モードにして、フィラメント内は暖かいままですが、高電圧がかからないようにしています。これによって出力が約半分になり、結果としてRMS(定格出力)が約60Wとなります。



60Wを選択するときも、大規模な音量の変化は期待しないで下さい・・・思い出して頂きたいのですが、アウトプットチューブはパワフルなアウトプットトランスによって急いで搔き込まれている状態です。ですので、出力が半分近くまで下がっても、素早いアタックと荒々しいパンチはこの出力モードでもまだまだかなり力強いものとなります。最大の違いは、チャンネル1のクリップが若干早くなることで、全体的に音がブライトになって低中域が若干カットされます。言い換えれば、よりブライトになってプッシュしやすくなり、弾力が出て少し飾り気の無いサウンドとなります。

もし60Wモードのサウンドとフィーリングがお好みであれば、是非そのままの出力で音作りをしてみてください。それでアンプを壊すことはありませんし、パワー管のペアを交代で使用すれば、真空管の寿命も長くなります。

注意：60W出力をフルで、かつより良いサウンドを得たい場合は、スピーカーの接続を8Ωジャックから4Ωジャックに変更して下さい。こうすることによってサウンドがより荒々しくパンチがあるものになり、また60W出力モード選択時により適した抵抗がアウトプットトランスに掛かります。もし8Ωジャックに接続した音がお好みであればそのままでも構いませんが、全体的な出力は若干小さく、音は少し"スローかつルーズ"になって、中域のパンチが弱くなりトップエンドが少しダークなサウンドになります。プレイヤーによってはこの mismatch を好み、特によりビンテージなサウンドを好む場合にアンプをこのように使います。

これで本機についての細かい説明が終わりました。あとは、あなたがこのパワフルなツールをあなたの音楽の中で使用し、未知のサウンドを切り開いていく番です。我々はあなたが経験したことがないようなサウンドを体験し、またそれを新しくエキサイティングなものとして表現されることを願ってやみません。このマニュアルのコントロールや機能について学べば、きっとトーンについての言語(知識)を流暢に確かなものにし、また自由に自信を持って欲しいサウンドを探し求めることが出来るでしょう。

ここにいる我々MESA/Boogieのスタッフ全員より、"MESAファミリーにようこそ、そしてあなたが何年にも渡ってこの新しい製品からインスピレーションや演奏する楽しみを享受されることを心から望みます"。

MIDI 使用マニュアル

機能

- ・ インテリジェント・フットスイッチコントロール
- ・ MIDIフットコントローラーの使用が可能
- ・ 最大256プリセットをメモリーに保存可能
- ・ 素早く簡単にユーザープリセットのダンプ(書き出し)/ロード(呼び出し)が可能
- ・ アンプのトグルスイッチでプログラミングが可能
- ・ ロータリースイッチ(ポット)で瞬時にMIDIチャンネル選択が可能
- ・ MIDIプログラムチェンジとコントロールチェンジ・メッセージに対応
- ・ MIDIソフトウェアのアップデートとバージョン識別が可能

電源の入れ方

アンプの電源がONになっているとき、デフォルトのチャンネル2(CH2)が選択されており、他の機能はSTORE LEDと同様にOFFになっています。少しするとチャンネルと他の機能がトグルスイッチのセッティングに準じて選択され、STORE LEDが短く点灯します。

MESA FTSWジャック

注意: MESA FTSWジャックを使用する際は、MIDI INジャックにいかなるMIDI機器も接続しないで下さい!

MESA FT.SWジャック: 7ピンのメス型DINジャックで、オス型のDINケーブルでフットスイッチを接続します。

JP-2Cフットスイッチが先に接続されている場合は、アンプのSTORE LEDとフットスイッチ上のLED全てが短く点灯します。

JP-2Cフットスイッチ上のボタンが押されているときは、STORE LEDが素早く点滅し、押されているボタンを示します。

JP-2Cフットスイッチは、MIDIチャンネルロータリーDIPスイッチがチャンネル1 (ポジションが"0")に設定されているときに、内蔵のケーブルチェック機能がONになります。そのため、もしJP-2Cのフットスイッチケーブルが壊れているまたはアンプとの接触不良がある場合は、JP-2CフットスイッチのLEDの全てが絶え間なく点滅します(もちろんですが、アンプからまだ電源が供給されていると想定されます)。

注意: JP-2Cフットスイッチケーブルを紛失した場合の緊急対応方法!!!

もし付属の7ピンDIN FTSWケーブルを紛失してしまったときは、一時的な解決方法として(緊急の場合のみ)、標準のMIDIケーブルを使用しますが、MIDIの仕様に準じた5ピンで接続されなければなりません。JP-2CフットスイッチのLEDは、最初にアンプに接続したときに5回点滅してケーブルの状態を示し、それからLEDは消えますがボタンは普通に動作して、選択されたチャンネルや機能に対応します。

複数のJP-2Cをコントロールするには: 複数のJP-2Cアンプを1台のJP-2Cフットスイッチで操作するには、単純にJP-2CフットスイッチをMESA FTSWジャックに接続し、そのアンプのMIDI THRU/OUTジャックと2台目のJP-2CアンプのMIDI INジャックを接続します。3台アンプを使用する場合は、2台目のアンプのMIDI THRU/OUTジャックと3台目のMIDI INジャックを接続します。4台目以降も同様です。

複数のアンプを上記のように操作する場合、JP-2Cフットスイッチが接続されているアンプのみMIDIチャンネル1を選択し、その他のアンプのMIDIチャンネルは、1以外のMIDIチャンネルを選択します。さらに、フロントパネルのトグルスイッチは、アンプから次のアンプへ、同じ設定にしておきます。

MIDI INPUTジャック

注意: MIDI INジャックを使用する際は、MESA FTSWジャックにJP-2Cフットスイッチを接続しないで下さい!

MIDI INPUTジャック: 標準の5ピンMIDI DINジャックです。MIDIコントローラーまたは他の機器のMIDIアウトを接続し、MIDIコマンドをアンプに送信します。MIDIフットコントローラーや他の機器へのファンタム電源は供給されません。

MIDI THRU/OUTジャック

MIDI THRU/OUTジャック: 標準の5ピンMIDI DINジャックです。MIDI INジャックで受信したMIDIコマンドは、このジャックに供給され、またそのまま他のMIDI機器に送信出来ます。また、ユーザープリセットのダンプに送る際はMIDIアウトとして機能します。

MIDIチャンネル

リアパネルのMIDIチャンネルロータリーDIPスイッチで、MIDIメッセージを受信する際のアンプのMIDIチャンネルを選択します。MIDIチャンネルを変更すると、STORE LEDが短く点灯し、変更が行われたことを示します。

MIDIチャンネルの選択

ロータリーDIP スイッチのポジション	選択される MIDIチャンネル	ロータリーDIP スイッチのポジション	選択される MIDIチャンネル
0	1	8	9
1	2	9	10
2	3	A	11
3	4	B	12
4	5	C	13
5	6	D	14
6	7	E	15
7	8	F	16

ユーザープリセット

本機は、MIDIフットコントローラーからのMIDIメッセージを受信できます。異なるプリセット、または異なるMIDIプログラムチェンジナンバーのパッチを保存し、MIDIフットコントローラーから正しいMIDIプログラムチェンジナンバーを送れば、自動的に保存されたプリセットを呼び出すことが出来ます。またいずれのプリセットでも、ONまたはOFFになっているチャンネルや機能にアサインすることが出来ます。本機は、2つのバンク内にある1～128までのMIDIプログラムチェンジナンバーを使用することによって、最大256のプリセットを保存することが出来ます。

- ・バンク1は電源がONになったときの初期設定で、MIDIプログラムチェンジナンバーはこのバンクでプリセットを呼び出します。
- ・バンク2はMIDIのバンク選択メッセージでアクセス可能で、MIDIコントロールチェンジナンバーはCC#0です。
- ・MIDIフットコントローラーからコントロール値を0(ゼロ)にしてMIDIコントロールチェンジナンバーCC#0をアンプに送ると、バンク1が選択されます。
- ・MIDIフットコントローラーからコントロール値を1またはそれ以上にしてMIDIコントロールチェンジナンバーCC#0をアンプに送ると、バンク2が選択されます。
- ・アンプのバンク選択を半永久的(後続のMIDIプログラムチェンジナンバーを受け取る状態)にすると、選択したバンクのプリセットが呼び出されます。例：バンク2を選択した後は、後続のMIDIプログラムチェンジナンバーはバンク2でプリセット(129～256)を呼び出します。バンク1を選択した後は、後続のMIDIプログラムチェンジナンバーはバンク1でプリセット(1～128)を呼び出します。

MIDIプログラムチェンジナンバーに対応したプリセットを保存するには：

- ・MIDIフットコントローラーでMIDIプログラムチェンジナンバーを選択します。
- ・プリセット上でONまたはOFFに設定したいJP-2Cのチャンネルや機能を、アンプ本体のトグルスイッチで手動で選択します。
- ・STOREスイッチをONにすると、STORE LEDが短く点灯し、プリセットが保存されたことを示します。

プリ・ストア "リセット" が必要です：これまでよく見られるモーメンタリーのプッシュボタンスイッチの代わりに、MESA/Boogie伝統の頑丈なトグルスイッチでアンプのチャンネルや機能のON/OFFを行い続けるには、同時にMIDIでアンプをコントロールするための洗練されたソフトウェア/アルゴリズムが必要となります。操作方法がミックスされているので、効果を得る前に(保存される前に)、トグルスイッチは二重で動作する必要があります。例：アンプのチャンネルセレクトトグルスイッチでCH1が選択され、一方MIDIプリセットやコマンドの設定でCH2がアクティブ(ON)になっている場合、プレイヤーがチャンネルをCH1に変更したい時は、アンプのチャンネル選択トグルスイッチはCH2の位置に一旦設定する必要があり、それからCH1の位置に戻します。STOREトグルスイッチがMIDIプログラムナンバーにコミットする(書き込む)前に、全ての機能も同様にリセットされなければなりません。

MIDIバンクセレクトメッセージまたはMIDIプログラムチェンジナンバーが、MIDIチャンネルロータリーDIPスイッチで選択した同じMIDIチャンネルで受信されるときは常に、STORE LEDが素早く点滅し、有効なMIDIメッセージが受信されたことを示します。

プリセットは以下の条件では保存出来ません：

- ・ JP-2CフットスイッチがMESA FT.SWジャックに接続されている。
- ・ 電源投入時またはアンプがMIDIプログラムチェンジナンバーをまだ受信していない。
- ・ ユーザープリセット・ダンプが受信されており、それが成功しているかどうかに関わらず、アンプがMIDIプログラムチェンジナンバーをまだ受信していない。

ユーザープリセット ダンプ(書き出し)とロード(呼び出し)

ユーザープリセット・ダンプは、MIDI SysEx(System Exclusive)ファイルのアンプの256のプリセットと共にMIDI THRU/OUTジャックから送信します。このユーザープリセットダンプ・ファイルは、エラーチェックのためのCRC(Cyclic Redundancy Check=誤り検出符号の一種)バイトも含まれます。

アンプからプリセットをダンプし、他の機器で呼び出すには、MIDI INPUTジャックと、プリセットがコピーされるアンプのMIDI THRU/OUTジャックを接続します。

ユーザープリセット・ダンプファイルは、バックアップとして、またはプリセットを他のアンプで呼び出すために、PCに保存することも可能です。またPCに加えて、MIDI/USBインターフェースと、MIDI SysExファイルの送受信が可能なMIDI アプリケーション/ユーティリティが必要となります(フリーのものはたくさんありますが、Macユーザーにはwww.snoize.comにてSysEx Librarianを、Windowsユーザーにはwww.Midiox.comにてMidi-Oxを入手されることをお勧めします)。

ユーザープリセット・ダンプは、以下の後、実行されます：

- ・ アンプの電源をONにし、MIDIメッセージを受信する前
- ・ アンプがユーザープリセット・ダンプを受信する(成功したかどうかは関係なく)

注意：ユーザープリセット・ダンプ中は、MIDI INジャックとMESA FT.SWジャックには何も接続しないで下さい。

- ・ ユーザープリセット・ダンプを行うには、アンプのMIDI THRU/OUTジャックと別のアンプのMIDI INPUTジャック、またはMIDI/USBインターフェースを接続します。
- ・ STOREスイッチを押すと、STORE LEDが短く点灯し、MIDI THRU/OUTジャックからユーザープリセット・ダンプが送信されます。
- ・ アンプからのユーザープリセット・ダンプファイルの送信が終わると、STORE LEDが再び短く点灯します - それはほんの数秒です。

ユーザープリセットのロード(呼び出し)はいつでも行えます！

ユーザープリセットのロード中は、MIDI THRU/OUTジャックとMESA FT.SWジャックには何も接続しないで下さい。

- ・ ユーザープリセットのロードを行うには、アンプのMIDI INPUTジャックと別のアンプのMIDI THRU/OUTジャック、またはMIDI/USBインターフェースのMIDI OUTジャックを接続します。
- ・ ユーザープリセット・ダンプファイルが送信され、アンプのMIDI INPUTジャックでファイル受信を開始するとすぐにSTORE LEDが短く点灯します。
- ・ アンプからのユーザープリセット・ダンプファイルの受信が終わると、STORE LEDが再び短く点灯します - それはほんの数秒です。

ユーザープリセット・ダンプファイルを受信するとき、最初にJP-2CのRAMメモリーに保存され、不揮発性EEPROMメモリーの中の既存のプリセットには上書きしません。既存のプリセットは、ユーザープリセット・ダンプファイル全体が完全に問題なく受信された場合のみ、上書きされます！

ユーザープリセットのロードに失敗すると、STORE LEDは再びユーザープリセット・ダンプファイルの受信を開始するまで点灯したままとなります。または、他の作業が行われるとSTORE LEDはONまたはOFFになります。ロードが失敗するのはまずファイルが壊れているのが理由で、アンプ内蔵のCRCエラー探知機が、既存のプリセットに壊れたファイルが上書きされるのを防ぎます。

MIDIコントロールチェンジナンバー

MIDIプログラムチェンジナンバーをサポートするため、アンプはMIDIコントロールチェンジナンバーにも対応します(メッセージ・・・MIDIコンティニューアスクントローラーまたはCCメッセージとしても知られています)。

CCメッセージを送信するMIDIフットコントローラーを使用すれば、フットコントローラーのボタンでダイレクト・コントロールまたはアンプの独立機能にインスタント・アクセスすることが出来るので、MIDIフットコントローラーは専用のJP-2Cフットスイッチとして機能します。

大抵のプレイヤーはMIDIコントロールチェンジナンバーまたはMIDIプログラムチェンジナンバーのどちらかでアンプをコントロールします(両方使用することも可能です)。MIDIプログラムチェンジナンバーでアンプのメモリーにプリセットを保存できますが、MIDIフットコントローラーからJP-2Cのチャンネルや各機能(EQ/REVERB/LOOP)にインスタント・アクセスすることは出来ません。MIDIコントロールチェンジナンバーでMIDIフットコントローラーのメモリーにプリセットのコンビネーションが保存できるので、アンプのチャンネルやON/OFF機能にインスタント・アクセスすることが出来ます。

MIDIコントロールチェンジナンバーが、アンプのMIDIチャンネルロータリーDIPスイッチで選択されたのと同じMIDIチャンネルで受信される時は常に、STORE LEDが素早く点灯して有効なMIDIメッセージが受信されたことを示します。

注意: もし予期しないMIDIの動作がある場合は、JP-2CがMIDIコントロールチェンジとプログラムチェンジナンバーの両方を同時に受け取っていることがまず考えられますのでご注意ください。

JP2C MIDI コントロールチェンジナンバーのアサイン

アンプの機能	MIDI CC ナンバー	コントロール バリュー	コメント
CH1	20	64 - 127 (ON)	CH2とCH3が自動的にOFFになる
CH2	21	64 - 127 (ON)	CH1とCH3が自動的にOFFになる
CH3	22	64 - 127 (ON)	CH1とCH2が自動的にOFFになる
EQ1	23	0 - 63 (OFF) 64 - 127 (ON)	
EQ2	24	0 - 63 (OFF) 64 - 127 (ON)	
FXLP	25	0 - 63 (OFF) 64 - 127 (ON)	
RVRB	26	0 - 63 (OFF) 64 - 127 (ON)	
SHRD	27	0 - 63 (OFF) 64 - 127 (ON)	
CH1 & EQ	28	64 - 127 (ON)	CH2とCH3が自動的にOFFになる EQ1とEQ2がトグルスイッチごとにON/OFFになる
CH2, EQ & SHRD	29	64 - 127 (ON)	CH1とCH3が自動的にOFFになる EQ1/EQ2, SHRDがトグルスイッチごとにON/OFFになる
CH3, EQ & SHRD	30	64 - 127 (ON)	CH1とCH2が自動的にOFFになる EQ1/EQ2, SHRDがトグルスイッチごとにON/OFFになる

注意:

- (1) CC#20-#24とCC#27は、CC#28-#30が使用されているときは送信されません。
- (2) CC#20-#22は、それぞれが唯一のものとして、最も優先して受信されます。
- (3) CC#23-#24は、それぞれが唯一のものとして、最も優先して受信されます。
- (4) CC#28-#30は、それぞれが唯一のものとして、最も優先して受信されます。

ソフトウェアのアップデート

ソフトウェアのアップデートは、アンプがSTANDBY状態にあり、MIDI THRU/OUTやMESA FT.SWジャックに何も接続されていないときに実行出来ます。

ソフトウェアのアップデートを行うには、ファームウェア・アップデートファイル(インターネットで取得可能)、PC、MIDI/USBインターフェース、そしてMIDI SysExファイルの送受信が可能なMIDIアプリ/ユーティリティーが必要となります(Macユーザーにはwww.snoize.comにてSysEx Librarian、Windowsユーザーにはwww.Midiox.comにてMidi-Oxというフリーのものを入手されることをお勧めします)。

重要!!! MIDIアプリ/ユーティリティーのセッティングは、以下の要領でソフトウェアのアップデートを行います：

Mac - SysEx Librarian

Menu > Preferences

Transmit Speed = 50% max.

Windows - Midi-OX

Main Menu > View > SysEx

SysEx Window Menu > SysEx > Configure

Low Level Output Buffers, Size = 256 & Num = 64

Output Timing & Delay Between Buffers = 192ms min.

Auto-Adjust Buffer Delays If Necessary = Off/Unchecked

他の機材と同様ですが、ソフトウェアのアップデートを行う前にプリセットのバックアップを取っておくことをお勧めします！

ソフトウェアのアップデートを行うには、まずアンプの電源をONにし、STOREスイッチもONにしてチャンネルスイッチをCH1に設定します。STORE LEDがONとなり、ソフトウェアがアップデートモードにあることを示します。

ファームウェア・アップデートファイルを送信する前にアンプのチャンネルを変更すると、ソフトウェアのアップデートが中断され、STORE LEDがOFFになります。また、アンプも通常の動作に戻ります。

ファームウェア・アップデートファイルを受信する際は、STORE LEDが絶え間なく点滅し、アップデートが終わるまで点滅し続けます。

ソフトウェアのアップデートが完了するのに約30秒かかります。

ソフトウェアのアップデートが完了すると、STORE LEDの点滅が終わり、アンプが通常の動作に戻ります。

ソフトウェアのアップデートに失敗すると、STORE LEDは再びファームウェア・アップデートファイルの受信を開始するまで点灯したままとなります。アップデートが失敗するのは、ファイルが壊れているか、ファイル送信が処理スピードより速いことが原因です。MIDIアプリ/ユーティリティーの設定が上記のようにされていれば、ファームウェア・アップデートファイルが処理が間に合わない状態で送信されるといった、速度に関する問題を防ぐことが出来ます。

ソフトウェアが速度の問題で正しく送信されなかった場合は、STORE LEDは新たなファームウェアファイルが送信されるまで点滅せず、単にアンプの電源をOFFにして、再び電源をONにしてからSTOREスイッチもONにし、チャンネルスイッチもCH1に設定します(前述同様です)。

SysEx Librarianアプリ/ユーティリティーには、ファイルのチェックサムを計算する2つの異なる方法があります。これらのうちの1つまたは2つをチェックして、ファイルが壊れていないかチェックして下さい。

残念ながらMidi-OXにはチェックサムの機能がありませんが、Microsoftから "Microsoft File Checksum Integrity Verifier" と呼ばれるフリーのユーティリティーを取得出来ます。

ソフトウェアバージョン SysEx メッセージ

短いMidi SysExメッセージが各ユーザープリセット・ダンプに付いていますが、それは単にアンプのMIDIインターフェース・ソフトウェアのバージョンのIDを示しています。

このメッセージを見るには、PC、MIDI/USBインターフェース、そして複数のMIDI SysExメッセージの送受信が可能なMIDIアプリ/ユーティリティが必要となります(Macユーザーにはwww.snoize.comにてSysEx Librarian、Windowsユーザーにはwww.Midiox.comにてMidi-Oxというフリーのものを入手されることをお勧めします)。

ソフトウェア・バージョンナンバー = x.y

JP-2C ソフトウェア バージョン SysEx メッセージ = F0 00 01 4B 02 68 x y F7

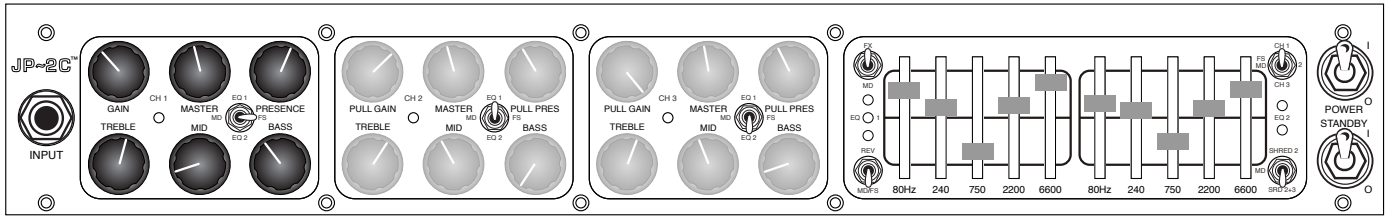
JP2C ファクトリー プリセット

ユーザーメモリー/プリセットナンバー	CH1	CH2	CH3	EQ1	EQ2	FXLP	RVRB	SHRD
1, 16, 31, 46, 61, 76, 91, 106, 121, 136, 151, 166, 181, 196, 211, 226, 241, 256	○							
2, 17, 32, 47, 62, 77, 92, 107, 122, 137, 152, 167, 182, 197, 212, 227, 242	○			○				
3, 18, 33, 48, 63, 78, 93, 108, 123, 138, 153, 168, 183, 198, 213, 228, 243	○				○			
4, 19, 34, 49, 64, 79, 94, 109, 124, 139, 154, 169, 184, 199, 214, 229, 244		○						○
5, 20, 35, 50, 65, 80, 95, 110, 125, 140, 155, 170, 185, 200, 215, 230, 245		○		○				○
6, 21, 36, 51, 66, 81, 96, 111, 126, 141, 156, 171, 186, 201, 216, 231, 246		○			○			○
7, 22, 37, 52, 67, 82, 97, 112, 127, 142, 157, 172, 187, 202, 217, 232, 247		○						
8, 23, 38, 53, 68, 83, 98, 113, 128, 143, 158, 173, 188, 203, 218, 233, 248		○		○				
9, 24, 39, 54, 69, 84, 99, 114, 129, 144, 159, 174, 189, 204, 219, 234, 249		○			○			
10, 25, 40, 55, 70, 85, 100, 115, 130, 145, 160, 175, 190, 205, 220, 235, 250			○					○
11, 26, 41, 56, 71, 86, 101, 116, 131, 146, 161, 176, 191, 206, 221, 236, 251			○	○				○
12, 27, 42, 57, 72, 87, 102, 117, 132, 147, 162, 177, 192, 207, 222, 237, 252			○		○			○
13, 28, 43, 58, 73, 88, 103, 118, 133, 148, 163, 178, 193, 208, 223, 238, 253			○					
14, 29, 44, 59, 74, 89, 104, 119, 134, 149, 164, 179, 194, 209, 224, 239, 254			○	○				
15, 30, 45, 60, 75, 90, 105, 120, 135, 150, 165, 180, 195, 210, 225, 240, 255			○		○			

NOTES

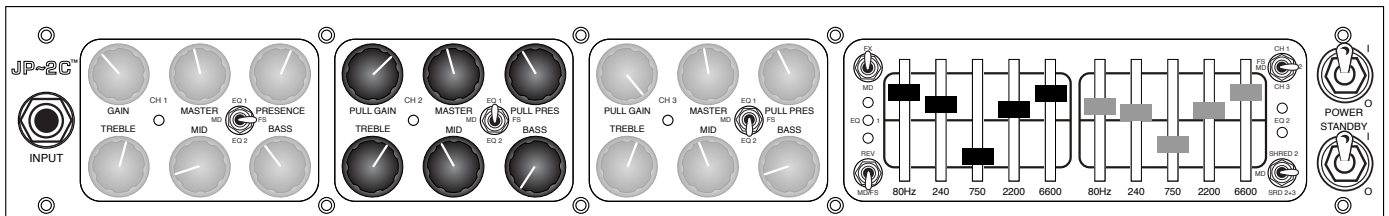
JOHN PETRUCCI SAMPLE SETTINGS

JP – CLEAN



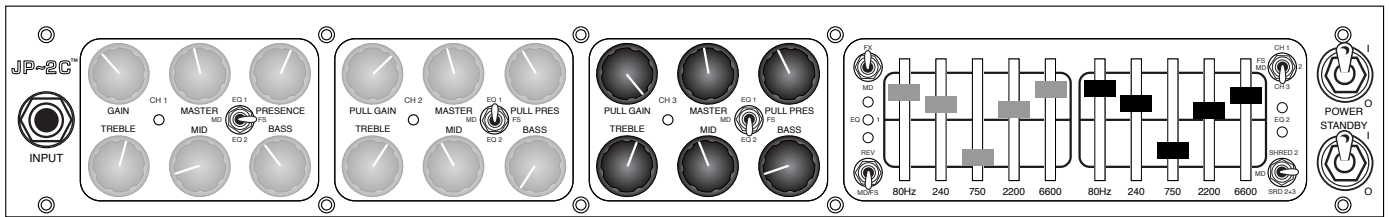
JP – CRUNCH

NOTE: Channel 2 **PULL PRES** Pulled Out with **SHRED** On or Off as needed.



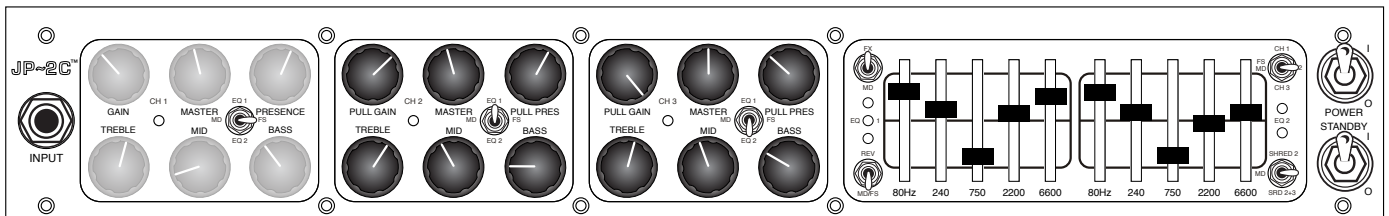
JP – LEAD

NOTE: Channel 3 **PULL PRES** Pulled Out with **SHRED** On or Off as needed.



JP – ALTERNATE CRUNCH/LEAD

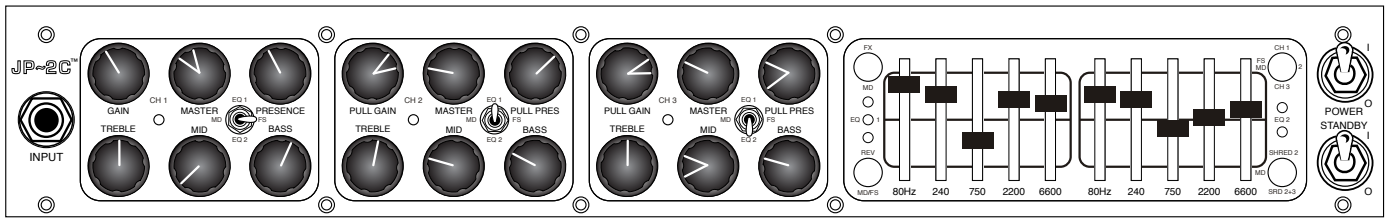
NOTE: Channel 2 **PULL PRES** Pushed In, **PULL GAIN** Pulled Out with **SHRED** Off.
Channel 3 **PULL PRES** Pulled Out, **PULL GAIN** Pushed In with **SHRED** Off.



FACTORY SAMPLE SETTINGS

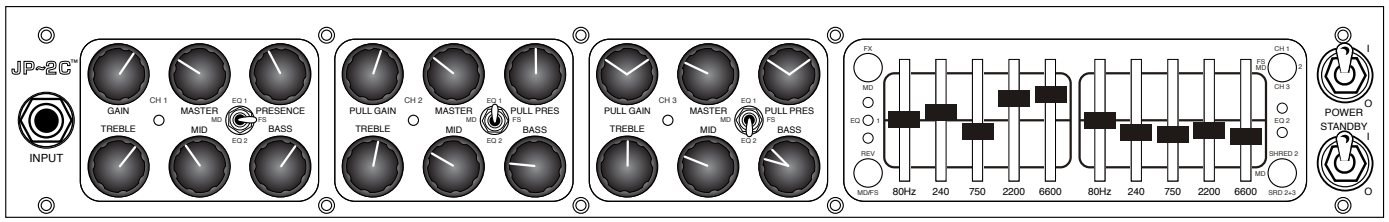
HEADROOM, GRIND & SOAR

NOTE: Channel 3 **PULL PRES** Pulled Out.



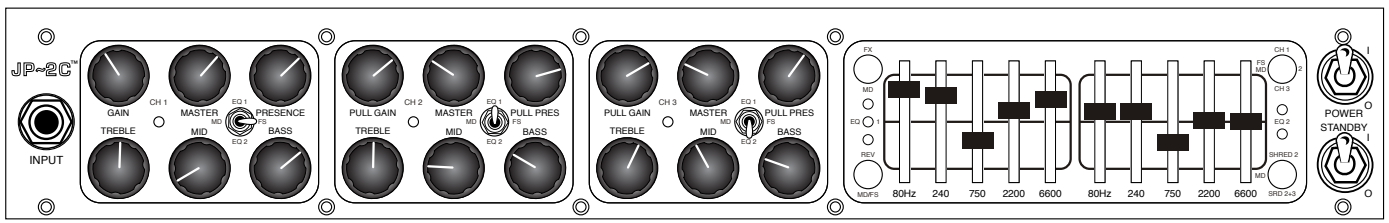
PUNCH, CLASSIC & SOLO

NOTE: Channel 2 and 3 **PULL PRES** Pulled Out.



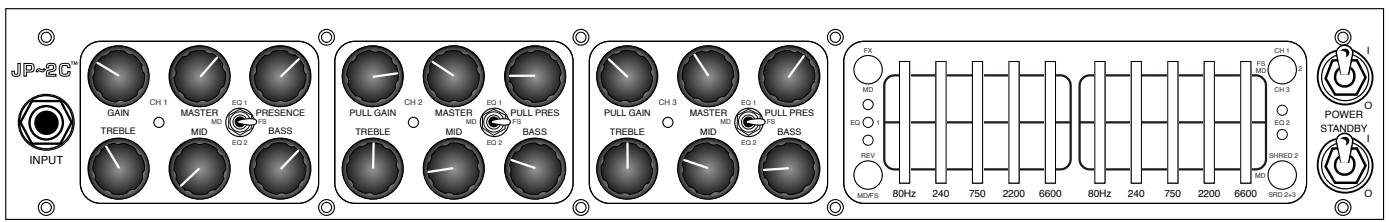
CLEAN, GAIN & MORE GAIN

NOTE: Channel 2 and 3 **PULL GAIN** Pulled Out.

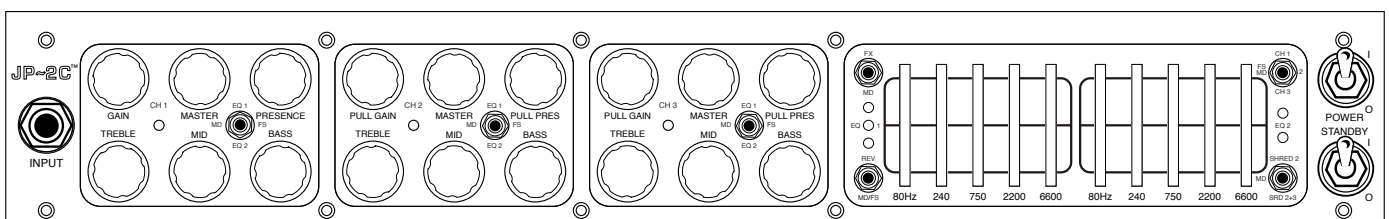
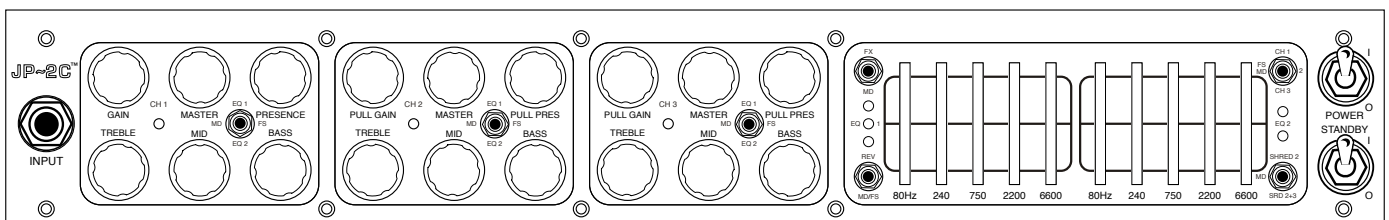
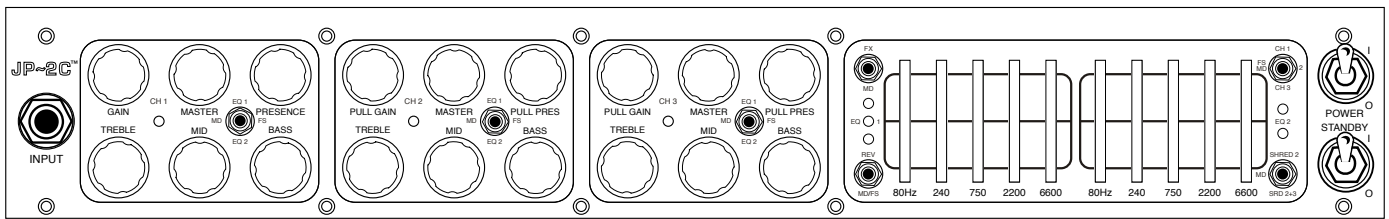
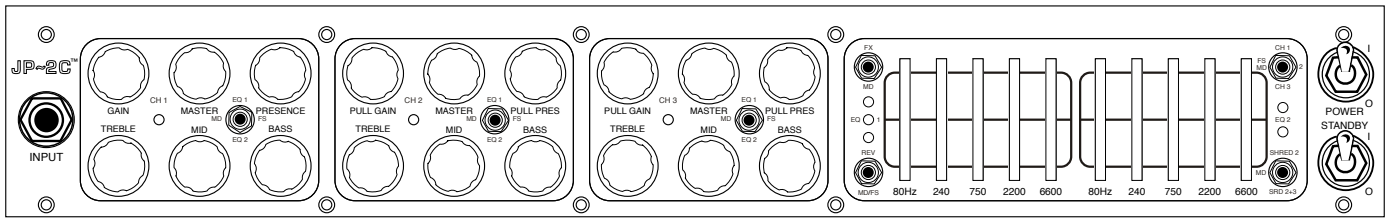


PRISTINE, SING & STING

NOTE: Channel 2 **PULL PRES** Pulled Out. Graphic EQ Optional.



USER SETTINGS



真空管のノイズについて：

状況によって、真空管のノイズを経験したことがあるでしょう。危険性があるというわけではなく、トーンに影響するものです。真空管の交換は電球を変えるようなもので必ずしも技術者に依頼しなければならないというものではなく、実際にやってみるとそう難しいことではありません。(ですが、やはり慣れていない方には楽器店に相談の上、技術者による交換を依頼することをお勧めします)。

真空管を交換する際に最初に我々がお勧めしたいのは、アンプを安定した台の上に乗せて頂くことです(そうすれば腰を曲げることなくアンプ内部の真空管を確認出来ます)。また、真空管を交換する際に照明が当たってチューブソケットがはっきり見えます。アンプを使用した後で真空管に触る際は、大変高温になっていますので十分に注意して下さい！ まだ熱を感じる場合は、布きれ等を使って真空管を持つようにします。また真空管のシルバーの先端の下のガラス部分はあまり熱を帯びていないのでそこを持った方が交換しやすいはずで、また真空管をソケットに固定する際も、外す際と同様に優しく持ちます。

パワー管の問題を診断する：

パワー管の問題は主に二つあります：ショートか、ノイズです。たいていそのどちらかの問題に陥るのですが、診断と処理は通常シンプルです。

フューズが飛ぶときは、軽度か重度かに関わらずたいていがパワー管の故障が原因です。軽度の場合は、電子流が制御格子を超えて、過電流が流れるというものです。音が歪んだり少しハムノイズが聞こえてきたりする場合は、アンプをSTANDBYにしてすぐパワー管をチェックします(赤くなっているかを確認します)。ショートしてる管がバイアスを下げるためたいていペアの二つが熱くまた発光していますが、一つだけが熱く発光している場合は、それだけが原因です。数分間赤くなってなければ、他の二つは問題ないでしょう。

この場合は物理的に真空管の内部でショートは起こらず(電子流が暴れているだけです)、しばらくSTANDBYにしてそれからONに戻せば、一時的には問題はなくなっているはずで、それからまた真空管をチェックして、再び同じ問題が起こるようなら、問題のある真空管がオーバーヒートを起こすので特定することが出来ます。

重度の故障の場合はあまり問題は簡単ではなく、最悪の場合は真空管の内部でショートが起こり、スピーカーから大音量のノイズが発生します。その場合はただちにアンプをSTANDBYの状態にして下さい(おそらくそれまでの間にフューズが飛びます)。またそのようなショートの場合は、真空管内部の部品同士が接触し、故障の状態になります。パワー管の交換と、SLO-BLOタイプのフューズの交換を行い、このマニュアルに書いてある方法で再びアンプの電源を入れます。

真空管のノイズ：

ノイズはしばしば真空管内の汚れが原因だったりしますが、真空管のガラスを指で軽く叩いてみると、ノイズの質が変化して音が聞こえたりします。しかしながら、12AX7を指で軽く叩いたときにスピーカーから何らかのノイズが聞こえるのは通常の状態です。INPUTジャックに近い管の音は大きく聞こえるもので、何故なら二つ目の12AX7管がアウトプットを増幅しているからです。

パワー管は通常指で叩いても常に静かなはずで、叩いた時にパチパチやシーツと音を立てるときは、おそらく問題があります。パワー管のノイズを確認するには、アンプをSTANDBY状態にして、問題のあると思われるパワー管をソケットから抜いて、また戻してみます。ハムノイズが聞こえるようなときは、プッシュ・プル真空管マッチングバランスが崩れています。問題があると思われる真空管を突き止めるときはいつも、POWERスイッチやSTANDBYスイッチを常に片手で触れながら、トラブルが発生したときにすぐにOFF出来るようにしておきます。

もし問題がどこにあるか分からないときは、疑わしいものだけを新品の真空管に交換する方法をお勧めします。チューブ交換の方法については、前述の説明を参考して下さい。同じチェックをするだけなら、技術者にアンプを送って真空管交換を依頼するよりもご自分でするほうが手間ではないかも知れません(それでもやはり自身での交換に不安がある場合は、最寄りの楽器店にご相談下さい)。

プリアンプの真空管の問題を診断する：

チューブ仕様のアンプを使用したことがあれば、プリアンプの真空管ノイズを経験したことがあるかも知れません。しかし、これがすぐに故障に繋がるというわけではありませんので、安心して下さい。この不安を解消する一番の近道は、真空管を交換することです。

最初に、なるべくアンプのパフォーマンスを落とさないためにも、少なくともいくつかの予備のプリ管を準備しておくのが良いでしょう。ちょっとしたプリ管の問題というのは、主に二つのカテゴリーに分けられます：ノイズと、マイクロフォニックノイズです。ノイズの種類は、パチパチ音であったり、ホワイトノイズ、ヒスノイズ、ハムノイズ等があります。マイクロフォニックノイズとは、ゲインや音量を大きくしたときに、金属的かつ周波数の高いサウンドでハウリングを起こすものです。マイクロフォニックノイズは、楽器側の音量を絞ったり、楽器をアンプから離すことでハウリングが止まるかどうかで、問題を分けることが出来ます。

(ハウリングがピックアップのフィードバックによるものであれば、これでハウリングが止まるからです)。また機器の振動やショックによっても引き起こされます("マイクロフォンを叩く"というのが、マイクロフォニックノイズの語源になっています)。

1つのモードやチャンネルのみでプリ管の問題が起こるのであれば、その問題を解決する最善の方法は真空管の交換です。反対に、特定のモードやチャンネルにトラブルの原因が絞れない場合は、全てのモードやチャンネルに関わっている、プリ管に問題があるのかも知れません。あるいは、可能性は低いですが、ドライバー真空管に問題があるかも知れませんので、特定のモードやチャンネルに特定できない場合は、ドライバー管を交換する方法もあります。ドライバー管の問題は、一般的にパチパチ音やハムノイズがアンプの出力から聞こえる、または全てのモードでアンプの出力が弱くなるという症状となって現れます。

たまたま弱ったドライバー管がアンプのサウンドをフラットかつ生気のないものにすることがありますが、ごくまれであるため、同様の問題が生じた場合はやはりパワー管の劣化が原因と考えられます。

トラブルの原因が特定できない場合に、一番早くて確実な方法は、プリ管を同時に交換することです(その後どこに問題があるか分かったときのために、外した真空管を保管しておいて下さい)。INPUTジャックに近い真空管のサウンドがノイズっぽく感じられるかも知れませんが、それはその真空管が一番最初に信号が通る真空管であり、その後で出力が他の真空管により増幅されていくからです。その理由から、"インプット・ソケット"(通常V1と表示されています)に装着する真空管は最もノイズが少ない物を選びます。

プリアンプの後段 - パワー管の直前 - の真空管にノイズがなければ、ほとんど問題は発生しません。このアンプには最も適正な真空管が装着されていますので、真空管を交換する場合は全部一度に外すのではなく、一つ一つ外して取り付けるようにして下さい。また問題の無かった真空管に戻す時は、必ず元々装着してあったソケットに戻すようにして下さい。また真空管を交換するときは、アンプの電源をSTANDBYにしてから行って下さい(そうすることで、スピーカーから大きなノイズが出ることを防げます。そうしないとたとえゆっくり真空管を取り外したとしてもノイズが発生します)。

もしアンプを運搬する必要がある場合は、アンプ本体(シャーシ)を新聞紙等で包んでください。また包んだアンプ本体と段ボール箱に間に、15センチ程の隙間("クラッシュ・スペース")を空けて下さい。エアークッション("プチプチ")等で包むのも良いですが、発泡スチロールはなるべく使用しないで下さい

(運搬中に発泡スチロールが擦れて、その粉がアンプ内部に入り込み、電子部品に損傷を与える可能性があります)。

プリアンプ管は一般的には劣化することはありませんので、気分的な交換はあまり良いアイデアとは言えません。もし交換しても結果が変わらない場合は、元に戻して下さい。まれなことではありますが、もしトラブルシューティングの手順の中で損傷していることが分かった場合は、適切に交換を行って下さい。

注意：プリ管を指で軽く叩いた時に金属っぽい音がするのは異常ではありません。真空管からパチパチ音等が出力されない限りは、通常通りに使用することができます。

スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

MESA/Boogie アンプは、4 オームと 8 オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、4 オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。2 オームを扱う事の出来る数少ないアンプ (例えば MESA (メサ) の Bass 400+) であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値 (例えば 16 オーム等) の場合はアンプを傷める事はありません。

ミス・マッチング:

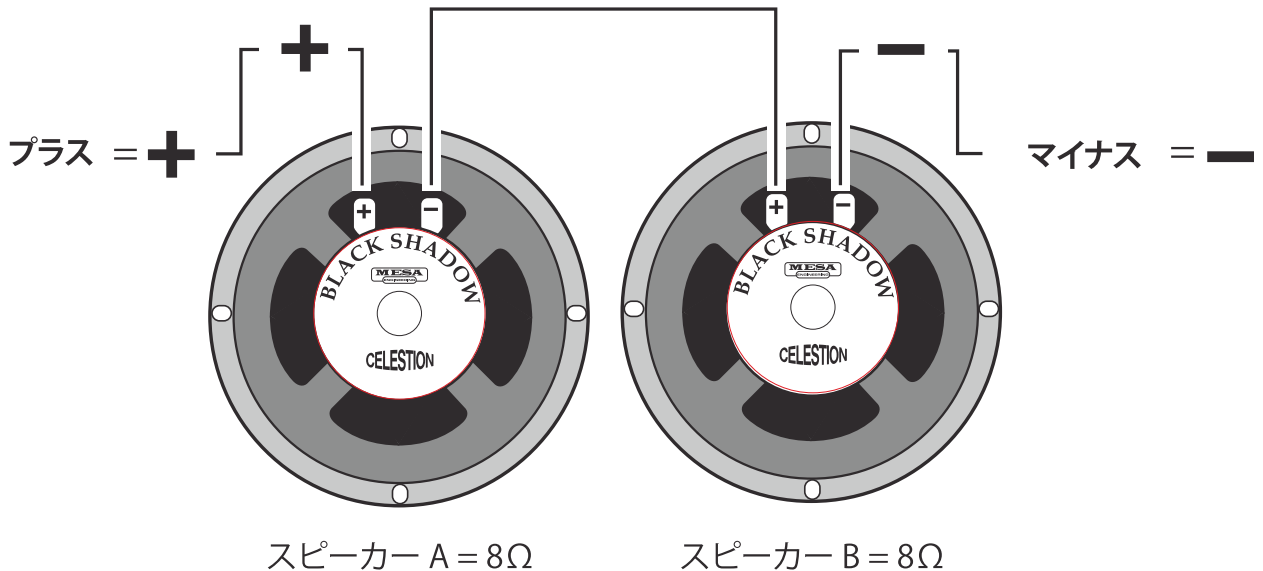
高い抵抗値 (例えば 8 オーム出力を 16 オームのキャビネットに接続) でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の 1 つになるほどです。

キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが 1 台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の 3 種類になります。:

シリーズ (直列):

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、8 オームのスピーカーを 2 台直列に接続した場合は、16 オームになります。

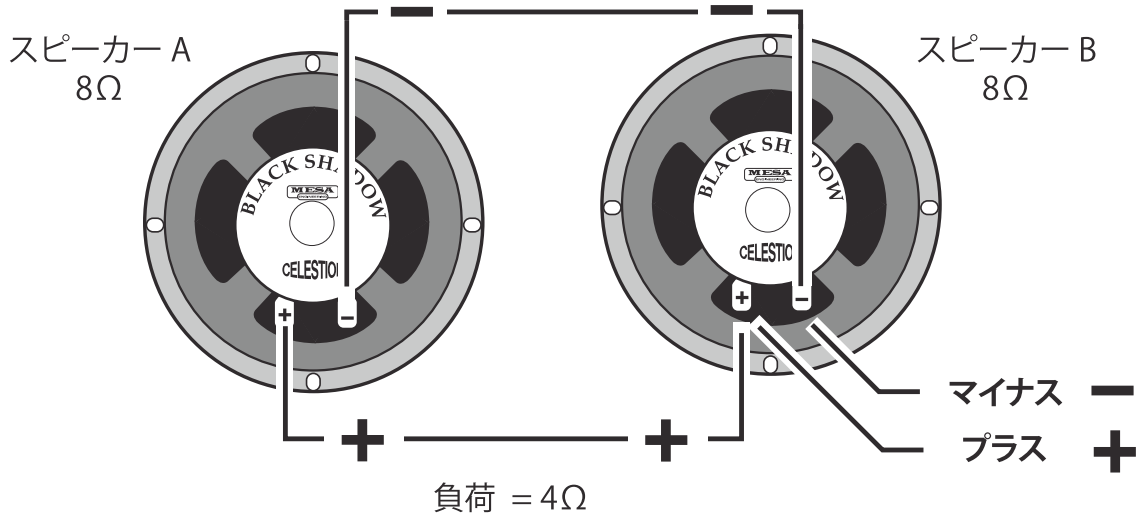


シリーズ (直列): スピーカー A のマイナス端子と
スピーカー B のプラス端子を接続

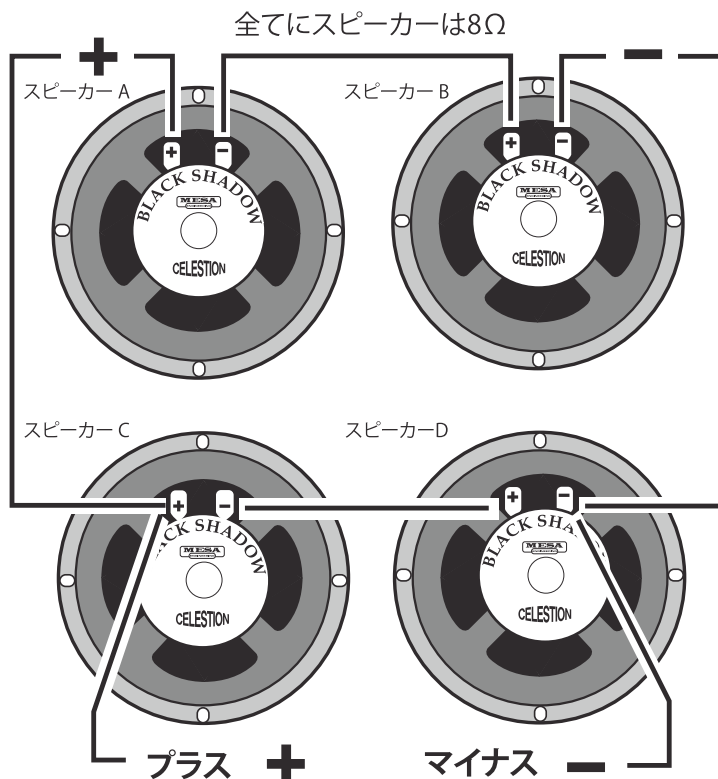
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド(続き):

パラレル(並列):

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。2台の8オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー(例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等)を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば8オームと4オームであれば、 $8 \times 4 \div (8 + 4) = 2.6666$ オームになります。パラレル(並列): スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



シリーズ(直列)とパラレル(並列)の組み合わせ:



これは、2セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかける様にする事です。

スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

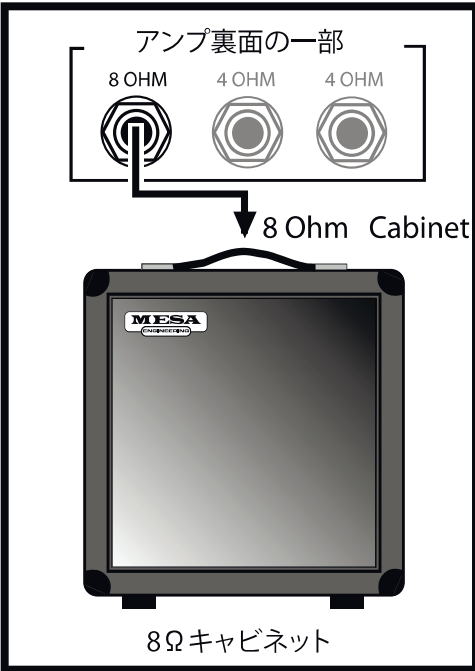
スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

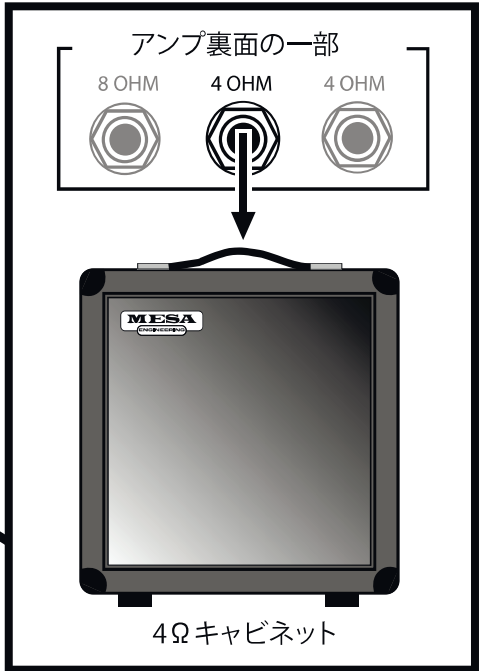
4台の8オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、8オームになります。

接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

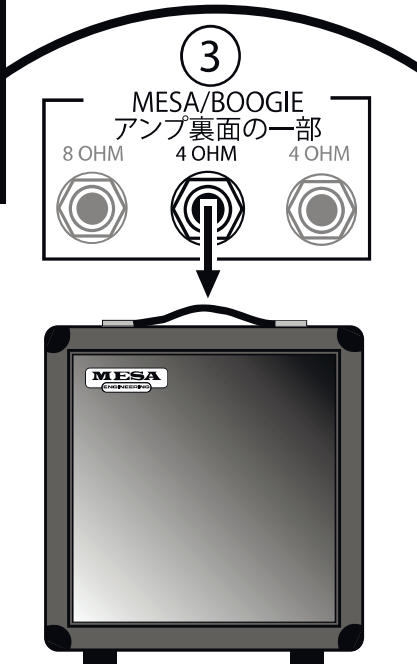
①



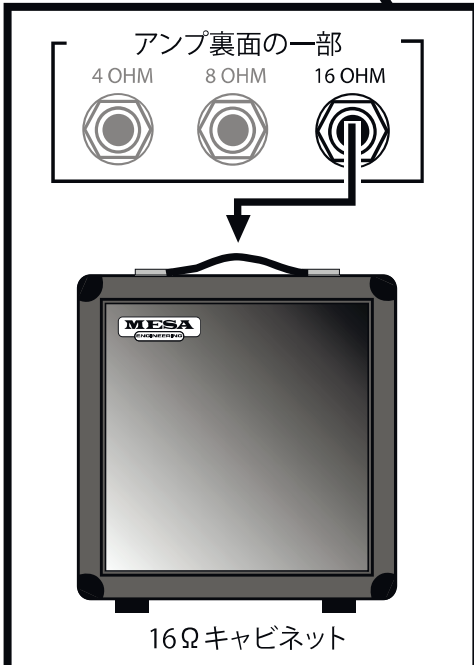
②



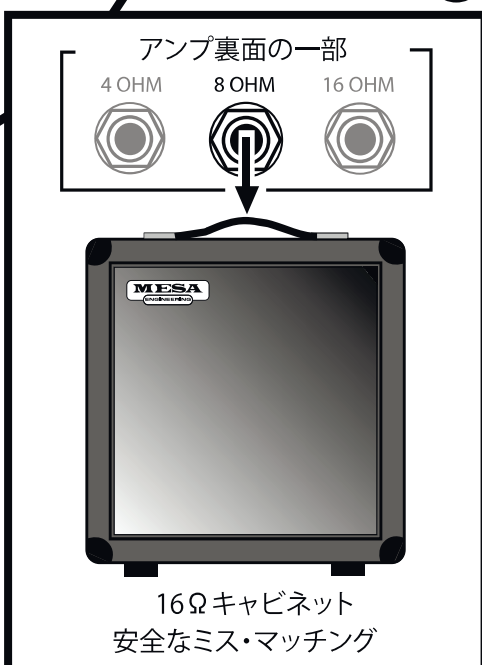
③



④



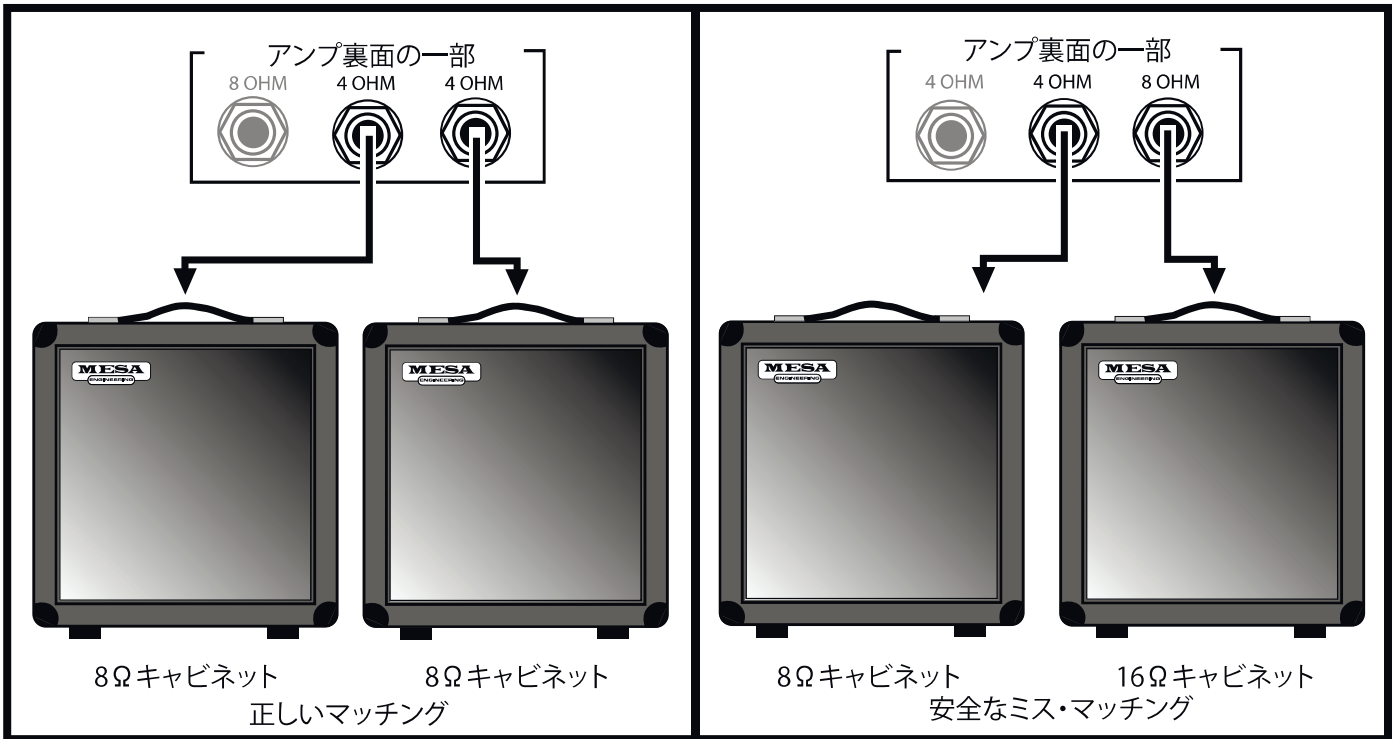
⑤



接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

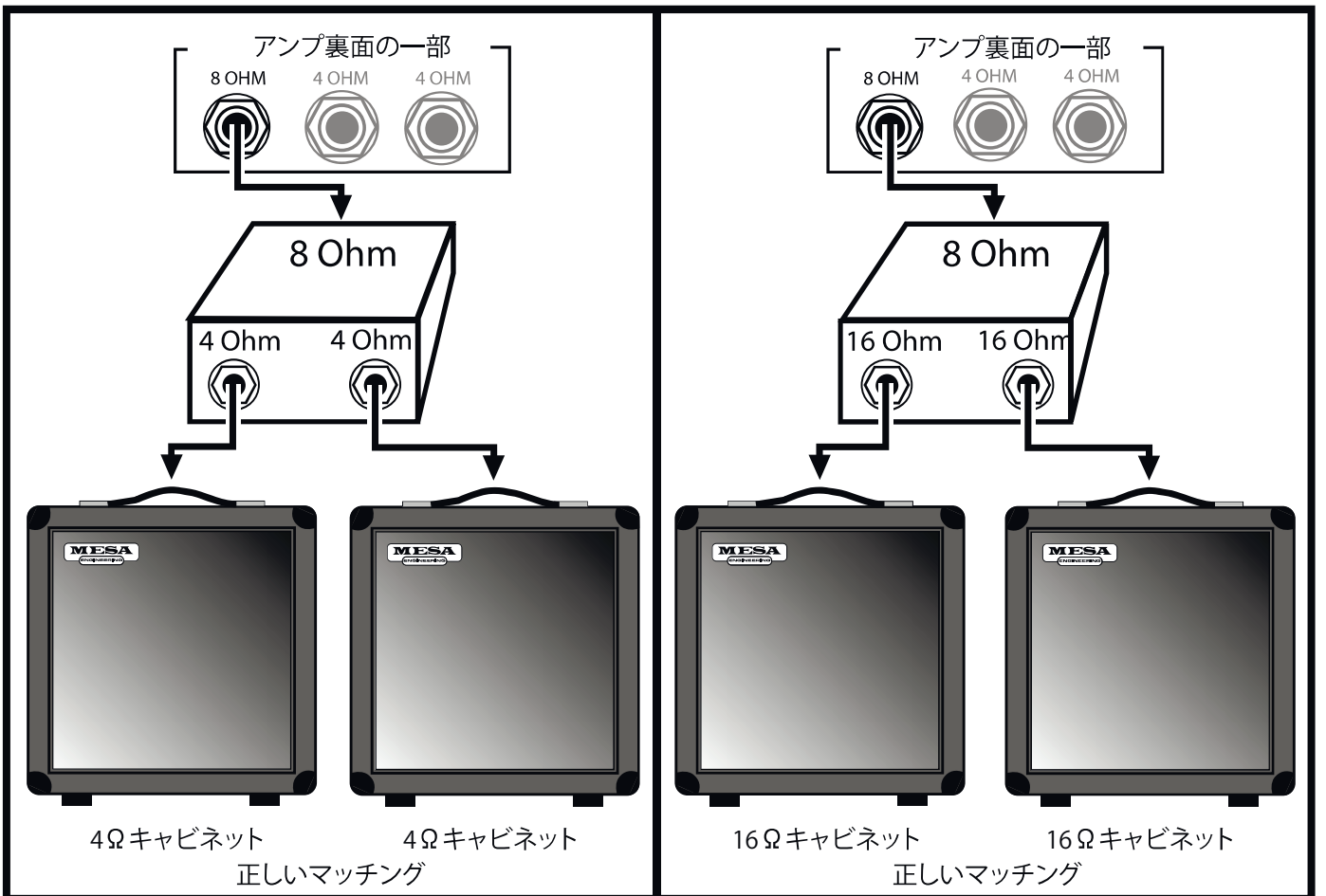
6

7



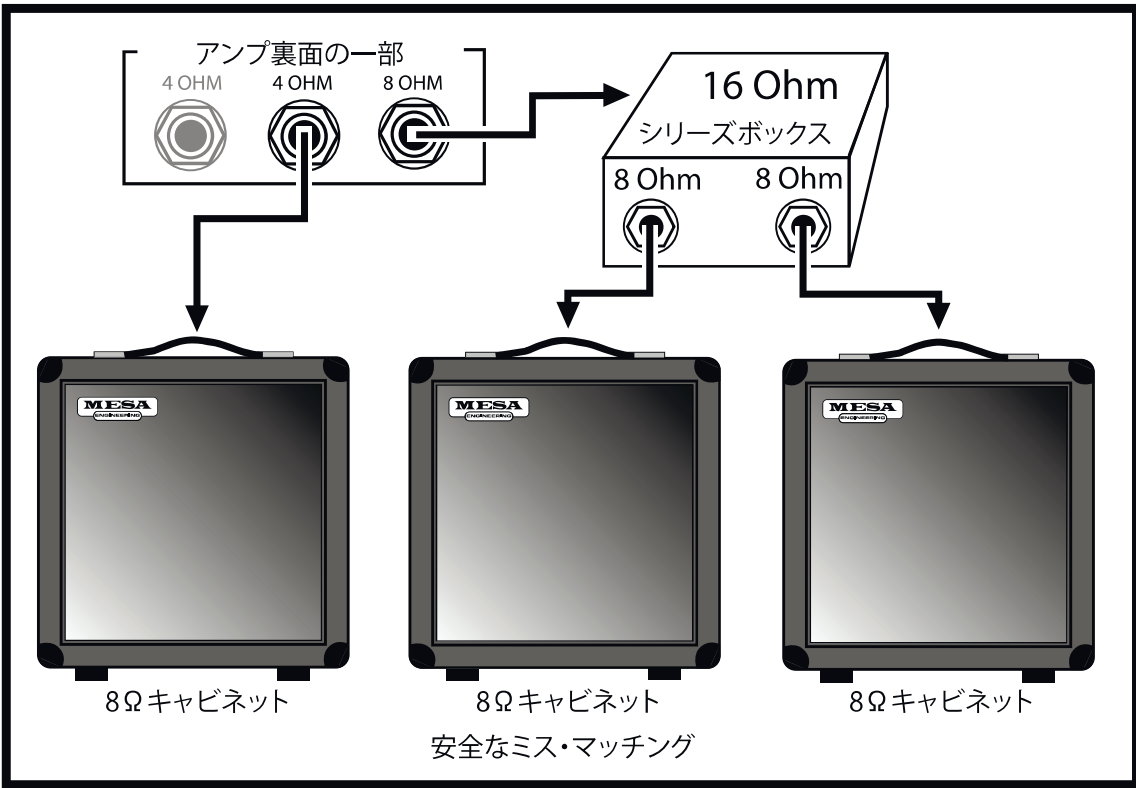
8

9

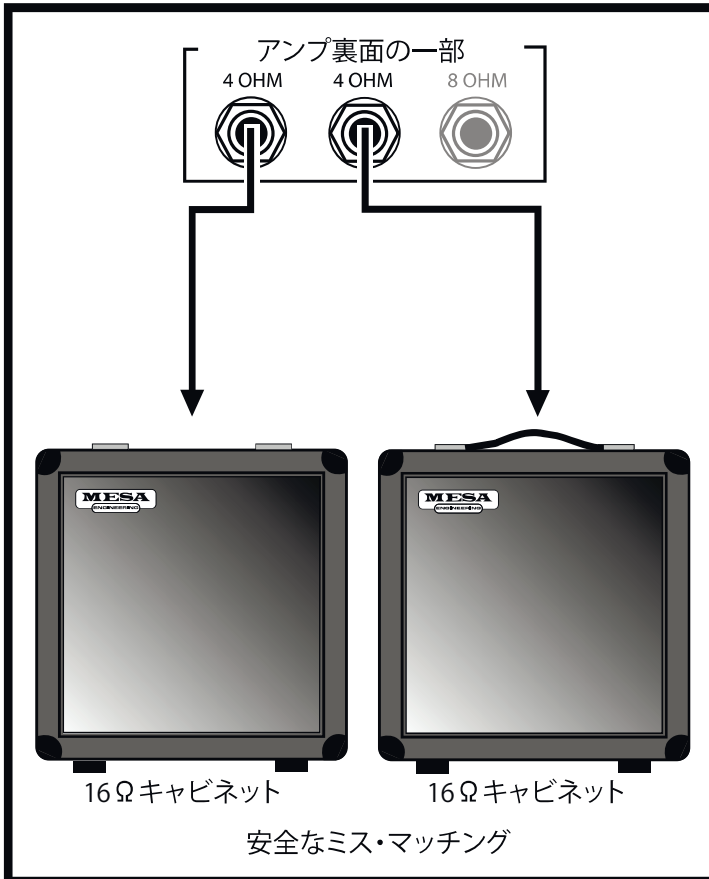


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

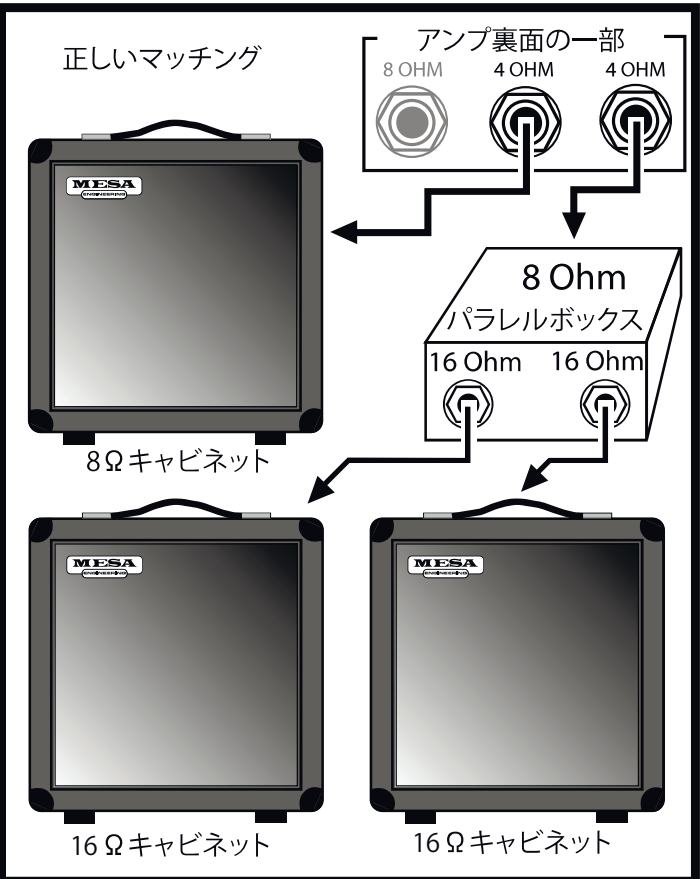
10



11

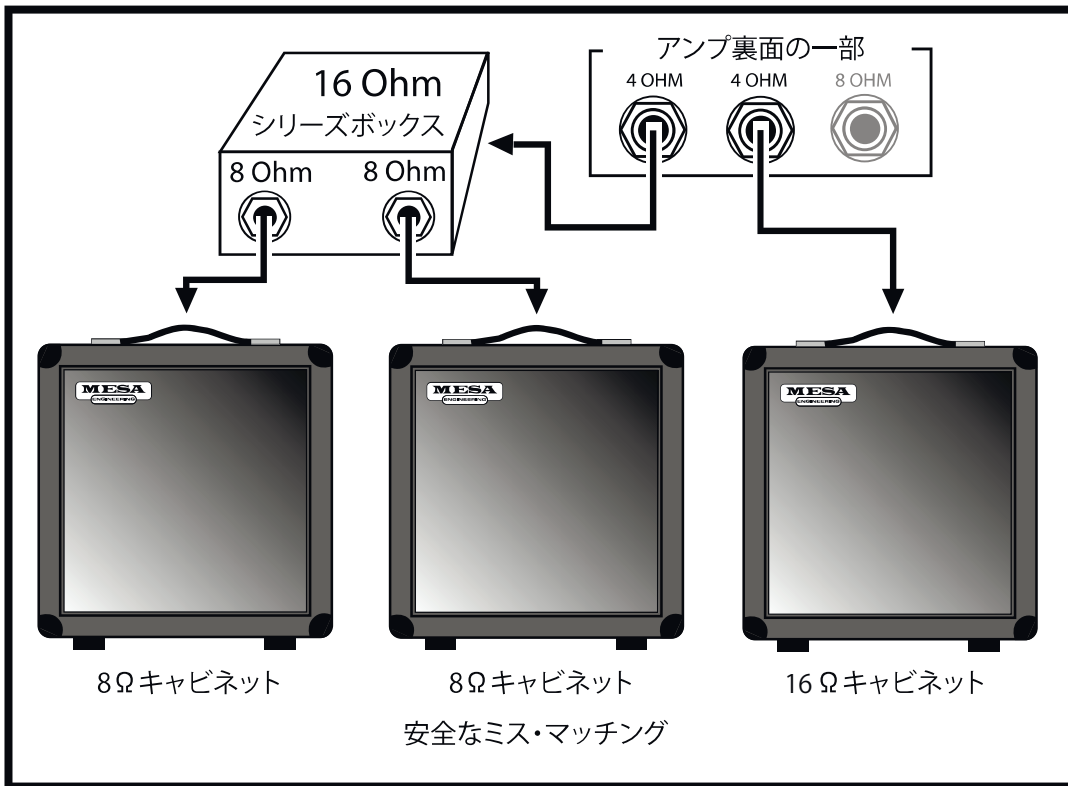


12

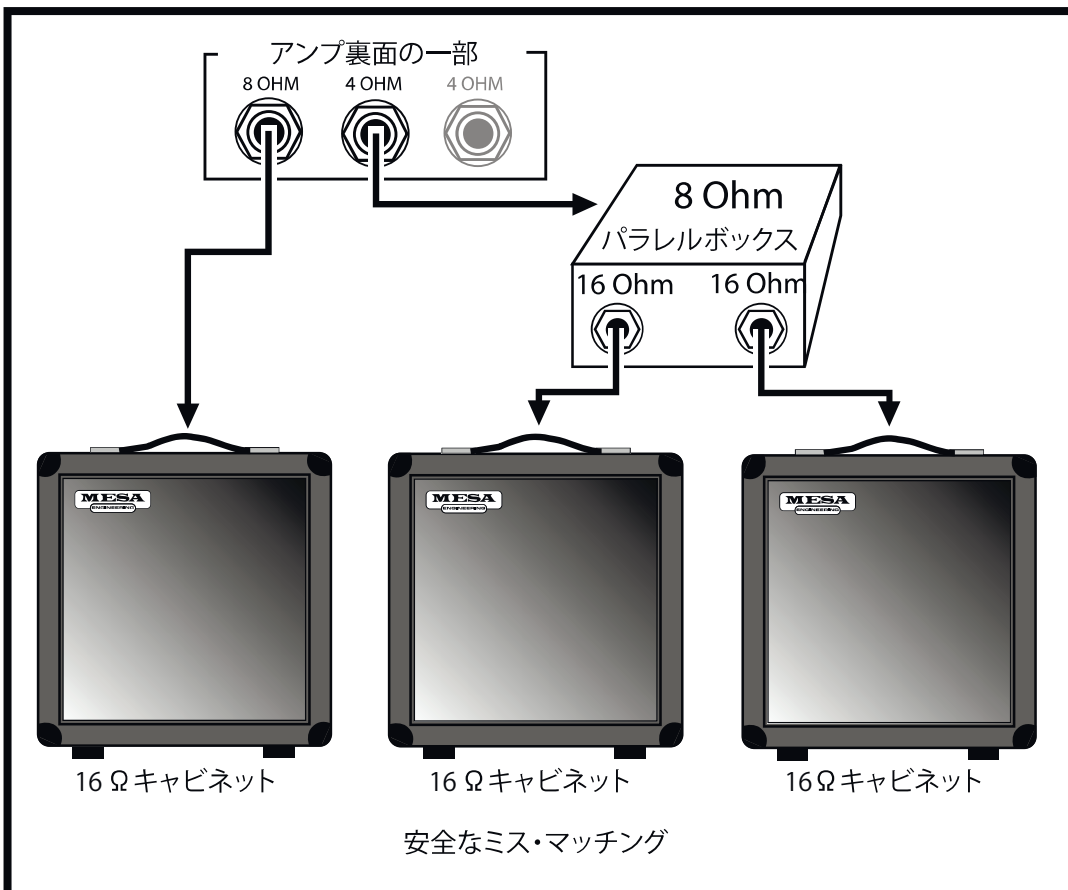


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

13

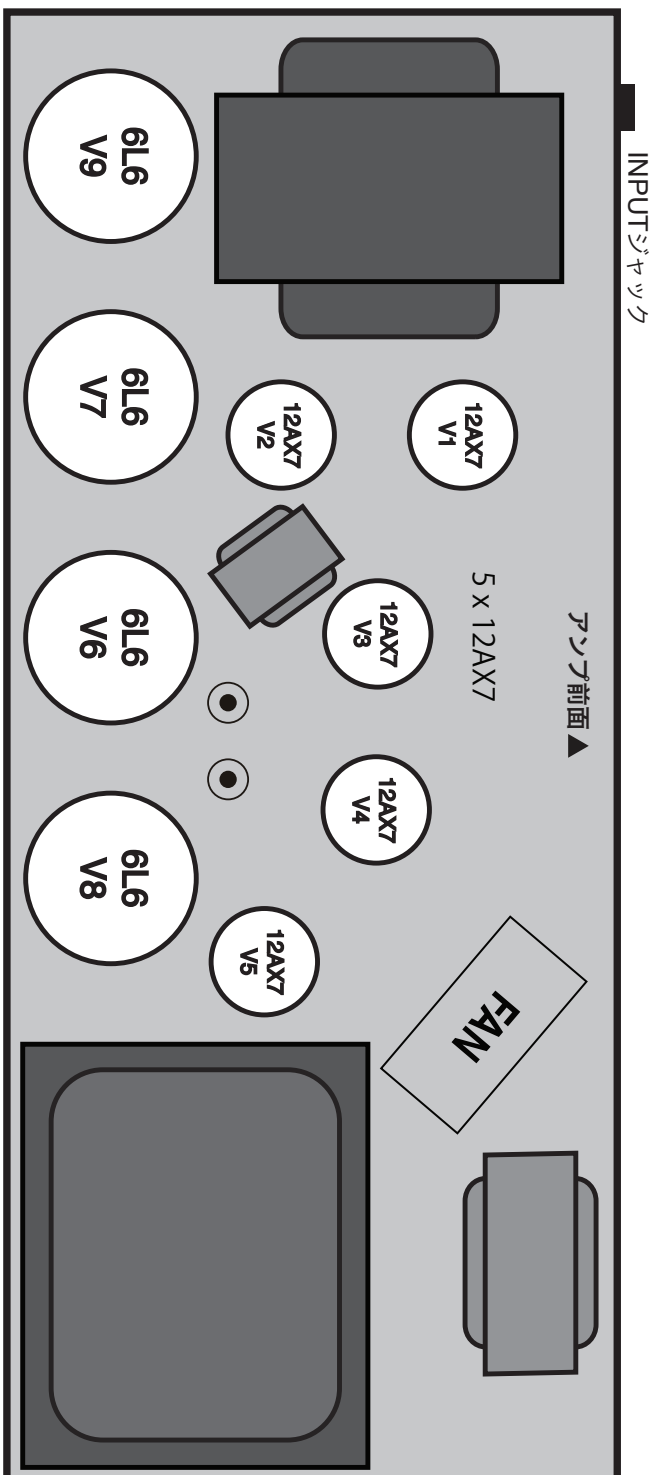


14



真空管を交換する前に、必ずPOWERとSTANDBYスイッチをOFFの状態にしてください！

JP-2C™ TUBE REPLACEMENT DIAGRAM



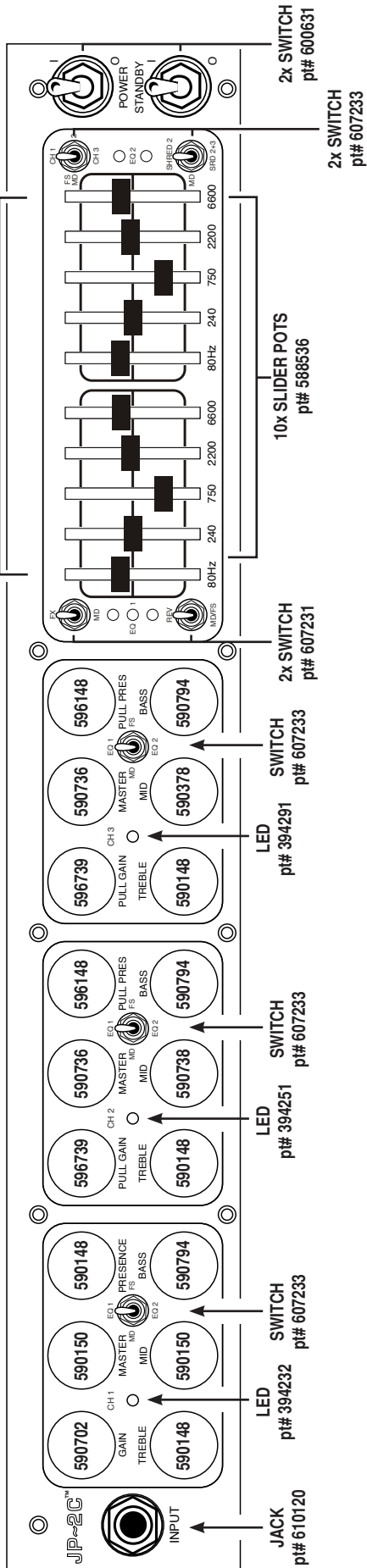
フリ管	
V1A - 入力段 全てのチャンネル	V5A&B - トライバートプエイズ
V1B - Gainステージ第二段 全てのチャンネル	インバーター
V2A - エフェクトルーブ・リターン 全てのチャンネル	
V2B - Gainステージ第三段 CH1 Gainステージ第五段 CH 2&3	
V3A - リバートプ・リターン	
V3B - Gainステージ第三段 CH 2&3	
V4A - Gainステージ第四段 CH 2&3	
V4B - リバートプ・ドライブ	

パワー管	
100 W = V6, V7, V8, V9	
60 W = V8 & V9	

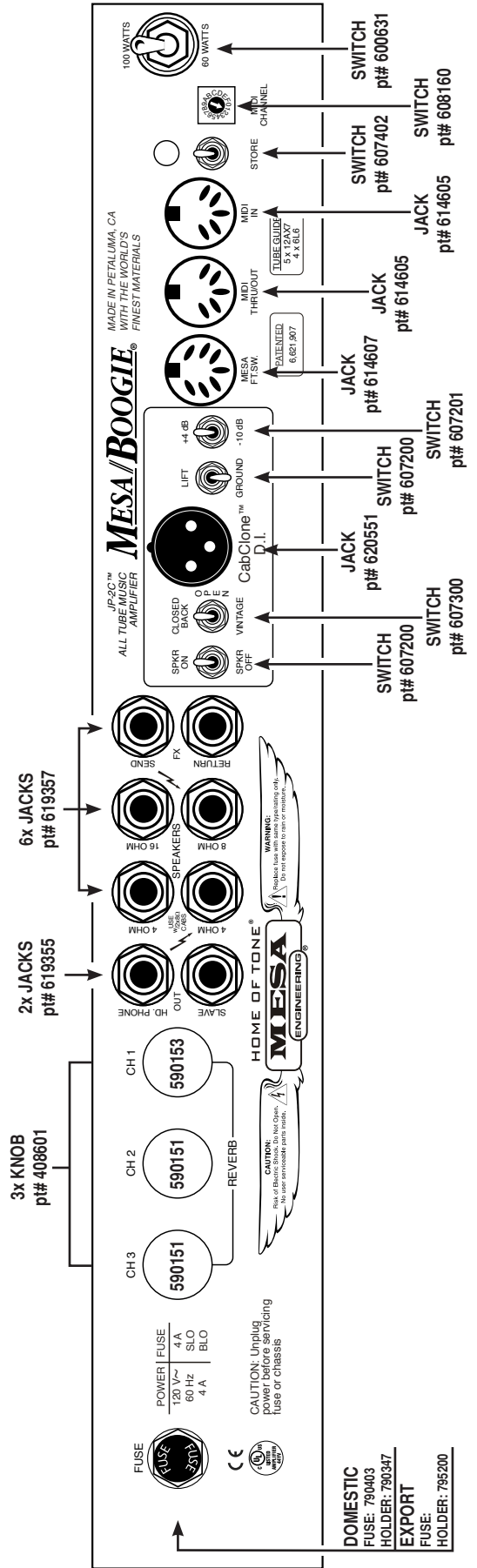
FRONT PANEL: JP-2C

**ALL FRONT PANEL KNOBS
PT# 408601**

10x SLIDER KNOBS
pt# 408580



REAR PANEL: JP-2C



NOTES

NOTES

The Spirit of Art in Technology™



ギブソン・ブランズ・ジャパン株式会社

Email: service.japan@gibson.com

「@gibson.com」からのメールを受信できるよう設定をお願いいたします

お電話でのお問い合わせ窓口：0120-189433（通話料無料）

受付時間 9:30 - 17:00（土、日、祝日、年末年始を除く）